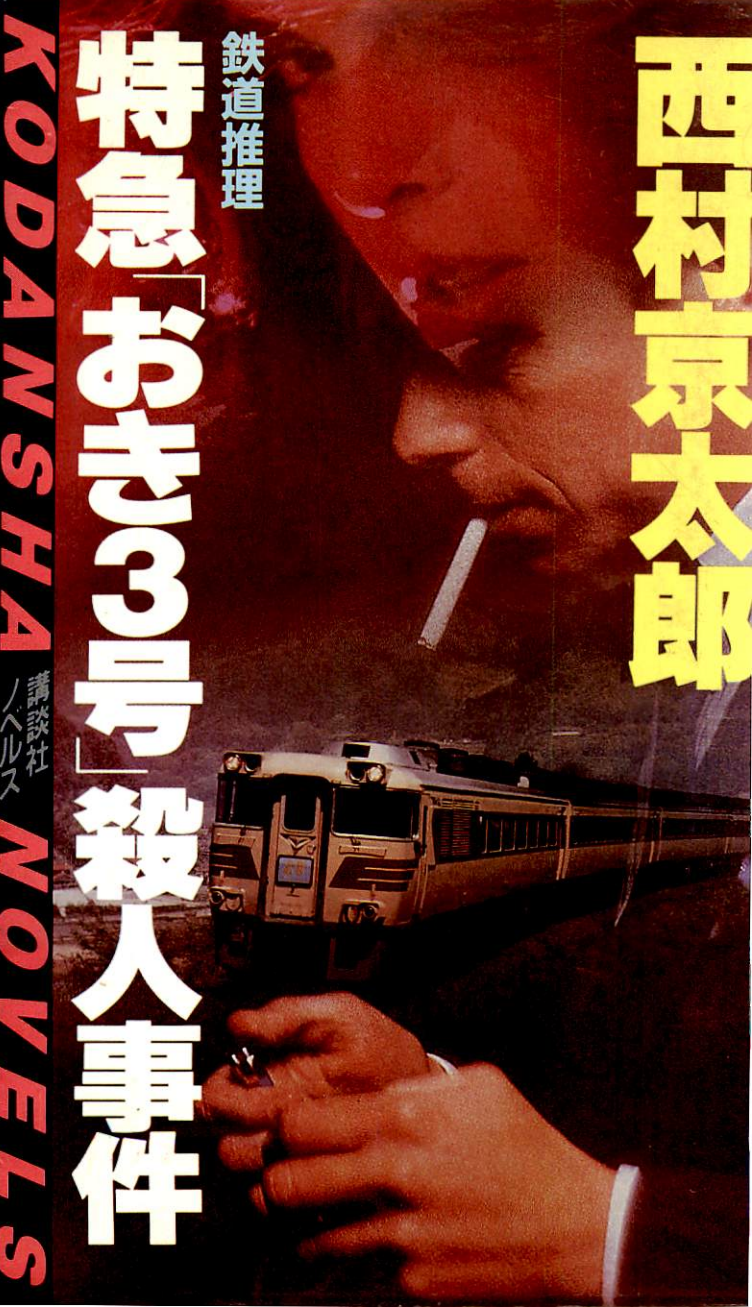

西村京太郎
鉄道推理
特急「おき3号」殺人事件
KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

著者のことば

鉄道で旅をする。車に乗る。歩く。どれでもいいのだが、私は、いつも、日本の地形の複雑さを感じる。何日列車に乗っていても、窓の外の景色の変らないシベリヤの原野や、延々と直線道路が続くアメリカ大陸などとは、決定的に違っている。私は、やはり、日本の旅の方に、複雑な人生を感じることが多い。殺意まで含めた人生を。



特急「おき3号」殺人事件

西村京太郎

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

ブックデザイン＝市川英夫
カバーイラストレーション＝辰巳四郎

目次

関門三六〇〇メートル——7
裏切りの中央本線——57
臨時特急を追え——105
最北端の犯罪——155
特急「おき3号」殺人事件——181

関門三六〇〇メートル

1

いつだって、一一〇番は、鳴りっ放しだ。

うんざりするほど、毎日、事件があり、助けを求める声で、パンクしそうなのだ。

問題は、そうした声の中から、担当官が、真実の声を聞き分けられるか否かに、かかっている。

それだけ、悪戯や、針小棒大な電話も、多いということである。

刑事の数もパトカーの数も、限られている。いい加減な電話で、貴重な力を、分散はさせられないのだ。

殺される、助けてという若い女の悲鳴があって、パトカーが駈けつけたら、犬も喰わない夫婦喧嘩だったということは、しょっ中である。パトカーが、着いた時には、夫婦喧嘩は、おさまっていて、駈けつけた警官に、白い眼をむけたりする。

ばかばかしいが、一一〇番した時には、女の方は、殺されると思ったのだろうから、許せないことはない。

何も事件が起きていないのに、一一〇番して来る人間がいる。

いわゆる一一〇番マニアというやつだ。パトカーが、出動して来るのを見たいので、電話するというのが、意外に、多いのである。

消防車が駈けつけるのを見たいために、一一九番するマニアがいるのと、同じだった。

精神異常者が、一一〇番してくる場合もある。

UFOがやって来て、自分を連れ去ろうとしているという恐怖から、一一〇番してくる若い男がいて、最初は、あわてて、パトカーが、駈けつけたものである。

しかし、二回三回と、重なると、担当官の方も、相手の声を覚えて、引っかからなくなってくる。

事実か、悪戯かわからない時もある。担当官が、迷うのは、そんな時だ。ひょっとすると、大事件につながる声かも知れないからである。

十一月十八日の夜、いきなり飛び込んで来た男の声

も、そのひとつだった。
「キチが危い！」
と、いきなり、切羽つまった声で、いったのである。
「キチ？　キチって、何だ？」
「キチはキチだ。早く、手を打ってくれ。キチが危いんだ。頼む！」
「キチというと、空軍基地みたいなことかね？」
「そうだ。そのキチだよ。早く手を打つように、いってくれ。危険なんだ」
男は、それだけいうと、急に、黙ってしまった。
電話を切ってしまったのだが、一一〇番は、相手が切っても、つながっている。
パトカーが、急行した。場所は新宿東口の公衆電話ボックスだったが、男は、姿を消していた。
二日後の二十日の夜に、また、同じ男の声で、一一〇番が、あった。
「キチが危いんだ。時間がないんだ。手を打ってくれ！」
と、また、その男は、いった。
「くわしい説明をしてくれなければ、手の打ちようがないよ。どんな基地で、どう危いのか、教えて下さい」
担当官は、辛抱強く、電話の声の主に向って、話しかけた。
「おれにだって、くわしいことは、わからないんだ。ただ、恐しいことが、計画されている。だから、キチを――」
突然、男の声が、消えた。
その切れ方が、不自然だった。
今度は、小田急線狛江駅近くの公衆電話ボックスだった。
パトカーが、急行した。
電話ボックスの中には、人影はなかった。が、そこから、五十メートルほど離れたビルのかげに、三十歳ぐらいの男の死体が横たわっているのが、発見された。
背中を、数ヵ所刺されており、それが、死因と見られたが、後頭部も、強打された痕があった。

2

事件を担当した十津川警部は、殺人そのものより、一一〇番との関係を重視した。

殺された男が、一一〇番して来て、「キチが危い！」と、叫んだ声の主かどうか、確証はない。

だが、この電話を受けた担当官は、電話の切れ方が、異常だったと、十津川に、いった。

「私の直感ですが、突然、誰かに、襲われたのではないかと思いました。それで、パトカーに、急行して貰ったんです」

「そのテープを聞きたいな」

と、十津川は、いった。

二日前の第一回のテープも、用意され、十津川は、亀井刑事と二人で、聞いた。

〈キチが危い！〉

〈キチはキチだ。早く、手を打ってくれ。キチが危いんだ。頼む！〉

〈そうだ。そのキチだよ。早く手を打つように、いってくれ。危険なんだ〉

〈キチが危いんだ。時間がないんだ。手を打ってくれ！〉

〈おれにだって、くわしいことは、わからないんだ。ただ、恐しいことが、計画されている。だから、キチを――〉

十津川は、何回も、同じテープを聞いた。

全て、同じ男の声であることは、間違いない。

「単なる悪戯とも、思えませんね」

亀井が、いった。

「そうだな。悪戯なら、もっと、具体的にいうだろう。新宿歌舞伎町で、人が殺されているとか、銀行が、襲われているとかね。あいまいなだけ、真実味があるよ」

「しかし、これだけじゃあ、何のことかわかりませんね。キチというのは、基地でしょうが」
「すぐ思いつくのは、航空自衛隊の基地か、海上自衛隊の基地だが」
「そこを、何者かが、狙うとでも、いうのでしょうか？」
「もし、そうなら、大変だな。日本で、武器が、大量にストックされているところといえば、自衛隊だけだからね」
十津川の頭に、一瞬、とてつもない悪夢が浮んだ。
最新鋭のF15や、攻撃ヘリコプターが盗み出されて、犯罪に利用される光景である。或いは、潜水艦が、丸ごと一隻、占領されてしまう悪夢である。
そうなったら、もう、警察の手には負えない。いや、自衛隊だって、対応に困り、本当の悪夢になりかねない。
「何者かが、自衛隊の基地を襲うという警告だろうか？」
十津川は、自信のない顔で、亀井に、きいた。
「私にも、わかりませんね。襲われたら、大変だとは思いますが」
と、亀井も、首をかしげている。
十津川は、テープをコピーして貰い、それを、捜査一課に持ち帰って、本多一課長にも聞いて貰うことにした。
本多も、聞き終ると、困惑の表情になった。
「自衛隊の基地が、狙われるだろうか？」
「警戒は厳重だし、射殺されることもありますから、まず、ないと思いますが、あったときは、大変です」
「あるとしたら、狙いは、武器か」
「そうですね。日本で、一番、武器が、貯えられている場所ですから」
「暴力団が、武器欲しさに、自衛隊の基地を襲う、そんなことが、現実にあり得るかね？　アメリカなら、考えられるが」
「今は、日本の犯罪も、次第に、アメリカに近づいて来

ていますから、全くないとは、いい切れません」
「一応、自衛隊に、連絡しておくか」
「そうして下さい。男の言葉の調子や、殺されたところをみると、事態は、切迫しているように、思われますから」
と、十津川は、いった。
三上刑事部長を通して、すぐ、防衛庁に、連絡をとった。
その結果、どういう対策がとられるのか、警告は、無視されるのか、わからないままに、十津川たちは、成城署に、捜査本部を設け、殺人事件そのものの解決に、当った。
まず、被害者の身元である。
所持品が調べられた。財布はなかった。小銭が、ポケットに、六百三十円入っていただけである。
安物の腕時計。背広も、コートも、靴も、上等なものではなかった。上衣に、名前は入っていない。
身元を証明するものは、何も、持っていなかった。
身長百七十センチ。体重六十五キロ。靴は二十五。平均的な日本人の感じである。
指紋も、照合されたが、前科者カードには見つからなかった。
問題の公衆電話ボックスと、死体のあったビルの周辺で、聞き込みが、行われた。
だが、一一〇番があったのが、午後十一時十六分。死体が発見されたのが、十二時五分という深夜では、目撃者は、なかなか、見つからなかった。
被害者が、電話の主とすると、犯人は、いきなり、後頭部を殴りつけて、気絶させ、ビルのかげまで運んでから、背中を刺して、殺したと思われる。血痕が、ビルのかげだけにしか、付着していなかったからだ。
夕方になって、本多課長が、捜査本部に、姿を見せた。
「防衛庁の方は、どうでした？」
と、十津川の方から、本多に、きいた。
「向うさんは、歯牙にもかけていないね。そんなこと

は、あり得ないというんだ。全ての基地は、二十四時間、警戒態勢が敷かれているし、五人や、十人で、襲撃できるものじゃないと、いっている」

「そうですか」

「四課に、暴力団の動きを、聞いてみたんだが、それらしい動きは、全くないと、いっていたよ。どの組でも、武器は欲しがっているが、自衛隊の基地を襲撃するだけの勇気のある組は、ないだろうということだ」

「現在、抗争中の二つの組織は、どうですか？　海外での武器調達に失敗して、眼を、国内に向けたということは、ありませんか？」

「なさそうだね。今度、それに失敗したら、それこそ、警察と、自衛隊の両方を、敵に廻してしまうからね」

「自衛隊の基地を狙うとすれば、大きな組織だと思うのです。それも、武器を、緊急に必要としている大きな組織です」

と、十津川は、いった。

「そうなら、暴力団しかないねえ」

「そうなんです。その暴力団の線が消えてしまうと、自衛隊の基地じゃないのかも知れません」

「他に、基地と呼べるものがあるかね？」

「それを、探してみます」

十津川は、本多に、いった。

被害者の身元を調べるために、似顔絵を作り、新聞に公表した。が、一一〇番とのやりとりは、秘密にした。

十津川は、部下の刑事たちを集めると、黒板に、「基地」と書いた。

「自衛隊の基地以外に、何か、考えられたら、ここに、各自で、書き出して欲しい。どんな基地でも構わないんだ」

と、いった。

刑事たちが、勝手に、黒板に、書き込んでいった。

宇宙基地
登山の基地キャンプ
南極の昭和基地

そこまでは、簡単に書かれていったが、急に、止まってしまった。

「ないもんですね」

亀井が、感心したように、いった。

普通、「基地」という言葉でいわれているものが、軍事的なものだからだろう。

その亀井が、翌日、捜査本部に出てくると、いきなり、チョークを手にとって、黒板に、

〈車両基地〉

と、書いた。

「昨日、家に帰って、何気なく、息子の本を見ていたら、この言葉にぶつかったんです。国鉄や、私鉄では、車両基地という言葉を使っているんです」

と、亀井が、十津川に、説明した。

「そういえば、カメさんの息子は、鉄道マニアだったね」

「そうです。マニアの間で、車両基地の見学ツアーなども、設けられているそうですよ。車両基地は、新幹線も含めると、何ヵ所もあるそうです」

「機関車や客車を、とめておくところだろう？」

「そうです。大きな基地になると、何百両という車両が、配置されているようです」

「しかし、カメさん。誰かが、多分、何人ものグループだろうが、国鉄か私鉄の車両基地を襲って、何をするんだろう？　別に、そこに、金塊が貯蔵してあるわけじゃないだろう？」

「そうです。機関車、客車、時には、貨車も、置いてありますが、それだけです」

「一両、何トン、いや、機関車なら、何十トンか。そんな重いものを盗んでも、仕方がないんじゃないかね？　第一、売れないだろう？」

「そうですね。買い手が、いませんね。鉄道関係者以外、必要ないわけですから」

「そうなんだよ。マニアが欲しがるかも知れないが、あんな大きなものは、隠して、持っていられない。名画な

ら、盗品を買って、ひそかに、楽しむことが出来るがね。それに、レールの上を走らせなければ、運べないだろう？」

「そうですね」

「車両基地なら、職員が沢山いるから、その給料を狙うということも、考えられなくはないが」

「いや、それもないと思いますね。給料は、今は、銀行振込みです。狙うなら、大きな駅の一日の売上げの方でしょう。東京駅ぐらいになれば、一日の売上げが、一億円をこえるといいます」

「すると、国鉄、私鉄の車両基地を襲う意味は、ほとんど、なくなってしまうな」

「そうですね。すると、一一〇番の『キチ』は、車両基地では、ないのかも知れませんね」

亀井も、急に、元気がなくなった。

金が欲しければ、犯人は、車両基地なんかより、銀行か、郵便局、或いは、農協を狙うだろう。その方が、確実に、金があるからである。

しかし、一一〇番のテープは、何度、聞いても、「キチ」である。

それは、「空軍基地みたいなものか？」ときいたのに対して、「そうだ。そのキチだ」と、男は、いっている。

つまり、基地なのだ。

十津川は、もう一度、黒板の文字に眼をやった。

どう見ても、四つ並んだ基地の中では、鉄道の車両基地が、一番、可能性があると思うのだ。

宇宙基地は、日本では、問題にならない。

登山の基地（ベース）キャンプが、危いのを、一一〇番しても、仕方がないだろう。

外国の山だとすると、日本の警察の出る幕はないし、国内の山なら、その県の警察に電話すべきだろう。

南極の昭和基地も、警察の権限外である。

この三つよりは、自衛隊の基地の方が、まだ、現実性がある。

しかし、これも、自衛隊が、ガードするだろう。

やはり、残るのは、車両基地なのだ。

十津川は、国鉄本社に行き、これまでに、いくつかの事件で、顔なじみになっている総裁秘書の北野に、会った。

「車両基地ですか」

と、北野も、変な顔をした。

「そうです。車両基地が、グループに襲われる可能性がありますか？」

十津川は、きいてみた。

「さあ。そのグループが、何のために、車両基地を襲うのか、わからないのでは、お答えのしようがないんですが」

「その点、私にも、わからないのですよ。ただ、可能性が、否定できないので、弱っているのです」

「しかし、機関車や客車を盗んでも仕方がないでしょう。第一、よほど大きなトラックじゃないと、運べませんよ」

「そうなんです。国鉄の車両基地というのは、全国で、どのくらいあるんですか？」

「車両基地という名前は、本当は、ついていません。全国に、鉄道管理局があって、その中に、運転所、運転区、機関区、電車区、気動車区、客車区などがあって、それを、車両基地と呼んでいるわけです」

「なるほど」

「少くとも、二百はありますね」

「そこに、車両が、配置されているわけですね？」

「そうです。小さいところでは、七、八両しか置いてありませんが、大きいところでは、五百両を越す車両が、配置されていますね」

「そのどこかに、例えば、金塊が置かれているというようなことは、ないでしょうね？」

と、十津川がきくと、北野は、笑って、

「そんな隠し財産があれば、赤字国鉄だから、とうに処分して、赤字補塡に、当てていますよ」

「まあ、そうでしょうね」

と、十津川も、笑ってから、

「車両基地で、一番、金目のものというと、やはり、車

両ですか？」
「そうでしょうね。新幹線基地なんかは、特に、そうです。何億円という車両が、ずらりと、並んでいますから。しかし、盗み出せるものじゃありませんよ。盗んでも、置き場所がないと、大きなトレイラーにのせて運ぶにしても、目立つし、のろのろとしか運べません。すぐ、見つかってしまいますよ」
「部品を盗むということは？」
「たまに、鉄道マニアが、ブルートレインの機関車についているヘッドマークなんかを盗みに、車両基地に忍び込んだりしますがね。それは、マニアで、単価は知れているものですから、グループで盗んでも、仕方がないと思いますね」
「そうでしょうね。考えると、車両基地に、忍び込む理由が、ないんだな」
「目的がわかれば、いろいろと、考えられますが」
と、北野が、いう。
「それが、全く、わからないのですよ。ただ、事態が、切迫していることは、明らかです」
「なぜ、そう思われるんですか？」
「一一〇番して来た男の声の調子です。それに、時間的に、余裕があれば、殺されもしなかったと思いますね」
「仲間が、殺したと思うんですか？」
「そうです」
「なぜです？」
「一一〇番した男が、問題のグループの一員でなければ、はっきりと、どこの車両基地といったでしょう。少くとも、車両基地とは、いったと思いますね。その日時も、どんなグループかも、はっきりと、いった筈だと思うのです。ところが、細かいことは、何もいわなかった。そこに、私は、仲間のことをいわなければならない、ためらいがあったんじゃないかと思うのです」
「なるほど」
「どんなグループかを、いってしまうと、仲間が、逮捕される危険がある。また、くわしい日時や、場所をいうと、警察が、罠を張るかも知れない。そうなれば、やは

り、仲間が逮捕されてしまう。そこで、わざと、あいまいにいい、警察が、動き廻ってくれれば、仲間が、それを気にして、計画を中止してくれるのではないかと、考えたんじゃないかと、思うのですよ」
「しかし、彼は、殺されてしまったわけですね」
「そうです。つまり、彼の仲間は、やる気でいるんですよ。しかも、それは、間近かに、迫っていると思わなければ、なりません」
「二百もある車両基地を、全部、監視するわけには、いきません。それに、今、国鉄内部は、民営、分割ということで、ゆれていますからね。気をつけろと命令しても、果して、その気になるかどうか、私には、自信がありません。具体的なことは、何一つ、わかっていないとなると、猶更です」
「一つの車両基地が、グループに占拠されたら、どうなりますか？」
十津川が、きくと、北野は、「そうですねえ」と、考え込んだ。
「その車両基地の大きさや、占拠された時間にもよりますがね。例えば、新幹線の仙台第一運転所は、二百三十六両の車両が、配置されています。大阪第一運転所に至っては、一千三十四両の車両です。もちろん、普段は、その車両は運転所を出て、走っているわけですが、占拠する時間によっては、新幹線の運行が、がたがたになってしまうでしょうね」
「そうでしょうね」
「しかし、占拠して、どうする気ですかね？　そこが、わかりませんが」
「金を要求するつもりかも知れません」
「国鉄にですか？」
「新幹線の車両は、高価でしょう。それを、何百両も、人質にとる。金を渡さなければ、その基地にある車両を、全部、爆破してしまうと、脅かすことは、出来るかも知れませんね」
「しかし、逃げられませんよ。犯人は、どうやって、逃げるんですか？」

「逃げる方法さえわかれば、面白い計画だと思いませんか？」

十津川が、きくと、北野は、眉をひそめて、

「私は、面白いとは、思いませんね」

「一番車両の多い基地は、どこですか？　今、話に出た新幹線の大阪第一運転所ですか？」

「そうですね。一千三十四両ですからね」

「狙われているのは、その車両基地かな」

十津川は、独り言のように、いった。

3

国鉄の各車両基地に、注意を払うように指示して貰うという、ひどく、あいまいなことしかいえずに、十津川は、捜査本部の置かれた成城署へ帰らざるを得なかった。

念のために、東京周辺の私鉄の本社にも、電話で、連絡した。

しかし、十津川は、そんなことは、何の役にも立たないだろうと、思っていた。

国鉄本社から、指示を受けた日本全国の車両基地でも、どう対処していいかわからないのではないか。

どんなグループが、何のために、車両基地を襲うか、全くわからずに、ただ、注意しろといわれるからである。

（注意の仕方がわからない）

と、いう声が、当然、起きてくるだろう。

車両を盗もうとしているとか、その車両基地を爆破しようとしているとか、具体的なことがわかっていれば、各基地でも、対応の仕方が、わかるのだが。

「まだ、被害者の身元は、わからないかね？」

十津川は、部下の刑事たちの顔を見廻した。

「前科者カードには、ありませんでしたし、新聞や、テレビに出した似顔絵に対しても、まだ、反応がありません」

「身体的な特徴は、どうかね？」

「解剖した医者の報告書が、来ています」
亀井が、それを、十津川に、見せた。
死因は、やはり、背中の刺傷による出血死だった。後頭部を殴ってから、引きずって行って、刺したということだろう。
十津川が、興味を持ったのは、右腕の肘の軟骨を削る手術を受けたことがあるという、医者の所見だった。
「カメさんは、どう思うね？」
と、十津川は、きいた。
「私も、それに、興味がありました。右肘の軟骨を削るというのは、よく、野球選手にあることだと思うのです。ピッチャーが、投げ過ぎて、肘の、軟骨が、飛び出してしまい、手術で削り取るというのを聞いたことがあります」
「しかし、被害者は、百七十センチしかない。プロのピッチャーとは考えられないね」
「同感です。多分、高校から、大学か、ノンプロまで、投げ続けていたんだと思いますね」
「その線で、至急、当ってみてくれないか。きっと、野球で有名な高校だったんだろうと思うね」
「野球漬けの高校は、多いですよ。甲子園への道を競っている高校は、全国で、三千校を越すといいますから」
「各県警の協力も仰がなければならないな。その方は、課長に頼んでみるよ」
と、十津川は、いった。
被害者の年齢は、三十歳前後である。となると、高校で野球をやっていたのは、十三年から十五年くらい前だろう。
各県の県警の協力を得て、有名野球高の野球部長に、聞いて貰うことにした。
亀井のいったように、甲子園を目ざす高校は、三千校を越える。
その一校一校に当るのだから、各県警が協力してくれても、大変な仕事である。
ただ一つ、救いだったのは、身長百七十センチで、投手だったということである。高校時代から、恐らく、小

さな大投手といわれていたことだろう。肘が悪くなるほど投げているのだから、凡庸な投手なら、すぐ、野手に転向している筈である。

各県警にも、「小さな大投手」という線で、調べてくれと、頼んでおいた。そう限定することは、危険もあったが、何しろ、危機が迫っているという思いが、十津川には、あった。

あるグループが、どこかの車両基地を占拠して、機関車か客車を、奪うといった事件では、なさそうな気がして来たのだ。そんな、ルパンもどきの計画なら、仲間（と思われる）の一人が、死を賭けて、一一〇番したりはしないだろう。その仲間から逃げ出して、見ていればいいのだから。

何か、もっと、大きいか、残酷なことが予想されたからこそ、被害者は、一一〇番して来たに、違いないのである。

それでも、亀井が、まとめた名簿には、全国で、十一名の名前が、のることになった。

いずれも、身長は百七十センチか、それ以下の投手である。百六十三センチという、ちびっこ投手ものっている。三十歳までに、七センチ伸びたかも知れないので、これだけでは、除外、出来なかった。

写真も、電送されて来た。

明らかに違う顔のものは、除外した。が、高校生と、三十歳では、顔立ちも、変ることがあるので、多少、似ているのは、残すことにした。

残ったのは、五名である。

その中、一名は、今でも、ノンプロで、投手をしていた。

十津川は、その会社に電話をかけ、本人が現在、そこで仕事をしていることを確認してから、名前を消した。

残りは、四人になった。

十津川は、もう一度、四人の男の生れ育った土地の県警に、協力を頼んだ。家族や知人に会って、四人が、現在、どこで、何をしているか、聞いて貰うためである。

その結果を待つ間、十津川は、国鉄の北野に、電話を

かけた。
「どこかの車両基地で、何か起きていませんか？」
「いや、どの基地からも、連絡はありませんよ。何も起きていません。列車も、現在のところ、正常に動いています」
「各車両基地に、警戒の指示は、出してくれましたか？」
「国鉄総裁名で、出して貰いましたがね。正直にいって、車両基地の方でも、当惑していると思いますよ。警戒しろといわれても、どう警戒していいのか、わかりませんからね。その問い合せも、いくつかの基地から来ているんですが、こちらも、具体的なことが、わかりませんからね」
「申しわけありません」
「車両の整備、点検を強化しろとでもいうのなら、向うも、対応の仕方があるんでしょうが――」
「わかります。あいまいなことで、申しわけないのですが、何かがあることだけは、間違いないと、思っています」
「もう少し具体的なことは、わかるわけですか？　どの車両基地が、危いのか、どんな事件が考えられるのか、それがわかれば、いいんですが」
「現在、極力、その解明を、急いでいるところです。わかり次第、すぐ、お知らせします」

4

各県警から、返事が、集って来た。
四人の中の一人は、高校からノンプロに行っていたが、去年、家業を継ぐために、熊本に帰っているということだった。これは、確認されたということなので、さらに、一人を消去できた。
あと、三人である。
その中の一人は、現在、警察に勤めているという。すぐ、亀井が、問い合せて、確認した。
残りは、二人になった。

二人とも、ノンプロにいることになっていた。
会社は、有難いことに、どちらも、東京だった。
十津川は、その二つの会社に電話をかけた。もし、現在も、会社で働いていれば、被害者ではないのだ。
だが、二人とも、すでに、その会社を辞めていた。
十津川は、野球部の監督に、至急、こちらへ来て貰い、死体を確認して貰った。
その結果、やっと、被害者の身元が割れた。
柴田敬。二十九歳。長崎の高校を出たあと、東京のN大学に入ったが、二年で中退、その後、K製菓に入った。高校時代は、エースだった。
N大でも、野球部にいたが、エースにはなれなかった。中退して、K製菓に入ったのも、そのせいらしい。
「負けん気の強い男でしたよ」
と、死体の確認に来た、K製菓の野球部監督が、溜息まじりにいった。
「それで、肘をこわしたといえるかも知れません。練習でも、何百球と投げていましたからね。高校時代にも、一度、肘をこわしていたことはいたんですが」
「会社を辞めたのは、いつですか？」
「今年の四月です」
「理由は？」
「一身上の都合とだけいっていましたがね。肘の手術が上手くいかなくて、野球が出来なくなったし、会社では、三十近くなって、平社員ですからね。きっと、面白くなかったんだと思いますよ」
「辞めてから、柴田さんが、何をしていたかわかりますか？」
「気になっていたんですが、こちらも、忙しさにかまけて、行ってやれませんでした」
「柴田さんの家族は？」
「まだ、結婚していませんでした」
「しかし、二十九歳なら、つき合っていた女性は、いたと思いますが」
「うちの会社の会計の女の子が、時々、応援に来ていましたね。彼が、まだ、投げていた頃ですが」

「その女性の名前は？」
「確か、相川君じゃなかったかな」
と、監督は、いった。
十津川は、亀井と、K製菓本社に、相川という女性を訪ねた。
幸い、彼女は、まだ、K製菓に勤めていた。
二十六歳だというが、小柄なせいで、可愛らしく見えた。
柴田敬が、殺されたと告げると、相川あや子は、突然、泣き出した。
十津川は、彼女が、泣き止むのを、じっと待った。
しばらくして、彼女は、伏せていた顔をあげて、
「ごめんなさい」
と、いった。
「いや。あなたが泣いてくれたことを、柴田さんは、喜んでいると思いますよ」
「時々、会ったり、電話はしていたんです」
「そう。結婚の約束は、あったみたいだな」
「ええ。ただ、彼が、結婚する自信がついたら、プロポーズしてくれることになっていたんです」
「それは、どういうことですか？」
「会社をやめてすぐ、彼は、退職金を元手に、自分の家の近くで、喫茶店を始めたんです。私も、休みの時に、手伝いにいきました。その店が、軌道にのったら、結婚するということだったんですけど、うまくいかなくて、すぐ、潰れてしまって――」
「そのあと、柴田さんは、何をしていたんですか？」
「焦っていました。私は、いつまでも待つといったんですけど」
「彼が、何か、危険なことに、手を染めようとしていたということは、ありませんでしたか？」
「わかりません。今、いったように、とても焦っていたことは、知っているんですが」
喫茶店が潰れたとき、二、三百万の借金も出来たらしいと、いった。
その焦りが、柴田敬を、犯罪グループに近づけたのだ

ろうか。
「柴田さんは、酒が好きでしたか？」
と、亀井が、きいた。
「ええ。私も、時々、一緒に、飲みに行ったことがありますわ」
「彼が、よく行く店がありましたか？」
「ええ。中野駅近くの『泉』という小さなバーです。夜の十二時を過ぎると、スナックになる店なんです」
「彼のマンションも、その近くですか？」
「ええ。そうです」
あや子は、そのマンションへの地図を描いてくれた。
十津川と、亀井は、腕時計を見てから、先に、柴田敬のマンションへ、行ってみることにした。
マンションは、中野駅から歩いて十五、六分のところにあった。
その五階に、2DKの柴田の部屋があった。
カギがかかっていたが、カギをこわして、二人は、中に入った。時間との競争だったからである。
「やられましたね」
と、亀井が、部屋をひと目見て、叫んだ。
明らかに、部屋中を引っくり返した痕があったからである。
犯人は、柴田を殺したあと、このマンションのキーを奪って、中に入り、自分と、柴田との関係がわかるようなものは、全て、破棄してしまったのだろう。
それでも、二人は、部屋の中を、調べてみた。
やはり、何もなかった。
陽が落ちてから、二人は、中野駅近くの「泉」というバーに、足を運んだ。
あや子のいったように、小さな店である。
十津川は、カウンターに腰を下し、ママに、柴田のことを、聞いてみた。
「よく、見えてましたよ」
と、よく太ったママは、大きな身体をゆするようにして、十津川に、いった。
殺されたのは、知らなかったといって、驚いている。

新聞は、見ないのだろうし、見たとしても、気がつかなかったろう。
「飲んで、どんなことを、話していたのかな？」
と、十津川は、きいた。
「喫茶店をやっていて、それが潰れてしまった時があったんですよ。その時は、飲んでも、荒れてましたわ。ケンカもしたりしてね」
「そのあとは？」
「また、やる気になったって、いってましたよ」
「最後に、ここに来たのは、いつです？」
「先週の火曜日だったかしら」
「その時、何か、いってなかったかね？」
「旅行するって、いってたわ」
「何処へ？」
「ええと、何処っていったかしらね。九州だわ。九州へ行くって、いってたと思うわ」
「九州ね。いつ行くとは、いってなかった？」
「近い中にということだけだったけど」
「近い中に、九州か」
「どうして、柴田さんが、殺されたんですか？　酒癖は、ちょっと悪かったけど、殺されるとは、思っていなかったのに――」
「彼は、ここで、誰かと会っていなかったかな？」
「若い女の人と一緒に来たことがありましたよ。小柄な可愛い女の人」
「彼女のことは、わかってる。他の人なんだがね」
「他の人ねえ」
と、ママは、考えていたが、
「柴田さんが、荒れていた頃なんですけどね。よく、彼をなぐさめていたお客さんが、いましたよ」
「どんな客だった？」
「そうねえ。四十歳くらいかな。恰幅のいい男の人でしたよ」
「名前は、わからないかな？」
「常連の方じゃありませんからねえ。この頃は、ぜんぜん来ないし……」

「何をしている人かも、わからない？」
「わからないけど、電気のことには、くわしい人ですよ」
「なぜ、わかるのかね？」
「そこに、冷蔵庫があるでしょう。それが故障した時、簡単に直してくれたんですよ。その時、テレビも、直してあげますよと、笑ってたから、電気のことに、くわしい人なんじゃないかしら」
「顔は、覚えていますか？」
「ええ」
「じゃあ、モンタージュを作るから、協力して下さい」
「あのお客さんが、何かしたんですか？」
「いや、ただ、調べているだけです」
と、十津川は、いった。
彼は、電話をかけ、モンタージュ係に、すぐ来てくれるように、頼んだ。

5

電気にくわしい男が、果して、仲間かどうかわからない。ただ、殺された男、柴田敬が、九州という地名を、口にしていたことだけは、わかった。
十津川は、さっそく、北野と会った。
「九州ですか」
北野は、ちょっと、意外そうな顔をした。
「九州にも、車両基地は、あるでしょう？」
「もちろん、あります。新幹線の博多車両所があって、そこには、四百六十六両が、配置されています」
「他にも、在来線の基地があるわけでしょう？」
「ええ」
北野は、九州の地図の上に、車両基地がマークされたものを見せてくれた。
門司、大分、熊本、鹿児島の四つの鉄道管理局があり、それぞれに、いくつかの車両基地が置かれている。

「九州とは、思っていなかったみたいですね」
十津川は、北野を見て、いった。
「正直にいって、意外でした。もっと東京に近い車両基地か、大阪周辺の車両基地が狙われると思ったんです。特に、太平洋岸は、線路が、二重、三重に走っていて、その途中にある車両基地が、占拠されれば、大きな混乱が起きますからね」
「九州の車両基地では、混乱は、起きないというんですか？」
「犯人たちの狙いがわかりませんから、何ともいえないんですが、日本で、一番、鉄道の遅れているのが、四国で、その次が、九州ではないかと思っています。非電化区間が多く、その上、単線区間も多いんです。その途中や、末端に置かれた車両基地が、占拠されても、大きな影響はないと思うのです。乗客は、飛行機が運んでくれますからね。その分、国鉄の減収にはなりますが」
「そういわれれば、そうですね」
十津川は、考え込んでしまった。
犯人の狙いがわからないから、何ともいえないのだが、影響の少い車両基地を占拠しても、仕方がないに違いない。
「九州で、近い中に、何か、記念行事とか、パーティとかが行われる予定は、ありませんか？」
「国鉄でということですね？」
「そうです」
「ありませんね。ご存知のように、赤字線は廃止の方向へ向っているし、人員減らしなどで、パーティどころじゃないんです」
「近く、運輸大臣か、国鉄総裁が、九州へ行く予定は、ありませんか？」
「ありませんね。外国の賓客が、九州へ行く予定もありません」
「宮崎で、リニアモーター・カーの研究をやっていましたね？」
「やっています」
「あれを、要人が見学に行く予定は？」

「ありませんね」
「何もないですか？」
「だから、意外な気がしたんです。本当に、九州の車両基地で、近い中に、何かあるんですか？」
「あると、信じています」
「いつです？」
「今日は、何日でした？」
「十一月二十六日です。それが、どうかしましたか？」
「いや。ただ、車両基地を何かしようという人間たちの動きが、差し迫っている気がして仕方がないのですよ」
十津川には珍しく、強いいらだちを見せて、いった。

6

二十六日の午後三時四十分。五人の男と一人の女が、東京駅の新幹線ホームに、いた。
男たちは、服装も、まちまちだし、年齢も、五十歳代から二十代までに、分れている。
女は、二十七、八歳で、脚がやたらに長く、ハーフのような感じだった。
六人は、一六時〇〇分（午後四時）発の博多行の「ひかり107号」のグリーン車に乗り込んだ。
一番若い二十五、六の男と、女が、並んで座り、他の四人は、座席を向い合せに直して、腰を下した。
名古屋が近くなった頃、四人の中の一人が、一番年かさの男に向って、「社長」と、声をかけた。
「食堂車へ行きませんか」
「時間は？」
「五時四十五分です」
「じゃあ行くか。荷物を盗まれるといけないから、半分ずつ、行くことにしよう」
社長と呼ばれた男が、いうと、女と並んで座っていた若い男が、
「そちらの四人で、先に、食事をして来て下さい。僕たちは、あとでいいです。荷物は、ちゃんと、見ていますよ」

「亜矢が一緒なら、眠ることもないな」
三十五、六の、ずんぐりした男が、笑った。
四人の男は、座席から立ち上り、食堂車の方へ、歩いて行った。
食堂車は、すいていて、四人は、奥のテーブルに腰を下すことが、出来た。
まず、ビールと、チーズを頼み、あとは、めいめいで、好きなものを注文した。
「今度の計画ですがね、社長」
と、ずんぐりの男が、小声で、いった。
「その社長というのは、やめてくれないかな。どうも、くすぐったくてしようがない」
「しかし、社長は、今度の計画を立てたし、資金も用意してくれたスポンサーでもあるんだから」
「森と呼んでくれないかね。その方が、すっきりするよ」
森という男は、穏やかな口調で、いった。
「じゃあ、森さん」
と、ずんぐりの男が、いい直してから、照れたように笑ったのは、そのいい方が、慣れていなかったからだろう。
「何だ？　高田君」
森は、きき返した。
「警察の動きが心配なんですが、まだ、気付いていないと思いますか？」
「新聞を見る限り、何もわかっていないと思うがね。柴田が、死ぬ前に、何を口走ったか、問題だとは思うが」
「青木は、何も、いわない中に、やったから、大丈夫だと、いっていますがね」
「そうだな。柴田が、一一〇番して、何か具体的なことをいっていたら、当然、警察が動き出しているだろうからね。新聞で、身元調べをやっている状況なら、大丈夫だろう」
「それにしても、柴田みたいに、いざとなったら、尻込みするような男を仲間に入れたのは、まずかったと思いますよ。もう少し、慎重に、人間を選んで貰いたかった

な」
高田は、じろりと、背の高い、四十歳ぐらいの男を、見やった。
その男は、むっとした顔で、
「私が、悪いというのか？」
「仲間を選ぶ時には、もっと、慎重にやって貰いたいといっているだけだよ。下手をすれば、全員が捕まるんだからね」
「高田君も、野口君も、やめなさい」
と、リーダー格の森が、二人を、叱った。
「もう、すんだことだ。大事なのは、これからだ。今度の計画で、一番大切なのは、われわれが、団結して、動くことなんだ。もし、仲間割れでも起こしたら、それこそ、失敗は眼に見えているんだよ。もし、協力できないのなら、今からでも、降りて貰う」
「わかりました」
と、高田が肯き、野口も、黙って、肯いた。
三人が、喋っている間、黙って、食事をしていた小柄な男が、顔をあげて、
「森さん。ちょっと、いっていいですか？」
と、リーダーに、きいた。
「いいよ。川村君」
「林亜矢のことです」
「うん」
「どうしても、彼女が必要なんですか？」
「それは、どういう意味だね？」
森が、きき返した。
「女が入っていることで、われわれグループの団結に、ひびが入るんじゃないか、それが心配なんですよ。現に、青木は、彼女に、でれでれしています。いざという時、心配ですよ」
「男だけでは、どうしても、今度の計画に、支障を来たすんだ。それとも、君たちが、女装するかね？」
「女装は、勘弁して下さい」
「それなら、彼女は必要だ。それから、青木君のことだがね。確かに、君のいう通り、亜矢に参っている。だ

が、そのために、彼は、グループのために、精を出して、働いてくれるということもあるんだ。何といっても、彼が一番若くて、一番、実行力があるからね。とにかく、今度の仕事が終るまで、今のままで、行きたいと、思っている」

「もう一度、森さんに、聞きたいんだが」

と、高田が、いった。

「何だね？」

「今度の計画の成功率は、どのくらいなんです？　どのくらいと、森さんは、見ているんです？　正直なところを聞きたいんですが」

「全員が協力すれば、百パーセント成功するが、協力しなければ、必ず失敗する。そう思っている」

森は自信を持っていった。

「もう一つ、警察が、計画に気付かなければということがあるんじゃありませんか？」

と、野口が、いった。

「もちろん、それもあるが」

と、森は、いいかけて、急に口をつぐんでしまったのは、他の乗客が、食堂車に入って来たからだった。

「そろそろ、席へ戻ろうか」

と、森は、いった。

車内アナウンスが、間もなく、京都に着くことを、知らせていた。

7

十津川は、国鉄本社から戻ると、すぐ、本多一課長に会った。

午後六時を、七分過ぎている。

「何か心配ごとがあるみたいだな」

と、本多が、十津川の顔を見て、いった。

「その通りです」

十津川は、今までの経過を、本多に、説明した。

「一応、国鉄本社から、九州の車両基地に、注意するように指示して貰ったんですが」

「それで、いいじゃないか。今の段階では、それ以上のことは、出来ないだろう？」
「そうなんですが、事態は、切迫しているような気がするんです」
「仲間を殺しているからか？」
「そうです」
「しかし、警戒するように、頼んだんだろう？」
「そうですが、具体的なことは何一つ、わかっていないんです。犯人は、グループと思いますが、それが、何人なのか、何を計画しているのか、いつ、どこの車両基地を狙うのか、全くわかりません。これでは、警戒のしようがないのではないかと思います」
「しかし、今の段階では、それ以上のことは出来んだろう？」
「一つだけ、あります」
「何だね？」
「マスコミに、発表してしまうんです。九州の車両基地を狙っている連中がいるということをです。警察は、それを知って、警戒していると。そうすれば、犯人たちは、われわれが、どこまで知っているかわからないので、計画を中止するのではないかと思うんですが」
「その代り、連中は、姿を消して、捕えにくくなるね」
「そのマイナス面はありますが、大事件になるのは、防ぐことが出来ます」
「大事件になると、思うのかね？」
「そんな予感がするんですよ。小さな事件になるようなことなら、仲間を、殺してまで口封じはせんでしょう」
「マスコミに発表すれば、防げると思うのかね？」
「賭けですが、少くとも、彼等を、牽制することは、出来ると思っているのです」
「発表するのなら、早い方がいいな。テレビは、すぐ取りあげるだろうし、明日の朝刊にも、のせて貰えるだろう」
「部長は、許可してくれますかね？」
十津川がきくと、本多は、ニヤッとして、
「大丈夫だよ。何か、こちらが動くことだと、部長は、

慎重だが、事を起こさないようにすることなら、賛成してくれるさ」
と、いった。
本多の言葉は、当っていた。
三上刑事部長の許可は、簡単におりて、すぐ、記者会見を行った。
柴田敬が殺された事件について、一つのグループの存在が、明らかになった。
そのグループは、九州の車両基地で、何かを起こそうとしている。警察は、万全を期して、彼等を逮捕するつもりである。
そう、十津川は、発表した。
もちろん、細かい質問が、浴びせられた。
グループの人数は何人なのか？　具体的に、彼等は、何をしようとしているのか？　そんな質問だった。
「捜査方針上、答えられない」
と、十津川は、いった。
それで、押し通した。
夜九時のテレビのニュースが、取りあげてくれた。
新聞社も、明日の朝刊にのせることを、約束した。
十津川は、亀井と、捜査本部で、テレビのニュースを見た。
十一時にも、テレビは、ニュースで、流してくれた。
「犯人グループは、これを見ましたかね？」
亀井が、十一時のニュースを見ながら、きいた。
「私は、見た方に賭けるよ。彼等は、仲間の柴田敬が、一一〇番で、どこまで計画のことを喋ったか、それが、心配な筈だからね。新聞やテレビには、気を遣っているに違いないんだ」
「それで、計画の実行は、思いとどまるでしょうか？」
「正常な神経の持主なら、中止するだろうね」
と、十津川は、いった。
「私も、中止すると思いますよ」
「――――」
「何か心配でも、あるんですか？」
「もし、間違っていたら、どうなるだろうかと、ふと、

考えたんだよ」

十津川は、難しい顔で、いった。

「彼等が、危険を承知で、計画を実行するということですか？」

「それもあるが、われわれの推理が、全く違っていたらと、思うことがある」

「どんな風にですか？」

「彼等の狙っているのは、本当に、車両基地なのだろうか？　他の基地の意味ではないのか？　九州と考えているが、違う場所ではないのか？　国鉄ではなく、私鉄の車両基地ではないのか？　いろいろと、考えてしまうんだ」

「考えたら、際限がありませんよ。私は、国鉄の、九州の車両基地と、思っています」

「ありがとう」

と、十津川は、いった。

8

夜が明けた。

彼等は、山の上のホテルで、眼をさました。

リーダーの森は、ベッドからおりると、窓のカーテンを開けて、外に眼をやった。

冬晴れの一日になりそうな、いい天気である。

森は、煙草に火をつけ、じっと、眼下に、眼を走らせた。

目標の車両基地が、見える。海が、青く広がっている。

武者振るいと、不安とが、彼の胸の中で、交錯していた。

（大丈夫だ。上手くいく）

と、自分に、いい聞かせた時、ふいに、ドアが、激しくノックされた。

「森さん！」

大声は、高田だった。
森が、舌打ちしながら、ドアを開けると、高田の、ずんぐりした身体が、飛び込んできた。
「どうしたんだ？　大声を出して」
「朝刊を見ましたか？」
高田は、息をはずませている。
「いや、まだ見ていない。何か出ているのか？」
「大変なことが出ているよ」
高田は、手に持って来た朝刊を、森の前に広げた。
森は、高田が、指で叩いている箇所に、眼をやった。
〈九州の国鉄車両基地が、狙われている！〉
その見出しが、森を捕えた。
「ふーむ」
と、森が、唸った。
「警察は、何もかも知っているんですよ。柴田の奴が、一一〇番した時、全部、喋ったんだと思います。この計画は、中止しましょう」
「まあ、あわてなさんな」
森は、落ち着いて、相手をおさえた。
「しかし、このまま、実行したら、全員、捕ってしまいますよ。相手は、待ち構えているんだ」
「そうかな」
「そうですよ」
「よく読みたまえ。警察は、何もわかっていないんだ。われわれは、九州の車両基地をやるんじゃない。まず、そこが間違っている」
「わざと、間違えて発表しているのかも知れませんよ。われわれを安心させ、計画を実行したところを、逮捕する気なんだ」
「それは違うね」
「どう違うんですか？」
「もし、警察が、われわれを安心させておいて、逮捕する気なら、何も発表しないよ。その方が、効果的だからだ。黙って、待ち受けていて、一網打尽にするだろう。

だが、そうしないのは、警察が、われわれのことを、よくわかっていないからだ」
「しかし、車両基地を狙うことは、知っているんですよ」
「それは、柴田が、車両基地のことを、一一〇番で、いったんだと思うね」
「危険じゃないですか」
「だが、警察は、われわれが、何をやろうとしているか、知らないんだ。それに、場所も間違えている」
「なぜ、今、警察は、こんなことを、マスコミに、発表したんでしょうか？」
「大胆に、推測すれば、こうだ。警察は、われわれが、車両基地で、何かやるのは知っている。だが、今もいったように、何をやるのかわからない。それで、どう対応していいか、わからないんだよ。もう一つ、友人に、警察関係の人間がいるからわかるんだが、警察というのは、何か事件が起きてからでないと、動くことが出来ないんだ。例えば、君が、誰かに殺されそうだから、守ってくれといっても、警察は、守ってはくれない。もちろん、万博会場が、過激派の学生に襲われるという情報が、入るとか、政治家にテロの恐れがある時は、警察は、まだ、事件が起きていなくても、動くことが出来る。大義名分があるからさ」
「今度の場合は？」
「車両基地が、襲われそうだと、警察がいっても、証拠はない。柴田は、もう、死んでしまっているからね。それに、何があるのかもわからない。こういう状況では、警察は、動けない筈だよ。だから、われわれを、牽制する方法をとったんだと、私は、思うね。こんな風に、新聞に出れば、われわれが、尻尾を巻くと思っているんだろう」
森が、笑って見せた時、他の仲間も、心配して、集って来た。
森は、もう一度、同じ言葉を繰り返した。
「これは、野球でいえば、ピッチャーが、牽制球を投げたのと同じだよ。しかも、われわれが、すでに、サード

にいるのに、ファーストに、牽制球を、投げたんだ。つまり、このピッチャーは、目かくしをして、野球をやっているのさ。それでも、牽制球が投げられたので、怖がって、試合を放棄してしまうか、それとも、相手のミスに乗じて、ホームスチールをしてみるか、どっちを選ぶかということだな」

「なぜ、警察は、九州の車両基地と、いっているんだろう？」

と、きいたのは、一番若い青木だった。

「柴田の郷里は、確か、九州だったな？」

「そうだ。長崎とか、いっていた」

「多分、それでだろう。奴が、九州なので、警察は、狙われるのは、九州の車両基地と考えたのさ」

森は、決めつける調子で、いった。誰が何といおうと、今度の計画は、実行するという気持ちだった。

「準備は、出来ているんですか？」

高田が、きいた。

「出来ている。車両基地が、委嘱している民間の清掃会社と、話をつけてあるよ。一日分の二倍の金を払ったから、喜んで、今日一日、働かせてくれる。これが、車両基地で働く時の作業員のユニホームだ」

森は、大きな風呂敷に入ったものを、みんなの前に置いた。

中に入っていたのは、地味なネズミ色の作業服と、運動靴、それに、帽子だった。

「こんなものを着るの？」

唯一人の女性の林亜矢が、大げさに、眉をひそめた。

「清掃係の人間は、中年のおばさん連中が多いんだ。それに合せて、服を作ってあるんだろう。君みたいに、若くて美しい人はいないんだ。いれば、車両基地の職員が喜ぶだろうがね」

「じゃあ、今日は、喜ぶわ」

「同時に、怪しむかも知れない」

「どうしたらいいの？」

「なるたけ目立たないような化粧がいいな。派手な化粧は駄目だ。もし、疑われたら、母が急病になったので、

娘の自分が、母の仕事をやっているんだといえばいい」
「まさか、今日の清掃作業は、われわれ六人だけじゃないんでしょうね？」
背の高い野口が、きいた。
森は、首を振って、
「次々に入ってくる車両の清掃を、六人だけで、出来る筈がないじゃないか。正式な清掃作業員もいる。われわれ六人は、新米で、見習いというわけだよ」
「それなら、気が楽でいい」
「車両基地に入ったら、疑われないように、車両の清掃に当ってくれ。そうしながら、銀色の電気機関車を探すんだ」
「銀色？」
「そうだ。本州と九州の間を往復する列車は、いやでも、関門トンネルを通る。トンネルの中は、海水が洩れたりして、普通の機関車では、錆びてしまう。そこで、関門トンネルを抜ける間だけ、特別の、ステンレス製の電気機関車を使う。それが、銀色の機関車だ。ＥＦ３０形と、ＥＦ８１形があって、全て、門司車両基地、正確にいえば、門司機関区の所属だ。
「それじゃあ、門司に行かなければいけないんじゃありませんか？」
「いや、この機関車は、上りの列車を牽引して、こちら側に来たとき、下関運転所で、簡単な点検と、ヘッドマークを前後につけかえる作業を行う。ただし、ＥＦ３０形は、下関運転所の幡生支所に回されるから、ＥＦ８１形の方だけだ。型はわからなくても、銀色のステンレス機関車を見つければいい」
森は、用意して来たステンレス機関車の写真を、五人に見せた。
「ステンレス機関車が見つかったら、私と、青木が、忍び込むんでしたね」
小柄な川村が、確認するように、いった。
「そうだ。機関士と助手は、運転席以外には、動かないから、中央の通路にかくれていれば見つからないだろう。それでも、見つかったときは、下関運転所の人間

で、発電機か、抵抗器の具合がおかしいので、心配で乗って来たとでもいえばいい。ただ、この清掃作業の服ではおかしいから、機関車にもぐり込んだら、正式の係員の服に着がえてくれ。それも用意してある。黄色いヘルメットもだ」

と、森は、いった。

森は、続けて、

「そのあとの行動は、前に話した通りだ。拳銃と、ダイナマイトを点検してから、出かける」

と、いった。

今度の計画のために、森が用意した武器は、拳銃二丁、ダイナマイト五本（これは、時限装置つきの爆弾にしてある）だけだった。

拳銃一丁と、時限爆弾は、川村と青木が、持って、ステンレス機関車に忍び込むことになっていた。

六人は、清掃作業員の服装に着がえ、必要なものを袋に入れて、ホテルを出た。

下関運転所の前で、正規の作業員たちのグループと、合流した。

前もって、金を出しているので、スムーズに一緒になり、運転所の構内へ入って行った。

誰も、咎めなかった。清掃作業員の姿は、もう、毎日、見なれた景色になっているのだろう。

広大な敷地内に、機関車や、客車が、ずらりと並んでいる。

赤い気動車は、山陰本線を走っている列車のものだろう。

清掃作業員たちは、清掃用の道具や、紙屑などを入れる大きな竹籠を持って、客車の清掃に向った。

森たち六人も、一つのグループを作って、ブルートレインの寝台客車の清掃に取りかかった。

床を掃き、枕カバーやシーツを取りかえる。

森は、時々、窓の外を見ていた。

「銀色の機関車が、ありますよ」

と、ふいに、高田が、甲高い声をあげた。機留線に、ブルートレインを牽引するEF65形やEF66形が、

ずらりと並んでいる中に、確かに、ステンレスのＥＦ８１形も、銀色の車体を、朝日に、光らせていた。
「あれだ」
と、森は、肯いた。
川村と、青木が、そっと、抜け出して行った。
森は、寝台客車の外へ出ると、通りかかったヘルメット姿の係員に、
「あのステンレス機関車は、どのブルートレインを引っ張るんですか？」
と、きいた。
「９列車だよ」
係員は、ぶっきらぼうに答えた。
「９列車？」
「下りの『あさかぜ１号』だよ」
「ああ、わかりました」
森は、頭の中で、暗記したメモを思い出した。
下りのブルートレインの全ての列車の下関を発着する時刻は、暗記しておいた。
「あさかぜ１号」は、下関に、九時四四分に着き、五分停車のあと、九時四九分に、発車し、終着の博多へ向う。この五分間に、関門トンネル用のステンレス機関車に、交換するのだ。
森は、腕時計を見た。
あと三十一分で、九時四四分になる。
青木と川村は、ＥＦ８１形機関車に近づき、その中に消えた。
「さて、われわれも、所長室に行くぞ」
森は、他の三人に、いった。

９

十津川に、突然、電話がかかった。
「はるこです」
と、女の声がいった。が、十津川の記憶にない名前だった。
「はるこ？」

「中野の『泉』のはるこです」
といわれて、やっと、思い出した。殺された柴田敬が、よくいっていたバーのママだった。
「この間、聞かれたことですけど、大事なことなんでしょう？」
「もちろん、大事なことです」
「それなら、電話して良かったわ。柴田さんが、九州へ行くといったと、警部さんに、いったでしょう。あれ、思い違いだったのよ」
「どう思い違いなんですか？」
「思い出したんだけど、彼は、九州の方へ行くといったの。まあ、たいして違わないんだけど、正確に、お伝えしておこうと思って」
「よく思い出してくれました」
十津川は、礼をいった。
彼は、すぐ、国鉄本社の北野に電話をかけた。
「九州と、九州の方というのでは、似たようなものじゃありませんか？」
北野は、十津川の話を聞いて、そういった。
「違うんです。柴田は、九州の生れです。もし、九州へ行くんだったら、九州の方などといわずに、ずばりと、九州といった筈です」
「すると、狙われるのは、九州の車両基地ではないということですか？」
「そうです。九州に近い車両基地です。九州に近くて、大事な車両基地というのが、見当がつきますか？」
「第一に考えられるのは、下関ですね。何といっても、関門トンネルの入口だし、山陽本線と、山陰本線の合流点です」
「では、そこの責任者に、電話して、警戒するようにいって下さい」
「すぐ、連絡しますよ。その結果は、十津川さんに知らせればいいですか？」
「いや、私も、そちらへ行きます」
十津川は、電話を切ると、亀井と、パトカーで、国鉄本社へ向った。

不安が、十津川を、焦燥にかり立てていた。

10

森たちは、ばらばらに分れて、運転所本館の中へ入って行った。

階段をあがって行く。

誰も、咎める者はなかった。というより、車両基地は、二十四時間態勢で、職員は、ほとんど全員、敷地内のどこかで働いているのである。

もちろん、本館内で、事務をとっている職員もいるが、廊下や階段には、出て来なかった。

四人は、所長室の前で一緒になった。

森は、呼吸を整えてから、所長室のドアを開け、他の三人と一緒に、中に入った。

所長は、ひとりで、窓の外を眺めていたが、振り向いて、微笑した。

「清掃作業の人だね。何か用かな？」

「お願いがあって、お邪魔したのです」

森は、にこにこしながら、近づくと、いきなり、ポケットから取り出した拳銃を突きつけた。

「静かにして下さい」

「何の真似だ！」

所長は、叫ぶようにいって、机の上の電話に手を伸ばした。

森は、拳銃の台尻で、殴りつけた。

小柄な所長の身体が、呻き声をあげて、床に崩折れた。

「縛っておけ」

と、森は、いった。

その時、突然、電話が鳴った。四人が、ぎょっとして、顔を見合せた。

電話は、鳴り続けている。森が、手を伸ばして、受話器を取った。

「こちらは、国鉄本社の北野といいます。所長さんですか？」

と、若い声が、きいた。
「そうです。所長です」
「実は、そちらの車両基地を、あるグループが襲うらしいという情報が入っているんです。本当と思って、警戒を厳重にして下さい」
「わかりました。警戒しましょう」
森は、受話器を置くと、思わず、大きく、息を吐いた。
森は、部屋の大きな時計を見た。
今、九時四四分になった。ブルートレインの「あさかぜ1号」が、下関駅に着いたところである。
牽引する電気機関車の交換が始まっているだろう。
五分たった。EF81形に牽引された「あさかぜ1号」は、今、ホームを離れた。あっという間に、関門トンネルに入る。

11

EF81形機関車の中にかくれていた川村と青木は、運転席に、飛び込んだ。
青木が、機関士と、助手に、拳銃を向けた。
轟音を立てて、列車は、関門トンネルに入った。
「すぐ止めろ！」
青木が、怒鳴った。
機関士が、睨み返した時、青木は、いきなり、射った。トンネルの中でも、強烈な発射音は、耳をつんざき、弾丸は、サイドの窓ガラスを粉砕した。
森が、青木を買ったのは、この無鉄砲な実行力である。こういう犯行の時、失敗の原因は、ためらいなのだ。
列車に、急ブレーキが、かかった。
十三両編成の「あさかぜ1号」は、関門トンネルの、ほぼ中央で、停止した。

機関士と助手は、もう必要ない。青木と川村は、用意して来たロープで、二人を縛りあげ、運転席の床に転がした。

青木を運転席に残して、川村は、機関車から、線路上に、飛び降りた。短かい時間の内に、しなければならないことが、二つあった。

関門鉄道トンネルは、複線だが、上り下りを別々に作られている。門司側では、一緒になるが、下関側入口から、門司近くまでは、上りと下りのトンネルの間には、二十メートルの距離がある。

中央部のこの辺りも、上りのトンネルとの間は、二十メートルである。単線のトンネルと同じだった。

川村は、用意して来たダイナマイトを、客車の下に仕掛けてから、トンネル内にある非常用電話を取った。

「下関運転所の所長室に至急、つないでくれ」

と、いった。

電話がつながった。川村は、小さく息をついた。所長室が占拠できていなければ、電話口に出るのは、本物の所長なのだ。

「所長室です」

と、森の声が、いった。川村は、ほっとして、

「川村です。作業は、終りました。タイマーは、正午にセットしました」

と、いった。が、突然、拳銃の鋭い射撃音がして、トンネル内に反響した。

「どうしたんだ？」

森が、驚いて、きいた。

「車掌が、列車からおりて来ようとしたので、青木が、威嚇射撃したんです」

「わかった。気をつけてくれよ」

と、森が、いった。

12

十津川と、亀井は、国鉄本社に着いていた。すぐ、北野と、東京駅の端にある東京総合指令室に足を運んだ。

そこの方が、情報が入り易いと思ったからである。
「下関基地の所長は、何も起きてないと、いっていますがね」
北野が、疑わしげに、十津川に、いった。
「下関駅と、門司は、何もありませんか？」
と、十津川が、きいた。
「今のところ、平穏ですね」
「ちょっと待って下さい」
電話連絡をとっていた職員が、手をあげた。
「下りの関門トンネル内で、『あさかぜ1号』が、立ち往生した模様です。信号が赤になったままで、門司に、到着していません」
「故障かな」
「向うでは、下関運転所の所長に、牽引する機関車を出すように依頼して、所長は、承知したということです」
「それなら、大丈夫ですよ」
北野が、楽観的ないい方をした時、その北野に、電話が、かかった。
現在、新しい総裁は、国会に行っていて、電話は、副総裁の小野田からだった。
「すぐ、戻って来てくれ。出来れば、警察の人も一緒にだ。下りの『あさかぜ1号』が、関門トンネルの中で、ハイジャックされた」
小野田の言葉に、北野の顔色が変った。
十津川も、亀井も、北野と一緒に、すぐ国鉄本社に、引き返した。
小野田は、蒼ざめた顔で、十津川たちを迎えた。
「今、電話があった。『あさかぜ1号』は、関門トンネルの中で、ハイジャックした。十一時までに、六億円を、M銀行の下関支店の太田良子名義の口座に振り込め。さもないとトンネル内で、列車を爆破するというのだ」
「それなら、六億円を振り込んでおいて、下関支店で、逮捕すればいいんじゃありませんか？」
亀井が、簡単にいうと、小野田は、手を振って、
「それが、駄目なんだよ。下関で、太田良子が、六億円

を引き出すまで、何もするなというんだ。もし、六億円が引き出せなかったり、彼女が、逮捕されたりした場合は、容赦なく、爆破するともいっているんだよ」

「十一時というと、あと一時間しかありませんが、六億円は、用意できますか？」

十津川が、きいた。

「用意は出来るよ」

「問題は、寝台特急『あさかぜ1号』に、乗っている乗客ですが、何人くらいの乗客がいるんですか？」

十津川が、きくと、この質問には、北野が、

「この列車は、十三両編成で、一両が食堂車です。寝台客車に、十人しか乗っていなくても、最低百二十人の乗客が乗っているわけです。それに、乗務員もいます」

「もし、列車が爆破されると、関門トンネルは、どうなりますか？」

「爆破の大きさにもよりますが、下りのトンネルは、使用不能になりますね。もし、海水が、入って来たら、復旧は、不可能になるかも知れません」

「下関車両基地からは、何の連絡もありませんか？」

「ありません。所長は、すぐ、警戒態勢をとると、いったんですがね。それに、下りの『あさかぜ1号』が、門司側に着かないとわかった時も、下関駅と、基地の両方に、すぐ、調査するようにいってあったんですが」

北野は、ぶぜんとした顔で、いった。

「所長に連絡したんですね？」

と、十津川が、きく。

「そうです」

「ひょっとすると、所長室が、占拠されているのかも知れませんね」

「しかし、そんなことが――」

「不可能じゃないでしょう？　相手は、ブルートレインを、占拠したんです。車両基地の所長室を、占拠するぐらいのことは、可能の筈ですよ」

「どうします？」

「彼等の要求に応える一方で、車両基地がどうなっているか、調べましょう。私が、山口県警に連絡をとって、

下関署から車両基地へ行って貰います」
「相手を刺戟しないで下さい。トンネル内で、爆破されたら、終りですから」
「わかっています」
と、十津川は、いった。
十津川は、すぐ、山口県警に電話を入れた。事情を説明し、下関車両基地を、秘かに、調べて貰うことにした。
そのあと、念のために、北野が、もう一度、下関車両基地の所長室に、電話を入れてみた。
「かかりませんね」
と、北野が、いった。
「所長室の電話線が、切られているのかも知れませんよ」
十津川が、いった。
一方、犯人側の要求して来た六億円が、用意された。
十時二十分。
犯人の指定した十一時までに、あと四十分である。
十時三十六分に、電話が、入った。
十津川あてだった。
「下関署の白石警部です」
と、相手は、緊張した声で、いってから、
「下関車両基地にいます。所長室に入り、監禁されていた所長を解放しました」
「犯人は、いたんですか？」
「いや。すでに、逃亡していました。犯人は女性を含めた四人ですが、リーダーらしい男に、外から、連絡が入ったといいますから、他にも、何人かいるようです。われわれが来ることを予期していたとみえて、所長室の壁に、『警察が動けば、すぐ、トンネル内で、列車を爆破する』と、殴り書きがしてあります」
「車両基地全体の様子は、どうですか？」
「それが、ひどく平穏で、基地内で働いている人間は、所長室が占拠されたことも知らなかったようです。彼等は、民間委託の清掃作業員になりすまして、車両基地に侵入したようです。現在、どこにいるか、不明です」

13

犯人から、小野田副総裁に二回目の電話が入った。
男の声だった。
「まだ、六億円が、振り込まれていないぞ。あと八分だ。八分たったら、予定どおり、トンネル内で、爆破する。わかったな！」
それだけいうと、相手は、電話を切ってしまった。
「どうしますか？」
と、十津川は、小野田副総裁に、きいた。
「君は、どうしたらいいと、思うかね？」
小野田は、蒼ざめた顔で、きき返した。
「それは、そちらの決断いかんです。山口県警と、福岡県警を、下関側と、門司側の両方から、関門トンネルに突入させることも出来ます。両県警に、委せますか？」
「しかし、犯人は、トンネル内で、列車を爆破するといっているんです。もし、爆破したら、百人を越える人間が死に、トンネルが破壊されます。そうなると、トンネルの破壊だけでも、とうてい、六億円では、すまなくなります」
北野が、いった。
小野田は、沈痛な表情で、
「トンネル内の様子がわからないのが、苦しいね。犯人も、一緒にいるなら、爆破は、脅しじゃないかね？」
「そう決めて、強行することも、考えられますが、その場合は、山口県警と、福岡県警に委せたらいいと思います。すでに、山口県警は、トンネルの入口をかためている筈ですし、福岡県警にも、連絡が、いっています」
「人命が、かかっているから、賭けは、出来ないよ」
と、小野田は、いった。
また、電話が鳴った。
「あと五分だぞ」
犯人の声が、いった。
「私は、犯人の指示どおり、六億円を振り込むことにする。百人の乗客の安全と、トンネルの安全が確認された

ら、あとは、警察に委せるよ」
と、小野田が、いった。
十津川は、改めて、山口県警と、福岡県警に、連絡を取った。
M銀行下関支店に、太田良子という女が、六億円をおろしに来るだろう。その女をマークして、犯人たちを逮捕する方法を、とることになるだろう。

14

森は、林亜矢と二人、前もって、借りておいたレンタカーで、M銀行下関支店に、向った。
「銀行の中は、きっと、警官だらけよ」
と、亜矢がいった。
「わかってる。だが、私たちに手は出せないよ。何しろ、百人を越す人質の命が、かかっているからね」
森は、落着いた声で、いった。
「警察に、くわしいの？」
元、モデルの亜矢が、きいた。
「昔、私は、警察廻りの記者をやっていてね」
「知らなかったわ」
「着いたぞ」
車は、止まり、二人は、銀行の中に入って行った。
亜矢が、通帳を見せた。
「六億円の金が、私の口座に振り込まれている筈なの。すぐ現金にして、欲しいわ」
「東京で、振り込まれていますが、すぐ、現金化するというのは――」
「君は、百人の人間の命が犠牲になってもいいのか？東京に連絡してみろ！」
横から、森が、怒鳴った。
支店長が、あわてて飛んで来た。蒼い顔で、森に向って、
「全て聞いています。現金も、用意できています」
六つのジュラルミンケースが、運ばれてきた。それを、行員も手伝って、止めてある車にのせた。

森が運転して、六億円をのせた車が、走り出した。
覆面パトカーが、すぐ、そのあとに続いた。
「車が一台、ついてくるわ」
亜矢が、うしろを振り返って、森にいった。
「一台じゃない。何台もついて来てるよ。無線で連絡しているだろうから、どこにも、警察の車がいると思わなきゃ、駄目だ」
「逃げ切れるの？」
「その積りだよ。君だって、その金は、使いたいだろう」
森は、ニヤッと笑った。
二人の乗った車は、猛スピードで、陸の関門トンネルに向った。関門国道トンネルである。全長三四六一メートルで、車道の下に、人の通る道路もある。
森は、トンネルに入ると、スピードをゆるめた。尾行する覆面パトカーも、スピードをゆるめる。
「発煙筒を投げろ」
と、森がいった。
亜矢は、車の中に用意しておいた十本の発煙筒を、次々に、投げていった。
たちまち、後方で、猛然と、煙が、吹きあがった。急ブレーキの悲鳴と、衝突する音がトンネル内に、こだました。
森は、スピードをあげた。
後方は、煙で、何も見えなくなっている。トンネルの中の警報機が、煙に感知して、鳴っている。
森の車は、煙に追われるように、門司側の出口から、外へ飛び出した。
こちら側にもパトカーがいるだろう。
前方に、故障して、とまっている大型トラックが見えた。
高田と野口が、前もって、用意しておいた車に違いない。荷台の後部に、白いチョークで三角マークが、書いてあった。
森は、そのトラックの前に廻り込んで、急ブレーキをかけた。高田と野口が、飛んで来て、六億円のケース

を、素早く、トラックの方に運び込む。
その間に、亜矢が、乗ってきた車に、火をつけた。
大型トラックが轟音を立てて走り出した。
逃げ切れるのは、五分五分の確率と、森は思っていた。

15

関門鉄道トンネルの門司側の出口をかためていた門司署の警官たちは、突然、トンネルの中から、多勢の叫び声と、足音を聞いた。
「あさかぜ1号」の乗客たちが、一斉に、逃げて来たのだ。
二十人、三十人、四十人と、増えていく。
「どうしたんだ！」
と、指揮に当っていた署長の秋山が、乗客の一人を捕えて、きいた。
「奴等が、奥で、トンネルを爆破させると、いってる！　十二時に、爆破するんだ！」
「十二時？」
秋山は、自分の腕時計に、眼をやった。あと、十九分で十二時になる。
「機関士や、車掌は？」
「列車と一緒に、人質になってる。すぐ、奴等が、列車を動かして、こっちへ出て来るぞ！」
「こっちへ出て来るんだな？」
「そうだ。機関士なんかを人質にして、列車ごと逃げる気なんだ！」
その言葉を裏書きするように、トンネルの奥で、電気機関車のモーターが、動き出した音が、かすかに聞こえて来た。
「門司運転所に、引き入れて下さい！」
秋山は、近くにいた運転所の所長に、怒鳴るように、いった。
轟音と共に、銀色の電気機関車に引っ張られた、「あさかぜ1号」が、姿を現わした。

ポイントが、切りかえられているので、列車は、本線から離れて、門司運転所の方へ入って行く。
秋山署長は、何人かの刑事に、運転所へ入った列車を追わせておいて、自分は、関門トンネルの出入口を、じっと、睨んだ。
あと七分で、十二時である。
今から、トンネルに飛び込んで行っても、間に合わない。
秋山は、トンネル出入口の周辺から、人々を、後退させた。
突然、トンネルの奥で、閃光が走った。続いて、猛烈な爆風が、吹きあげて来た。
空気が、びりびりと鳴り、線路に敷いてある小石が、飛んだ。
身体を伏せて、眼を閉じていた秋山は、爆風の止むのを待って、顔を上げた。
トンネルは、こわれていないように見えた。ただ、出入口は、煙で、おおわれてしまっている。
煙が消えるのを待って、車両基地の係員が、修理のために、入って行くだろう。
秋山は、犯人の方が気になって、運転所の方へ、歩いて行った。
刑事課長が、こちらに走って来た。
「やられました！」
と、課長が、叫ぶ。
「どうしたんだ？」
「犯人は、乗っていません。機関士は、犯人が、十二時に、爆発すると脅したので、夢中で、列車を動かして、トンネルから出たそうです」
「それで犯人は？」
「二人いたそうですが、わかりません。恐らく、さっき、逃げ出して来た乗客の中に、まぎれ込んでいたんだと思います」
「くそ！」
と、秋山署長は、怒鳴った。

16

森たち四人の乗った大型トラックは、小倉港に入って行った。

小倉港から、三つの航路で、大型カー・フェリーが出ている。

泉大津行の阪九フェリー、東神戸港へ行く同じ阪九フェリー、そして、徳島を通過して、東京フェリーターミナル行のオーシャン東九フェリーの三つである。

森たちの大型トラックは、徳島経由東京行のフェリーに乗った。

このフェリーは、翌日、徳島に着き、三日目の朝、東京に着く。

一七時五〇分に、森たちを乗せた大型フェリーは、小倉港を離れた。

森は、ラジオをかけてみた。

ニュースが、事件のことを、延々と伝えている。

〈犯人グループは、少くとも、六人以上と思われますが、六億円を手に入れて、姿を消してしまい、当局の必死の捜査にも拘らず、その行方をつかむことが出来ません〉

と、アナウンサーが、いっている。

「上手くいったみたい」

と、亜矢が、嬉しそうに、いった。

「青木君と、川村君も、うまく逃げたようだ」

森は、満足げに、いった。

二人とは、東京で、落ち合うことになっていた。

森は、満足していた。仲間の柴田敬は、止むなく殺してしまったが、計画の実行段階では、一人も、殺さなかった。それが、自慢だった。

翌日の昼少し前に、フェリーは、徳島港に着いた。

が、森たちは、降りなかった。

〈いぜんとして、犯人たちの行方は、全くわからず、捜査当局は、焦りを見せています。もし、このまま、犯人グループが、見つからないと、六億円は、まんまと強奪

されてしまったことになり、犯人の脅迫に屈した国鉄当局、並びに、警察当局に対して、批判が集中するものと思われます〉

ニュースは、だいたい、この調子だった。

犯人は、すでに、海外へ逃亡したのではないかというニュースも流れた。

「いい傾向だよ」

と、森は、他の三人に、いった。

三日目の早朝、まだ暗い中に、東京湾に入った。

四人とも、甲板に出て、少しずつ、明けてくる京浜工業地帯を眺めていた。

森は、一億円を持って、どこか、静かな田舎で暮したいと思っている。

亜矢は、多分、外国へ行くだろう。

脱サラで失敗した野口は、一億円で、また、何かの店をやる気らしい。

高田は、何をするのだろう？　とにかく、六億円を手に入れてから考えると、いっていた。

若い青木は、まず、ポルシェを買いたいといっていた。

小柄な川村は、マンションを買うと、森にいった。一億円あれば、広いマンションが買えるだろう。

夜が明けて、船は、東京フェリーターミナルに着いた。

野口が運転して、四人と、六億円をのせた大型トラックが、上陸した。

とたんに、覆面パトカー三台に、囲まれてしまった。

安心していただけに、森も、呆然としている。

四人は、のろのろと、トラックから降りた。

「荷台に、六億円のケースが、のっています」

と、亀井が、十津川に、大声で、いった。

「君たちを、逮捕する」

十津川が、森たちに、いった。

森は、自分の手に、手錠がかけられるのを、見ながら、

「ここに来ると、わかっていたのか？」

と、十津川に、きいた。
「いや。わかってはいなかった。だが、六億円の金といえば、大荷物だ。運ぶ方法として、飛行機、車、列車、そして、船を考えたよ。そして、道路には、非常線を張り、空港と、ここのような港にも、警官を配置したんだよ。たまたま、その一つに、君たちが、引っかかったというわけだよ」
「しかし、ラジオのニュースは――」
と、いってから、はっとして、
「わざと、あんなニュースを流していたのか？」
「まあね、どこにいても、君たちは、気になって、ニュースを聞くと思ってね」
と、十津川は、微笑してから、
「あとの仲間は、どこにいるのかね？」

裏切りの中央本線

1

西本刑事は、二年ぶりに、大学時代の友人、崎田に会った時、次の日曜日に、信州の松本へ行くと話した。

「久しぶりに、休暇がとれたので、三日間、信州へ行って来ようと思っているんだ」

「次の日曜日？」

と、崎田は、おうむ返しにいって、しばらく考えていたが、

「乗る電車は、もう決めてるのか？」

と、きいた。

「いや、午前中に、東京を出発しようと思っているが、切符は、まだ、買ってないんだ。多分、『あずさ』に、乗ることになると思っているんだが」

「それなら、新宿を、午前一〇時二八分に出る急行にしてくれないか」

「なぜ？」

「実は、おれも、日曜日に、天竜峡へ行くんだ。それで、君と一緒に行きたいと思ってさ。ちょっと、君に、相談したいことがあるんだよ」

と、崎田は、真剣な顔で、いった。

「その急行は、松本へ停まるんだろうね？　信州へ行く時、いつも、『あずさ』に乗っていて、急行に、乗ったことがないんだ」

「もちろん、停まるさ。それに、所要時間は、特急と、ほとんど違わないよ」

と、崎田は、いった。

崎田が、説明してくれた列車は、急行「アルプス3号」だった。

この列車は、飯田線の飯田まで行く、急行「こまがね3号」と、併結している。崎田は、この列車で、飯田まで行き、その先、天竜峡へは、普通電車に、乗りかえるのだ、といった。

「岡谷で、飯田線に入るんだが、そこまでは、一緒に行けるからね」

と、崎田は、いった。

大学時代、崎田と、それほど、親しかったわけではない。

西本の方は、もっぱら、ラグビーなどをやっていたが、痩せ型の崎田は、同人雑誌を出すような文学青年だったからである。

それでも、卒業後の話や、友人の噂などは聞きたかった。

それに、三日間の休暇を貰っているので、急行では駄目で、特急にしなければならないこともなかったから、西本は、崎田のいう急行「アルプス3号」に、乗ることにした。

これでも、松本には、一四時〇五分には着けるのだ。旅館に入るには、丁度いい時刻だし、午後二時からでも、ゆっくり、市内見物は出来るだろう。

幸い、殺人事件も起きなかったので、次の日曜日、西本は、旅行の支度をして、自宅マンションを出た。

一月中旬の日曜日で、この季節としては、暖かい日だった。

崎田とは、ホームで、落ち合った。

二人の乗る電車は、すでに、4番線ホームに入っていた。

165系と呼ばれるオレンジとグリーンのツートンカラーの車両である。

特急「あずさ」のようなヘッドマークはなく、ただ、「急行」の表示だけがされている。

先頭から四両が、飯田行で、後の七両が、松本行である。

崎田は、分岐する岡谷までと、岡谷から先の切符を、別に買っていた。二人とも、立って行くのが嫌で、指定席にしたのだが、飯田までの切符を買うと、別れて、座らなければならなかったからである。

隣りの3番ホームから、午前一〇時発の特急「あずさ7号」が、発車して行った。

日曜日と、スキー・シーズンということで、ホームには、乗客が、あふれていた。スキー客も多い。

西本と、崎田は、最後尾の1号車に乗った。
松本方面行の時は、十一両編成の11号車が先頭である。
一〇時二八分の定時に発車した時には、車内は、ほぼ、満席だった。
崎田は、発車するまでの間に、キオスクで、みかんと、駅弁を買って来てくれた。
西本が、金を払おうとすると、崎田は、手を振って、
「いいよ。おれが、特急の『あずさ』に乗ろうと思っていた君に、この『アルプス』に、乗って貰ったんだから」
「しかし――」
「それに、君に、聞いて貰いたいこともある」
「そんなことを、いっていたね」
「君は、今、刑事をやっているんだろう？」
「ああ、そうだ。ただし、三日間の休暇を貰っているから、その間は、非番だがね。君は、確か、どこかの商社に勤めているんだろう？」
「日南商事で、働いている」
「大会社じゃないか。羨ましいよ」
「それがね、四年間勤めてみて、自分が、つくづく、サラリーマンに向いていないのがわかったんだ。同じ時間に出社して、毎日、同じ仕事をやる。そういうルーチンワークに、疲れてしまってね」
崎田は、小さな溜息をついた。
「それが、僕に話したかったことか？」
「ああ」
「そうか」
西本は、ちょっと、拍子抜けした感じだった。
「いけなかったのか？」
と、崎田が、きいた。
西本は、あわてて、
「いや、そういう意味じゃないが、僕が、刑事だもんでね。何か、事件に巻き込まれて、困っているのかと、早合点したんだ。ほっとしたよ。違っていて」
「もし、事件に巻き込まれていたら、君より、弁護士に

相談するよ」
と、崎田は、肩をすくめて、
「おれは、時々、今の会社を、辞めようかと思うんだ」

2

「そりゃあ、もったいない」
西本は、正直な気持を、いった。
「そうかね」
「商社マンといえば、花形じゃないか」
「おれは、君が、羨やましいんだ。殺人事件みたいな、どきどきするようなことに、ぶつかれるからさ。退屈なんかしたことはないだろう？」
「事件は、確かに、どきどきするようなものだがね。その捜査となると、地味で、根気の要る仕事だよ。例えば、犯人の遺留品が手袋だったら、その手袋の製造元から、販売経路を、足を棒にして、探して歩かなければならないんだ。夏のかんかん照りでも、冬の雪の日でもね」
「それでも、毎日、同じ仕事をやってるよりはいいよ」
崎田は、羨やましげに、いった。
「そうかねえ」
「それに、おれは、昔から、対人関係が、苦手でね」
崎田は、ちらりと、窓の外に、眼をやった。
電車は、阿佐谷あたりを走っているらしい。どこまでも、家並みが続く。
「しかし、商社を辞めて、どうするんだ？」
西本も、窓の外に、眼をやった。
「小説を書いて、生活が出来ればいいと思っているんだがね」
「そういえば、君は、大学時代、同人雑誌をやっていたな」
「あの時は、遊びだったが、最近は、真剣に考えてるんだ。今度、天竜峡に行くのも、あの辺を舞台にして、書きたいと思ってね」
「なるほど」

「だが、ものになるという自信がなくてね」
「そんなことはないと思うが――」
西本は、あいまいに、いった。
大学時代、崎田が、同人雑誌をやっていたのは知っていたが、彼の作品を、読んだことは、なかったからである。
「いっそのこと、会社を辞めて、小説書きに専念しようかとも、思うんだ」
「しかし、生活は、どうするんだ？」
「四年働いたから、退職金が少しは出るし、失業手当も貰えるしね。その間に、小説が売れればと、思ったりしているんだが」
「しかし、小説が売れなかったら、どうするんだ？」
「それを考えると、辞めるのが、怖くなるんだよ。だから、君に、相談しようと、思ったんだ」
「しかし、僕は、小説なんか書いたことがないからね」
「君は、商売柄、いろんな人間を見てるんじゃないか。だから、何か、参考になる意見をいってくれるんじゃないかと思ったんだがな」
「それは、買いかぶりだよ」
と、西本は、苦笑した。
人生相談なんて、柄じゃないのだ。西本自身、時には、刑事であることに、自己嫌悪を覚えたりしているのである。
（カメさんなら、いい返事が出来るかも知れないな）
と、西本は、同じ捜査一課のベテラン刑事の名前を、思い出したりした。
このあとは、崎田も、会社を辞める辞めないの話は、中止して、大学時代の思い出や、当時の仲間が、今、どうしているかという話になった。
西本は、ほっとした。
こうした話なら、いくらでも、楽しくなってくる。
当時の教師の悪口をいったり、お互に知っている仲間の近況を教え合っている中に、電車は、大月を過ぎ、甲府に近づいていた。
車窓に、一面の銀世界が、広がっている。

東京では、一度だけ雪が降ったが、その後は、おだやかな日が続いて、雪を見ていない。
「さすがだね」
と、思わず、西本は、感嘆した。
中央本線は、八王子を過ぎると、山の中を走るようになる。
その山々も、林も、畠も、全て、白の世界である。もう、根雪になっているようだから、春まで、溶けないだろう。
甲府を過ぎ、小淵沢に近づくと、雪が、ますます深くなり、それに反比例して、音が消えたようになってくる。

昼を過ぎたので、崎田が買ってくれた駅弁を広げた。
「この分だと、君の行く天竜峡のあたりも、雪に埋もれているんじゃないのか」
と、西本は、いった。
「ああ、おれの小説では、雪の天竜峡が、舞台なんだ」
と、崎田がいう。
「どんなストーリイなんだ？」
「一種の復讐譚だよ」
「ふーん」
「白一色の美しい景色の中で、人が死ぬんだ」
「天竜峡で？」
「そうしたいと思っているんだが、本当に、雪の天竜峡が、それにふさわしいかどうか、実際に、この眼で見なければ、わからないけどね」
「雪の北アルプスは、どうだい？」
「悪くはないが、ちょっと、有名過ぎてね」
と、崎田は、いった。
小淵沢を過ぎると、晴れていた空が急に曇って、粉雪が、舞い始めた。
新宿から乗って来た若いスキーグループは、雪だ、雪だといって、はしゃいでいる。
上諏訪。一三時二〇分着。
雪は、止んだかと思うと、また、降り出した。

この辺りの冬の気象は、いつも、不安定なのだろうか。

下諏訪を過ぎると、崎田が、立ち上った。

「次の岡谷で、切り離しだから、おれは、もう、前の車両に移っているよ」

「岡谷では、飯田行が、先に出発するんだったね？」

「確か、おれの飯田行が、一三時三四分で、君の松本行は、一三時三七分だよ」

と、崎田は、いった。

西本は、7号車まで、崎田を送って行った。

まだ、7号車と8号車の間の扉は、開いている。

崎田は、8号車に入ると、西本に、小さく手を振ってから、先頭車の方へ、歩いて行った。

岡谷には、定刻の一三時三一分に着いた。

駅員が、早速、切離しの作業に、かかった。

三分後には、先頭の四両が切り離され、先に、出発して行った。辰野を経て、飯田線に入るのである。

それを見送って、西本は、自分の席に戻った。

三分後の一三時三七分に、七両になった松本行の急行「アルプス3号」が、発車した。

いぜんとして、粉雪は、降ったり、止んだりしている。

車窓の景色は、雪だけである。家の屋根には、二十センチ近く雪が積り、軒からは、つららが、下っている。

屋根の雪おろしをしている光景も、眼に入った。

一三時四七分、塩尻着。

塩尻は、1番線から6番線まで、三つのホームを持っている。

ここで、名古屋方面から来た中央本線と一緒になり、更に、篠ノ井線に入って、北の松本へ向う。

松本へは、一四時〇五分に着いた。

松本のホームにも、雪が積っていた。

どやどやと、乗客がおりて行く。西本は、一人旅の気安さで、他の乗客が、おりるのを待ってから、ゆっくりと、立ち上った。

その時、急に、ホームが、騒がしくなった。

3

最初、何が起きたのか、わからなかった。駅員が、ホームを走って行く。

（病人でも出たのだろうか？）

と、思いながら、西本も、ホームにおりると、駅員が、走って行った方に、眼をやった。

七両編成の先頭から二両目あたりで、人々が、集って、騒いでいる。

6号車の付近である。

その中に、制服姿の鉄道公安官も、やって来て、6号車に、乗り込んだ。

西本は、人垣のうしろから、背伸びをした。

6号車で、何かあったらしい。

駅員や、公安官は、中に入ったまま、なかなか出て来なかった。

七、八分して、担架を持った救急隊員が二人、ホームを走って来た。

（やはり、急病人か）

と、思っていると、6号車から、乗客が、担架にのせられて、おりて来たが、身体に、毛布がかぶせてあった。

顔も、毛布で蔽われてしまっている。

（死んでいるのか）

と、西本は思い、人垣を作っていた乗客も、同じことを考えたらしく、小さなどよめきが、起きた。

担架に続いて、おりて来た駅員をつかまえて、西本は、

「どうしたんですか？」

と、きいてみた。

三十五、六歳のその駅員は、青ざめた顔で、

「あんたは？」

と、きき返した。

「この列車に乗って来たんですが、東京警視庁の者です。今日は、非番ですが」

西本は、名刺を、相手に渡した。
駅員は、びっくりしたような眼になってから、近くにいた助役に、その名刺を見せた。
五十二、三歳の助役だった。
彼は、名刺と、西本を見比べるようにしながら、
「本当に、刑事さんですか？」
「お疑いなら、電話で確かめて下さい。日曜日ですが、捜査一課には、誰かいますから」
「今、担架で運ばれて行ったのは、ごらんになったでしょう？」
と、助役は、いった。
「ええ。見ました。死んだんですか？」
「6号車のトイレで、乗客の一人が、刺されて、倒れていたのが、見つかりましてね。すぐ、救急車を呼びましたが、間に合いませんでした」
「毛布がかぶせてあったので、はっきりしなかったんですが、どんな人だったんですか？」
「若い男の方です」
「警察には？」
「もちろん、連絡しました」
と、助役が、いった時、長野県警の刑事や、鑑識が、駈けつけて来た。
西本は、邪魔になってはいけないと、助役に、今日泊る松本市内の旅館の名前をいい、何かの時には、お役に立ちたいと、いって、改札口に向って、歩いて行った。
雪が止んで、陽が射してきた。
改札口を出ると、北アルプスが、きらきら輝やいて見えた。
松本駅を、北アルプスの見える駅というが、その通りだと、西本は、思った。
駅から歩いて、五、六分のところにある、「旭館」という旅館に、まず、足を向けた。予約しておいた旅館である。
予定では、タクシーを呼んで貰って、松本市内の観光名所めぐりをしようと思っていたのだが、事件のことが

気になって、その気になれなくなってしまった。やはり、休暇で来ても、刑事の気分が、抜けないのだろう。

もちろん、これは、長野県警の事件で、西本が、関与できることではないと、わかっては、いるのだが。

部屋のテレビをつけてみても、まだ、事件のことは、報道されない。

午後五時のニュースで、やっと、事件のことが、画面に出た。

しかし、まだ、くわしいニュースにはなっていなかった。

一四時〇五分に、松本に着いた急行「アルプス3号」の車内で、男の乗客が、刺されて殺された。この男の人は、持っていた運転免許証から、東京新宿区の和多晴記さん（三十歳）と考えられる。それだけしか、アナウンサーは、いわなかった。

ブラウン管には、運転免許証の写真と思われる被害者の顔が映り、続いて、松本駅に停車している急行「アルプス3号」が、映った。

（おれも、あれに乗って来たのだ）

と、西本は、改めて思った。

同じ電車の車内で、そんな事件が、起きているとは、全く、知らなかった。

犯人は、電車が、松本に着く寸前に、被害者を刺し、大騒ぎになる前に、松本駅のホームから、どこかへ逃げてしまったに違いなかった。

七時を過ぎて、天竜峡に行った崎田から、電話が入った。

「今、テレビのニュースを見て、びっくりしているんだ。君の乗った列車で、人が殺されたんだってね」

と、崎田が、いきなり、いった。

「ああ、そうだ」

「君は、刑事だから、地元の警察に協力することになるのか？」

「要請があれば協力する気でいるが、どうなるかわからないよ。なぜだ？」

「もし、そんなことが無いのなら、一日割いて、ここへ

来たらと思ってね。雪の天竜峡は、想像以上に、素晴らしいんだよ。一見の価値はあるからね。一緒に、雪を見ながら、酒でも飲まないか？」

「君は、そこで、小説の構想を練るんだろう？」

と、西本は、きいた。

「そうなんだが、雪景色を見ていたら、無性に、君と飲みたくなってきてね。新天竜荘という旅館なんだ。気が向いたら、来てくれないか」

と、崎田は、いい、その旅館の電話番号を教えてくれた。

午後九時近くなって、旅館に、松本署の吉田という中年の刑事が、訪ねて来た。

「折角、観光にいらっしゃったのに、申しわけありません」

と、吉田刑事は、丁寧に、いった。

「いや、構いませんよ。出来るだけ、協力したいと、思っています」

西本は、相手を部屋に入れ、お茶をすすめた。

窓の下では、また、粉雪が舞い始めている。庭の照明が当って、きらきらと、輝やいて見える。

「被害者は、東京の人間だそうですね」

と、西本の方から、いった。

「そうなんです。網棚から、被害者のものと思われるショルダーバッグが、見つかりました」

「何か、事件の参考になるようなものが、入っていましたか？」

「いや、何もなしです。カメラ、下着、松本周辺の地図など、観光客が、普通に持参するようなものしか入っていませんでした。カメラのフィルムには、まだ、何も写っていませんでした」

「被害者は、松本へ行くことになっていたんですか？」

「そのようですね。ポケットに、松本までの切符が入っていました。急行券もです。

「新宿から、松本までの切符ですか？」

「そうです」

「すると、あの急行『アルプス3号』に、新宿から、

ずっと乗っていたんですね」
「それで、西本さんが、被害者を見たことがあるのではないかと思って、参ったんですが」
「申しわけないんですが、被害者の顔は、全く覚えていないんですよ。何しろ、車内は、かなり込んでいたし、私は、1号車に、友人と一緒に座っていて、岡谷に着くまで、動きませんでしたからね」
「岡谷と、いいますと？」
「実は、その友人は、飯田線の天竜峡へ行くので、岡谷までは、私と一緒でしたが、岡谷が近づくと、前方の車両へ移ったんです。あの列車は、前四両が、飯田行ですから。その時、私も、7号車まで、友人を送っていきました。しかし、6号車に、被害者がいたのは、覚えていませんね。いや、被害者だけじゃない。どの乗客の顔も、覚えていないんですよ」
「そうかも知れませんね。誰も、まさか、車内で、人が殺されるなんて、思ってもいなかったでしょうからね」
「被害者の商売は、わかったんですか？　名前が、和多ということは、ニュースで知りましたが」
「和多晴記です。その後、東京世田谷にある富士運送という会社で、トラックの運転をしていたことまでは、わかりました」
「トラックの運転手ですか」
西本は、ちょっと意外な気がした。何となく、普通のサラリーマンを想像していたからである。
松本署の刑事は、言葉を続けて、
「今のところ、これ以上のことは、わかりません。被害者は、独身なので、その運送会社の人事課長が、明日早く、こちらに来るといっていましたが」
といった。
翌日、西本は、松本市内を見物して廻った。
観光客の誰もが行く、松本城や、旧開智学校などを見て歩いた。
松本城は、黒塗りの実戦的な造りのため、烏城と、呼ばれている。
そのあと、足を伸して、美ケ原温泉郷も、見て来る予

定にしていたのだが、どうしても、事件のことが気になって、昼食のあとは、松本署を、のぞいてしまった。

昨夜、旅館に訪ねて来た吉田刑事が、西本を迎えて、お茶をいれてくれた。

「今、被害者の会社の人事課長が来て、遺体を確認しました」

「何か、これといった話が聞けましたか？」

と、西本は、きいてみた。

「よく働く従業員だったという話ですが、殺人につながるような話は、聞けませんでしたね。ちゃんと、休暇をとっていたそうですから、松本には、観光で来たと思うんですが」

「女性関係は？」

「被害者は、長身で、なかなか、いい男ですからね。人事課長も、女はいただろうといっていましたよ。だが、特定の女性の名前は、知らないと、いうことで、こちらの手掛りもなしです。あとは、西本さんの東京警視庁で、被害者の周辺を調べて貰うより仕方がないとも、思っているんですが」

と、吉田は、いった。

西本が、松本署を出ると、急に、若い女性が、近づいて来た。

「失礼ですけど、刑事さんですか？」

と、声をかけられた。

二十五、六歳の女だった。

化粧していない顔で、じっと、西本を見つめている。

西本は、反射的に、「ええ」と、肯いてから、女が、きいたのは、ここの刑事かという意味かと、考えた。

「それなら、会わせて下さい」

と、女が、いう。

「誰にですか？」

「彼の遺体が、ここにあると聞いて来たんです」

「遺体？　ああ、和多晴記さんのですか？」

西本がきくと、女の顔が、輝やいて、

「ええ。やはり、ここなんですね？」

「あなたは、彼とは、どんな？」

「親しくしていました」
とだけ、女は、いった。
西本は、彼女を、吉田刑事のところへ連れて行った。
その途中で、彼女の名前が、梅木かおりと知った。どうやら、恋人だったらしい。
西本は、彼女を、吉田に引き合せたあとも、その結果を知りたくて、待っていた。
吉田刑事は、一時間ほどして、戻って来ると、西本に向って、
「おかげで、いろいろなことが、わかりましたよ」
と、いった。
「彼女は？」
「今、うちの警部が、話を聞いています。今日は、市内の旭館という旅館に、泊って貰うことにしました。ああ、西本さんと、同じ旅館です」
「どんなことが、わかったんですか？」
「ちょっと妙なんですが、ショルダーバッグが、違うというんですよ」
「ショルダーバッグというと、被害者和多晴記のバッグですね？」
「そうなんです。あの列車の網棚には、あのバッグしか、余分になかったので、被害者のものだと、考えたんですがね」
「彼女は、なぜ、違うといってるんですか？　下着のサイズが違うとか、ですか？」
「いや、下着は、新品のMサイズで、サイズは、違わないそうです。カメラが、違うと、いってるんです」
「ほう」
「バッグに入っていたのは、いわゆるバカチョンカメラなんです。三万円ぐらいのものですかね。ところが、彼女にいわせると、被害者の和多は、カメラに凝っていて、旅行に出る時は、いつも、ライカを持って行き、それに、望遠レンズも、持っていたというんですよ」
「ライカと、望遠レンズですか」
「彼女の言葉を、そのまま、うのみには出来ないんですが、まったくでたらめをいっているとは思えないんです

よ」
と、吉田刑事が、いった。
「もし、ショルダーバッグが、被害者のものではないとすると、犯人が、すりかえた可能性がありますね」
と、西本は、いった。

4

旭館に戻って、西本が、休憩室で、ぼんやり、事件のことを考えていると、梅木かおりが、帰って来た。
さすがに、沈んだ表情をしている。
「お茶でも、おごりますよ」
と、西本は、声をかけた。
旅館の中の喫茶室へ誘い、コーヒーを、おごった。
西本も、彼女から、いろいろと聞きたいことがあったが、彼女の方も、誰かと、話をしたい気持があったようだった。
「バッグが、和多さんのものと、違っていたようですね」
と、西本が、切り出した。
「ええ。カメラは、どうみても、違うんです」
かおりは、考える顔で、いった。
西本は、彼女に断ってから、煙草に火をつけた。
「失礼ですが、亡くなった和多さんは、トラックの運転をやっておられたんでしょう？」
「ええ。だから、ライカを持って、旅行に出るのは、おかしいと、おっしゃるの？」
彼女の語調に、別に、咎める感じはなかった。
「カメラを集めていたといったことがあるんですか？」
「いいえ。彼は、前に、友だちから借りたカメラで、何気なく撮ったものが、カメラ雑誌に、入選してしまったんです。それから、写真が好きになって、カメラも、最高のものがいいといい、貯金をおろして、中古のライカを買ったんですわ」
「なるほど」
「彼は、小型トラックの運転をしているんですけど、い

つも助手席に、カメラを置いておくんです。愛用のライカですね。東京の町を走っていると、時々、事件にぶつかるそうなんです」
「それを、ライカで撮るんですか？」
「ええ。新聞に、彼の写真が採用されて、賞金を貰ったことも、ありましたけど」
「それで、旅行にも、ライカと、望遠レンズを持ち歩くんですね？」
「ええ」
「たまたま、安カメラを持って来たということは、考えられませんか？」
「ライカしか、持っていませんわ」
「和多さんが、松本へ来ることは、知っていましたか？」
「電話で聞いていました。三日で帰って来るから、楽しみにしていろって、いわれましたわ」
「楽しみにね」
「ええ」
「お土産を買って帰るということですかね？」
「あまり、旅先で、お土産を買って来る人じゃないんです」
「すると、写真ですかね。いい写真を撮ってくるということになるんですか？」
「私は、そう思っていましたわ」
「詰らん質問ですが、かおりさんは、なぜ一緒に来なかったんですか？」
と、西本は、きいた。
「私は、お勤めしていますし、それに、今度の旅行は、どうしても、一人で行きたいと、彼が、いっていたんです」
「どこへお勤めですか？」
「渋谷の相互銀行ですわ」
「銀行ですか。彼は、ひとりで行きたいということが、よくあるんですか？」
「いいえ。改まっていうことは、めったに、ありませんでしたわ。でも、男の人って、ひとりになりたい時っ

て、あるんでしょう？」
「時にはね」
と、西本は、微笑してから、
「和多さんは、お金を盗られていないようですから、物盗りの犯行じゃない。それに、車内で、大ゲンカをしたということも、ないでしょうね。もし、命をとられるようなケンカをしたのなら、他の乗客なり、車掌なりが、知っている筈ですからね」
「ええ」
「とすると、前々から、和多さんを憎んでいた人が、同じ車内にいたのではないかと、思うんですよ。何か、心当りは、ありませんか？」
「同じことを、松本署でも、きかれましたわ」
「それで、どうなんですか？」
「心当りがないんです」
「しかし、人間というのは、どこかで、他人に、憎まれているものですよ」
「それは、わかりますけど、彼は、他の人と、問題を起こすタイプじゃないんです。それに、ひとりで仕事が出来るというので、普通のサラリーマンをやめて、トラックの運転手になったくらいですから」
「人間嫌いだったということですか？」
西本が、きくと、かおりは、首を横に振って、
「そういうのとも違うんです。普通のサラリーマンだと、宮仕えで、上役に、心にもないお世辞をいったりしなければならないでしょう？　それに、いろいろなつき合いがあったり。そういうのを、面倒くさがる方だったんです。それで、ひとりで働ける運転手の道へ行ったんですわ」
「なるほどね。しかし、トラックの運転でも、上司とか、運転手仲間というのがいるわけだから、トラブルが、皆無ということは、ないと思いますがね」
西本が、いった。
「彼は、いつも、トラックの運転というのは、免許証さえ持っていれば、どこでも出来ると、いっていたんです。それに、日給月給だから、休めば、給料が引かれる

だけで、他の人に申しわけないということもないから、気楽だとも、いっていましたわ。だから、もし、今の職場で、トラブルがあったら、彼は、すぐ、他のところへ移ったと思うんです」
「和多さんは、お金に困っていましたか？」
「収入は、多くはありませんけど、困ってはいませんでしたわ」
「それは、お金に淡白だったということですか？」
「お金は、誰だって、欲しいと思いますわ。私だって、彼だって、お金は、欲しかった。でも、だから、殺されたとは、思えませんけど」
「あなたは、和多さんと、結婚することになっていたんですか？」
「ええ」
「予定は、いつ頃ということでした？」
「予定というのは、ありませんでしたけど、なるたけなら、それまでに、マンションぐらい、自分の手に入れたいなと、いっていたんです」
と、かおりは、いった。
「あなたは、なかなか、魅力的ですよ」
と、西本は、いった。
かおりは、ちょっと、笑っただけだった。
「それで」と、西本が、いった。
「あなたを、勝手に好きになった男がいて、その男が、和多さんを殺したということは、考えられませんかね？　或いは、和多さんを、好きな女がいて、その女が、かっとして、彼を殺したということは、考えられませんか？」
「そのことも、松本署で、きかれましたわ」
と、かおりは、いった。
「心当りは、ありませんか？」
「彼に、私以外の女がいたとは、思えないんです。そんな話は聞いていません。それに、私は、彼以外の男を、好きにはなっていませんでしたもの」
最後の言葉を、かおりは、きっぱりと、いった。それに、意志の強い、彼女の性格が、現われている感じだっ

た。
「東京へは、いつ帰るんですか？」
と、最後に、西本は、きいた。
「明日、この松本で、遺体を茶毘に付して、遺骨を持って、帰りますわ」
と、かおりは、いった。

5

翌日の午後、西本は、かおりと一緒に、東京に帰ることにした。
その前に、天竜峡にいる崎田に、電話をかけた。
西本が、帰京すると、告げると、崎田は、
「じゃあ、こっちへは、来ないのか？」
と、不満気に、きいた。
「残念ながら、いけなくなったよ。東京に戻ったら、遊びに来てくれ」
と、西本は、いった。
「やっぱり、君は、刑事だな。例の事件が、気になって、仕方がないんだろう」
崎田が、笑った。
その日の一五時二三分松本発の「あずさ16号」で、かおりが帰京するというので、西本も、同じ列車に乗った。
松本署の吉田刑事からは、東京で、何かわかったら知らせてくれるように、頼まれてもいた。
かおりは、恋人の遺骨を抱いての帰京である。
「東京に戻ったら、彼の家へ行かれますか？」
と、西本は、きいてみた。
「ええ。遺骨は、彼が借りていたマンションに、しばらく、置いてと思っているんです。彼は、肉親が、ほとんどいない人だったんです。それで、親戚の方と、どこのお寺に持って行ったらいいか、相談しなければなりませんし――」
「今日、一緒に、和多さんのマンションへ伺っていいですか？」

「構いませんけど、なぜ？」
「松本署に頼まれましてね。和多さんのライカが、本当に無くなっているか、見て来て欲しいと、いわれたんです。ひょっとすると、今回の旅に限って、愛用のライカを、持っていかなかったかも知れませんからね」
と、西本は、いった。
西本が、喋るのをやめると、かおりは、黙って、眼をつぶってしまった。
疲れたのかも知れなかった。
或いは、眼を閉じて、亡くなった恋人との思い出に、ひたっているのかも知れなかった。
一八時二五分に、新宿に着いた。
西本が、タクシーをとめて、二人で、死んだ和多のマンションに向った。
四谷三丁目近くのマンションで、1Kの小さな部屋だった。
かおりが、遺骨を、机の上に置き、途中で買い求めた花を飾っている間、西本は、狭い部屋の中を見廻していた。
一言でいえば、男くさい部屋である。
机と、テレビぐらいしか、眼につくものはない。
洋ダンスの代りに、組立て式のハンガーかけがあり、それに、皮ジャンパーや、ズボンなどが、引っかけてあった。
ライカは、どこにも、なかった。
壁には、パネルにした大きな写真が、二枚かかっていた。
きれいな写真では、なかった。
一枚は、火災の写真である。昼火事である。高層マンションが、火に包まれている。窓の一つから、若い女性が、助けを求めているのも、写っていた。
「それ、K新聞の読者の報道写真コンクールで、二席になったんです」
と、かおりが、説明した。
もう一枚は、自動車事故の写真だった。
事故の直後に撮ったものだろう。くしゃくしゃになっ

た二台の乗用車。血だらけで、道路に横たわっている若い女。
「これも、そうですか？」
と、振り向いて、西本は、かおりに、きいた。
「それも、同じK新聞で、今度一席になったんです。彼は、それが自慢だったんです」
「しかし、よく、二回も、こういうチャンスにぶつかりましたね？」
西本が、きくと、かおりは、遺骨の傍に置いた和多の写真を見ながら、
「それは、彼が、車の運転を仕事にしていたからだと思いますわ。お得意の荷物を、送り先に届ける仕事ですけど、毎日、都内や、近くの県を走り廻っているわけでしょう。普通のサラリーマンなんかより、ずっと、事件にぶつかる可能性は、多かったと思うんです」
「そのチャンスを生かすために、いつも、ライカを、助手席に置いていたというわけですか？」
「ええ」
「和多さんは、それが、好きだったんですね」
「私は、普通のサラリーマンをしてくれている方が、よかったんですけど」
と、かおりはいった。
西本は、小さな本棚に眼を移した。
中国の歴史が好きだったのか、そんな本が多い。
次に多かったのは、住宅の本だった。
「新しい住いの設計」「坪三十万円からの新住宅」「住宅の設計と実際」といった背文字が並んでいる。他に、月刊、週刊の住宅雑誌が、積み重ねてあった。
和多は、かおりとの結婚を考え、何とかして、新しい住居が欲しかったのかも知れない。
それなのに、和多は、殺されてしまった。
さぞ、無念だったのではないか。
「和多さんと、土地を買って、家を建てるような話をしたことがありますか？」
と、西本は、きいてみた。
「なぜですか？」

かおりが、きき返した。
「ここに、住宅のことを書いた本や、雑誌が、一杯あるからですよ。しかも、本も、雑誌も、最近のものが、多いですからね」
西本がいうと、かおりは、眼をしばたたいて、
「そりゃあ、結婚して、新しい住宅に住むのは、夢ですもの。二人で、よく話しましたわ。私も、彼も、動物が好きなんです。でもここでも、私が今借りてるアパートでも、飼えないんです。だから、早く、自分の家を持って、好きな猫を、何匹も飼いたいと、話していましたわ」
「猫が好きなんですか？」
「ええ。私も彼もですわ。仔猫が、捨てられてると、拾って帰って、飼いたいと、いつも思うんですけど、飼えなくて」
「そういえば、ここに、猫の置物がありますね」
西本は、本棚の上に並んでいるガラス細工の猫に、眼をやった。
小さな猫が、七匹並んでいる。親が一匹いて、そのあとに、仔猫が六匹、並んでいる感じだった。
「私が贈ったんです」
と、かおりが、いう。
「具体的な話は、なかったんですか？」
「何のですか？」
「近く、家を買うとか、土地が買えそうだとかいう話です」
「そんなお金は、ありませんわ」
「しかしねえ。土地が、手に入りそうだという予定がないと、こんなに、住宅の本を、買わないんじゃないかと思いますがね。全く、当てがない時は、買っても、仕方がないから。私なんか、当てがないので、買いませんよ」
「彼に、そんな当てがあったとは、思えませんわ。彼は、肉親に恵まれていなかったし、私だって、同じなんです。お金持ちの親戚でもいれば、別ですけど、そんな親戚はありませんでしたわ」

かおりは、肩をすくめるようにして、いった。
それは、西本にも、よく、わかっている。和多が死んでも、駈けつけたのは、恋人のかおりだけだからである。
「本当に、なかったんですか？」
西本は、改めて、きいた。
「ええ。私は、聞いていませんわ」
と、かおりは、いった。

6

翌日、西本は、休暇を終えて、出勤した。
「松本では、殺人事件に、巻き込まれたそうだね」
と、上司の十津川警部が、声をかけた。
「松本署から、協力のお礼の電話があったよ」
「結局、何の役にも立ちませんでした」
「殺人の動機も、わからないのかね？」
「被害者の財布は盗まれていなかったので、物盗りの犯行とは、思えないんです。しかし、写真好きのトラック運転手を殺すというのは、どんな動機が、考えられるだろうかと思ってしまいます」
「被害者の名前は、和多だったね？」
「和多晴記です」
「君は、しばらく、その男の周辺を、調べてみたまえ」
「は？」
「松本署でも、犯行の動機は、東京にあるんじゃないかと、思っているんだ。それで、引き続いて、捜査の協力を求めている。君は、この事件の最初から知っているんだから、適任だよ」
「わかりました」
「何かわかったら、松本署の吉田刑事に連絡してくれといっている。向うで、君と話をしたといっていたよ」
「そうです。調べて、何かわかったら、吉田刑事に知らせます」
と、西本は、いった。
彼は、和多が、たびたび、写真を投稿していたK新聞

社に行ってみることにした。和多のことを、何か聞けるかも知れないと、思ったからである。
有楽町にあるK新聞に着くと、「読者の報道写真」の担当をやっている沼田というデスクに会った。
「和多さんなら、何回も、会っていますよ」
と、沼田は、いってから、眉をひそめて、
「殺されたというのは、ショックでしたねえ」
「彼は、写真を送ってくる常連だったわけですか？」
と、西本は、きいた。
「ええ。それも、優秀なね」
「最近も、送って来ていましたか？」
「最近は、なかったですね。それで、電話をかけてみたんですよ」
と、沼田は、いった。
西本は、眼を光らせて、
「それ、いつですか？」
「先月の五、六日頃だったと思いますね」
「その時、どんな話をしたんですか？」
「常連の写真が見られないので、寂しいと、いったんですよ」
「そうしたら、彼は、何といいました？」
「いい写真が撮れたので、すぐ、送りますよと、和多さんは、弾んだ声で、いいましたね」
「その写真は、送って来たんですか？」
「いや。ぜんぜん、送って来ないんですよ」
「それで？」
「もう一度、電話してみましたよ。和多さんの写真は、どきっとするのが多いので、どんなものか、見たかったですからね」
「彼は、どういいました？」
「それが、妙なんですよ。現像の段階で、失敗してしまって、折角の写真が、台無しになってしまったと、いうんです」
「しかし、和多さんは、もう、何年も、写真をやっているんでしょう？」
西本は、1Kのマンションの、押入れを利用した暗室

を、思い出した。器具は、全部、揃っていた。
「だから、おかしいんですよ」
と、沼田が、いう。
「じゃあ、和多さんは、嘘をついたんでしょうか？」
「と、思いますよ。ただ、どっちの嘘か、わかりません」
「と、いうと？」
「最初から、そんな写真はなかったのに、僕が、電話したので、つい、和多さんは、あるなんていってしまったのか、それとも、その写真は、実際にあったのに、何か事情があって、僕に見せたくないと思い、嘘をついたのか、どちらだろうかと、考えているんですがね」
「沼田さんは、どちらだと、思っているんですか？」
「電話の時、彼は、とても、弾んだ声でした。いい写真があるから、すぐ、送るといったんですよ。僕の勝手な思い込みかも知れないが、嘘をついていたとは、思えないんですよ」
「すると、いい写真というのは、あったと思うんですね？」
「ええ。あの声に、嘘はなかったと思いますからね。しかし、和多さんは、なぜ、気が変ったのかな。それが、わからない」
「どんな写真か、想像がつきますか？」
と、西本は、きいた。
「和多さんが、今まで送って来たものを考えれば、大体の想像は出来ますよ。彼は、きっと、車を走らせている間に、何かの事件にぶつかって、それを、写真に撮ったんだと思いますよ。今までの作品が、そうでしたからね。火事、自動車事故、或いは殺人現場か、とにかく、強いインパクトのある事件を、写真に撮ったんでしょうね」
「これから、一緒に、和多さんのマンションへ行って、その写真を、探してみませんか？　もし、あなたの想像が正しければ、あるかも知れませんからね」
西本がいうと、沼田は、肯いて、
「そうですね。僕も、どんな写真だったのか、見てみた

いんですよ。きっと、迫力のある写真だろうと、思いますね」

7

西本は、沼田を連れて、もう一度、和多晴記のマンションを訪ねた。

かおりは、まだいたが、眼をこすっている。彼の遺骨の前で、眠ってしまったのだと、いった。

西本は、彼女に、沼田を紹介し、写真のことを話した。

かおりは、聞き終ると、

「その写真が、見つかったら、彼を殺した犯人が誰か、わかるんですか？」

と、西本を見つめた。

「わかりませんが、或いは、わかるかも知れません」

「それは、どんな写真ですって」

「それも、わからないんです。多分、何かの事件を写したものだとは、思うんですがね。火事か、交通事故か、殺人か、とにかく、和多さんは、どきどきするような現場にぶつかって、いつものライカで、写真を撮ったんだと思いますよ」

「和多さんは、それらしい話をしていませんでしたか？」

と、西本が、かおりに、きいた。

「いつ頃でしょうか？」

「先月の五、六日頃には、写真が出来ていたと思うんですがね」

と、沼田が、いった。

かおりは、じっと考えていたが、「そういえば」と、呟くように、いった。

「丁度、その頃、いい写真が撮れたって、彼がいったことがありましたわ」

「どんな写真が、撮れたか、彼に、ききましたか？」

「いいえ。どうせ、新聞社に持って行って、読者の報道写真として、のると思ったからですわ。その時、知らな

い方が、楽しみが、大きいと思って」
「そのあと、現像に失敗して、折角の写真が駄目になったという話は、聞きましたか？」
「いいえ。ぜんぜん」
「先月の五、六日以後、彼に、何か変ったことは、ありませんでしたか？」
と、西本が、きいた。
「どんなことでしょうか？」
「急に、怒りっぽくなったとか、金廻りがよくなったとか、どんなことでも、いいんですよ」
「怒りっぽくもならなかったし、お金が急に入ったこともありませんわ。いつもの彼でしたわ」
「何の変化も、なかったんですか？」
「一つだけ、変化といえるかどうか、わかりませんけど――」
「いって下さい。どんなことでもいいんです」
「そこに、住宅の本や雑誌が、あるでしょう。雑誌の方は、前から買っていたんですけど、本の方は、考えてみると、先月から、急に買い集めていたような気がしますわ」
と、かおりが、いった。
西本は、改めて、本棚にある住宅の本を、眺めた。
実用的な本が多い。具体的なと、いってもいいだろう。
それに、プレハブ住宅のパンフレットも、各社のものが、揃えてあった。封筒に入ったままのもあった。和多宛の封筒になっているから、彼が、注文して、送って来たのだろう。
「和多さんは、家を建てる気でいたんですかね？」
沼田が、プレハブのパンフレットの一枚を手に取ってから、西本に、きいた。
「そんな感じがしますがね」
「お金がありませんわ」
と、かおりが、いった。
「本当になかったんですか？」
西本が、きいた。

「ええ。預金だって、百万以下で、家や土地を買いたくても、頭金さえなかったんです。だから、彼は、家を買いたいとは、思っていたでしょうけど、無理でしたわ」
「その百万以下の預金は、どこの銀行ですか？」
「この先のM銀行ですけど」
「ちょっと、行って来ます」
と、西本は、立ち上った。
交叉点の脇に、M銀行があった。西本は、警察手帳を見せ、和多の預金額を、聞いた。
西本が、刑事ということで、支店長が、わざわざ、出て来て説明してくれたが、和多の預金額は、十四万六千円だった。
他の名前の預金はないかと、きいてみたが、ないという。
西本は、当てが外れた気持で、和多のマンションに戻った。
今度は、M銀行以外に、預金をしているのではないかと思って、通帳を探したが、見つからなかった。
かおりは、一応、手伝ってくれたが、
「彼に、そんな余分なお金があったとは思えませんわ」
と、西本にいった。
「しかし、いい写真が撮れたといっていて、急に、それが駄目になったといったり、住宅についての本を買い集めたりしたというのを合せて考えると、一つの結論に、到達するんですよ」
と、西本は、かおりに、いってから、沼田に向って、
「交通事故の生々しい、写真といったものは、新聞社として、お金を出して、買うことがあるわけでしょう？」
「ええ。特ダネになるような写真なら、買いますよ」
「いくらぐらいですか？」
「それは、写真によりますがね。例えば、飛行機の墜落事故で、寸前の写真が、一枚しかなければ、その写真に、百万でも、二百万でも出しますよ。それに、最近は、写真週刊誌が増えましたからね。うちは関係ありませんが、もし、有名タレントのスキャンダル写真なら、いい値段がつくんじゃありませんか」

「和多さんが撮ったのが、有名タレントのスキャンダル写真だった可能性は、どうですか？」
「まず、ありませんね」
と、沼田は、いった。
「すると、やはり、交通事故とか、火災の写真ですかね？」
「と、思いますよ」
「すると、写真雑誌に、高く売るというふうには、いきませんね」
「買うところがあるとすれば、新聞か、週刊誌でしょうね」
「それなら、沼田さんのところに売った方が、一番高く売れますか？」
「と、思いますよ。これまでのことがあるから、私が、上の方に話をして、なるべく、高く買い取るように、交渉しますからね」
「だが、和多さんは、今度の写真に限って、K新聞には、持っていかなかった」
「しかし、僕も気になって、最近の他の新聞や、週刊誌を見ていましたがね。あっと驚くような写真は、どこにも、のりませんでしたよ」
沼田は、首をかしげた。
「それなら、問題の写真は、まだ、この部屋にあるのかも知れませんね。他に売ろうとして、うまくいかなかった可能性がある」
と、西本はいった。
三人は、手分けをして、問題の写真を探すことにした。
机の引出し、押し入れ、本棚の本のページの間、天井まで、探してみた。
1Kの狭い部屋である。
一時間もしたら、部屋の隅々まで、探しつくした。
が、見つからなかった。
「そんな写真は、なかったんじゃありませんの？」
と、かおりが、疲れた顔で、いった。
西本は、しばらく、部屋の中を見廻していたが、

「いや、あったんですよ。なければ、和多さんが、急に、家を建てることに熱心になったり、松本行の列車の中で、殺された理由が、わからなくなってきます。それに、バッグごと、カメラが、盗まれた理由の説明がつかない」

8

西本は、警視庁に戻ると、先月の五日、六日頃に、都内で起きた事件を、調べてみた。

殺人事件の他に、火災、交通事故などである。

和多は、先月の五日、六日か、或いは、その少し前に、小型トラックで走っていて、何か事件にぶつかり、それを、愛用のライカで、撮ったに違いないのである。

西本の推理では、最初、それを、K新聞の沼田に渡そうとした。

しかし、そのあとで、他に持って行けば、大金が稼げると、考えたのだ。和多には、かおりという恋人がいて、自分の家を持ち、結婚したいと考えていた。

そこで、問題の写真を金に代えて、それを頭金にして、自分たちの家を建てようとした。

火事の現場や、交通事故の写真が、普通なら、何百万円にも、売れる筈がない。千万単位となれば、なおさらである。

（ゆすり）

という言葉が、すぐ、西本の頭に浮んだ。

それなら、大金が手に入るかも知れない。

そして、ゆすられた相手が、逆に、和多を殺したということもである。

先月の三日の夜、三鷹で、火事が、あった。

新興住宅地の一角で、二階建の一棟が全焼し、焼け跡から、女性の焼死体が発見された。

片山今日子、二十八歳で、新宿の銀行に勤めるOLだった。

この家の持主は、定年を迎えたサラリーマンの夫婦で、二階を独立した部屋にし、片山今日子に、貸してい

たのである。
その夫婦が、郷里の熊本へ帰っている間の火事だった。
放火の疑いもある火事だったが、今だに、それらしい犯人は、見つかっていない事件である。
深夜の午前一時に起きた火災なので、放火にしても、目撃者が見つからなかった。もし、放火なら、焼死した片山今日子も、気絶させておいて放火した、殺人の疑いも残っているのである。
西本は、次に、和多の働いていた運送会社に行き、先月三日から四日にかけての勤務日誌を見せて貰った。
西本の予感は、当っていた。
和多は、三日の午後十時から、四日の朝六時にかけて、深夜勤務についていたこと、四日の午前一時頃には、現場付近を走った可能性があることが、わかった。
もし、この火事が、放火だとしたら、和多が、車の中から、ライカで狙って、撮ったとき、そこに、犯人が、写っていたのではないのか。
最初は、それに気付かずに、K新聞に持って行こうとした。が、放火犯人が、写っているのに気付いて、写真を、ゆすりに、使おうとしたのではないのか。
西本は、その考えを、十津川警部に、話した。
「それは、面白いね」
と、十津川は、いった。
「松本署の吉田刑事にも、さっき電話して話したんですが、彼も、関心を示してくれました」
「問題が、一つあるね」
「何でしょうか？」
「和多晴記が、放火現場で写真を撮り、その中に、偶々、犯人が写っていたことになる。その人間を、脅迫したことになるだろう？」
「そうです」
「その人間の名前や、住所を、どうやって、和多は、知ったのかね？　最初から、知っている人間なら別だが」
「そうですね。和多は、そのあと、仕事を休んでいませ

んから、自分で、調べたとは思えません」
「誰かに、調べて貰ったのかな？」
「と、思いますが」
と、西本は、いった。
翌日、その答らしいものが、見つかった。
浜野健一という私立探偵が、石神井公園の自宅付近で、何者かに殺されるという事件が、起きた。
夜十一時過ぎで、飲んで、酔っ払って帰宅途中でのことだった。
十津川が、この事件を担当したのだが、捜査を始めてすぐ、被害者の浜野が、最近、片山今日子のことを調べていたこと、また、その調査依頼をしたのが、和多晴記だと、わかった。
十津川は、すぐ、西本を、捜査のグループに入れることにした。急行「アルプス3号」の中で起きた殺人事件と、今度の私立探偵殺しが、結びついたからである。
「ひょっとすると、三鷹の事件とも、結びついてくるかも知れない。あれが、放火なら、焼死したと思われている片山今日子も、殺されたことになってくる」
と、十津川は、西本に、いった。
「和多は、自分の写真に写っている人間が、放火犯だと考えたんだな」
と、ベテランの亀井刑事が、いった。
「死んだ片山今日子と関係のあった人間と睨んで、私立探偵の浜野に、彼女の周辺を洗ってくれるように、頼んだんだろうね。そして、和多の写真に写っている人物の名前が、わかったんだ。そして、ゆすったんだな」
「浜野の作った調査報告書が見つかれば、犯人の目星がついて来ますね」
「ところが、新宿西口の彼の事務所が、荒らされて、報告書は、失くなっているんだよ」
と、十津川が、いった。
「浜野を殺した犯人が、盗んでいったということですか？」
西本が、きいた。
「他には、考えられないよ。しかし、犯人は、バカなこ

とを、やったものだ」
と、十津川は、いった。
「なぜですか？」
「たった一人の私立探偵が、片山今日子の周辺から見つけ出せた人間を、われわれが、見つけ出せない筈がないじゃないか。もちろん、和多の撮った写真はないから、この人間と、限定は出来ないが、何人いても、一人ずつ当っていけば、自然に、犯人は、浮び上ってくるよ。この捜査は、カメさんと、君にやって貰うよ」
と、十津川は、いった。

9

亀井と西本は、片山今日子の働いていた新宿のS銀行新宿支店に行き、支店長に、会った。
「前にも、私立探偵の人が、うちの行員に、片山君のことを、根掘り、葉掘り、聞いていきましたよ」
と、支店長は、二人に、いった。
「片山さんのどんなことを、その私立探偵は、聞いていったんですか？」
亀井が、きいた。
「男関係です」
と、支店長は、いう。
（和多の写真に写っていた人間は、男だったんだな）
と、西本は、思った。
「片山さんに、恋人は、いたんですか？」
亀井が、きいた。
「私には、わかりませんが、女性の同僚の中には、片山君が、男と歩いているのを見たという者もいますよ」
「その人に、会いたいですね」
と、西本が、いった。
二十五、六歳の行員が、呼ばれた。
彼女も、私立探偵が来て、片山今日子の異性関係について、きかれたと、いった。
念のために、西本が、浜野の写真を見せると、簡単に、この人だったと、肯いた。

「それで、片山さんの恋人を、あなたは、見たそうですね？」
と、亀井が、きいた。
「ええ。偶然、休みの日に、鎌倉で会ったんです。声をかけようとしたら、男の人が、一緒でしたわ」
「どんな男でした？」
「若くて、背が高くて、ハンサムでしたわ」
「名前なんかは、わかりませんか？」
「ええ。そのあとで、彼女に会ったとき、あの人、誰なのって、きいてみたんです」
「そうしたら？」
「名前は、教えてくれませんでしたけど、彼女は、得意そうに、彼は、一流商社に勤めているエリート社員で、私より、一つ年下だって、いってました」
「一流商社ね」
「それで、どこの商社って、一つ一つ、商社の名前を、いってみたんですわ。私が、何番目かに、日南商事っていったら、片山さんは、その会社だって――」
（日南商事？）
聞いている西本の顔に、一瞬、狼狽の色が走った。
友人の崎田の顔を思い出したからだった。
年齢も、二十七歳なら一致している。
「モンタージュを作りたいから、協力してくれませんか」
と、亀井が、その女子行員に、いった。
銀行が終ってから、彼女に、捜査本部に来て貰って、モンタージュ作りが行われた。
出来れば、崎田であって欲しくないと、西本は、思った。
日南商事は、大会社である。二十七歳の男子社員といっても、何十人と、いるに違いない。
そう考えていたのだが、出来あがったモンタージュは、まぎれもなく崎田の顔だった。
何も知らない亀井が、西本に向って、
「明日、これを持って、日南商事に行ってみようじゃないか」

「その必要は、ありません」
と、西本は、いった。
亀井は、びっくりした顔になって、
「君は、この男を知っているのか？」
「名前は、崎田です。私と同じ大学を出て、日南商事に入社した男です」
「大学のね。自宅は、知っているかね？」
「知っています」
「じゃあ、すぐ、会いに行こうじゃないか」
「しかし、彼は、犯人じゃありませんよ」
「犯人じゃないって、どっちのだ？　片山今日子殺しの方かね？　それとも、和多晴記殺しの方かね？」
「その二つの事件は、同一犯人の犯行だと思うんです。私立探偵の浜野を殺したのもです」
「その点は、同感だよ」
「実は、私が、松本へ行った時、崎田は同じ列車、急行『アルプス3号』に乗っていたんです」
西本は、その間の事情を、亀井に説明した。
岡谷で、列車が分れて、崎田の乗った四両は、飯田行の急行「こまがね3号」として、先に出発したこともである。
「従って、崎田に、和多晴記は、殺せなかった筈なんです。崎田が、和多を殺してなければ、他の二件の犯人でもないと思うのですが」
「崎田は、本当に、和多を殺せなかったのかな？」
「時間的に無理です。列車は、岡谷から分れて、彼の乗った四両は、辰野から、飯田線に入ってしまいますから」
「しかし、先に出発したんだろう？」
「そうです。私や、和多晴記の乗っている七両より、三分早く出発しています」
「それなら、次の停車駅で降りて、引き返して、君や和多晴記の乗っている車両に、乗り込むことは、出来たんじゃないかね？」
「それは、無理です。崎田の乗った『こまがね3号』の次の停車駅は辰野で、到着は、一三時四五分です。一

方、私や和多の乗った『アルプス3号』は、一三時四七分に、次の塩尻に着きます。二分しかありません。辰野と塩尻の間は、十八キロはありますから、とうてい無理です」

「それなら、新宿から岡谷までの間で、殺したのかも知れない」

「それも、あり得ません。岡谷まで、崎田は、ずっと、私の隣りに腰を下していて、動かなかったんです」

「トイレにも、行かなかった？」

「ええ。そして、岡谷に着く少し前に、一緒に、前方の車両の方へ歩いて行ったんです。岡谷で、切り離されてしまいますからね。8号車から、11号車までが、飯田行になるからです。私は、7号車の端まで行き、彼が、8号車の方へ入って行くのを見送ったんです。だから、岡谷へ着くまでは、殺すことは、不可能ですよ」

「じゃあ、こういうのは、どうだ。崎田は、君のいう通り、8号車から11号車の『こまがね3号』の方へ乗り移った。そして、岡谷に着いた。だが、崎田は、そのまま、乗って行かずに、岡谷で降りたんだ。そして、切り離しが行われている間に、ホームを走って、松本行の七両の方に、乗り込んだ。どうだね？　これなら、崎田は、和多が殺せるだろう？」

「それも、無理ですね」

「なぜだ？」

「崎田の乗った『こまがね3号』が、岡谷を発車したのを見送ってから、私は、自分の席のある1号車、つまり、一番端の車両まで、歩いて戻ったんです。全部の車両を見たことになりますが、崎田は、いませんでした」

「それは、本当だろうね？」

「相手が、友人だからといって、かばったりはしません」

「それで、崎田は、どこへ行ったのかね？」

「飯田線の天竜峡です」

「本当に、天竜峡へ行ったのかな？」

「彼の泊った旅館へ電話して、確認しましたから、間違いありません」

と、西本は、いった。
「君が、それほどいうのなら、信用するが、しかし、今のところ、崎田以外に、犯人らしき人物が、浮んで来ないからね」
「私が、今夜、崎田に会って来ます。少しでも、怪しいところがあれば、カメさんに、報告します」
と、西本は、いった。

10

午後十時近くに、西本は、崎田のマンションを訪ねた。
十一階建のマンションの七階にあった。2LDKのゆったりした間取りだった。
「いい部屋だね」
西本は、羨望の思いを込めて、崎田に、いった。
「無理して、買ったんだよ」
と、崎田はいい、貰いものだというレミーマルタンで、水割りを作ってくれた。
「この時間なら、飲んでもいいんだろう？」
「一杯だけ、貰うよ」
と、西本は、いった。
崎田は、上機嫌のように見えた。
「天竜峡へ行ったおかげで、小説の書き出しが出来て、目下、いい具合に、筆がすすんでいるんだ」
「そりゃあ、よかった」
「出来たら、N誌の懸賞小説に応募するつもりでいる。もし、当選したら会社を辞めるかどうか、改めて、考えることにした。今、辞めるのは、よすことにしたよ。君にも、心配をかけたがね」
「そうか」
と、いってから、西本は、水割りを口に運んだ。これから、あまり愉快ではない話をしなければならない。
「君は、片山今日子という女性を知っているだろう？銀行で働くOLで、三鷹に住んでいた女性だ」
西本がきくと、崎田は、探ぐるような眼で、見返して

から、
「調べたんだろう？」
「ああ、ある理由があって、調べた」
「それなら、隠しても仕方がないな。つき合いは、あったよ。恋人だったといってもいい。彼女が、あんな死に方をしていなければ、今でも、つき合っていたと思うよ」
「あの火事が、放火だという説があるのを、知っているかい？」
「ああ、知っている」
「君は、どう思うんだ？」
西本が、きくと、崎田は、煙草に火をつけてから、
「わからないねえ」
「ところで、君と一緒に、『アルプス3号』に乗った日のことだが、和多という男が、車内で殺されたのは、覚えているだろう？」
「ああ、覚えているよ。しかし、僕には、関係のないことだ」
「かも知れん」
「かも知れんというのは、どういうことだ？」
「まあ、聞けよ。この和多という男だが、調べていくと、面白いことが、わかった。君にも、関係のあることなんだよ。和多は、なんと、片山今日子のことを、浜野という私立探偵に、調べさせていたんだ」
「しかし、なぜ、そんなことをしていたのかね？」
「そこまでは、わからん」
と、西本は、わざと、いった。
「わからないのか」
「だが、奇妙なことに、片山今日子のことを、和多に頼まれて調査していた私立探偵の浜野は、殺されたし、頼んだ和多も、殺されてしまった。君だって、奇妙だと、思うだろう？」
「まあね。しかし、だから、どうなのかということは、僕には、わからないがね」
「君は、本当に、和多という男を知らないのか？」
「列車の中で、殺されていた男のことか？」

「そうだ。運送会社に勤め、トラックを運転している男だよ」
「会ったことはないね。嘘だと思うんなら、調べてくれてもいいよ。全く、知らないんだ」
「君は、カメラを、持っているか？」
西本がきくと、崎田は、笑って、
「カメラぐらい、持っているよ」
「ライカは？」
「ライカは、欲しいが、僕のはバカチョンカメラさ」
「天竜峡の写真も、撮って来たんだろう？」
「もちろんさ。小説を書くときに、必要だからね。見せようか？」
「見たいね」
と、西本は、いった。
崎田は、奥から、アルバムを持って来た。
西本が、受け取って、ページを繰っていく。全て、雪の天竜峡の写真だった。
崎田が泊った旅館の写真もあった。旅館の女将さんと一緒に写っている写真もある。
「これ、借りてって、いいかね？」
と、西本は、きいた。
「僕が、本当に、天竜峡へ行ったかどうかということかい？」
崎田が、ニヤッと笑う。
「ああ、そうだ。ネガもあったら、見てみたいんだが」
「いいとも」
崎田は笑顔でいい、ネガを、持って来た。
（自信満々だな）
と、西本は、思った。
そのことが、崎田の無実を証明しているようにも思えたが、その一方で、アリバイを作っておいて、殺人を犯したのではないかという疑いを、西本に持たせたのも、事実だった。
西本は、アルバムと、そのネガを持って、捜査本部に、帰った。
亀井に、崎田の話を伝え、写真を、見せた。

「この旅館に問い合せても、崎田は、ちゃんと、泊ったという返事が、戻って来るんだろうね？」
亀井は、写真を見ながら、西本に、きいた。
「問題の日に、ちゃんと、泊っています。しかし、電話で問い合せたところ、崎田が、旅館に入ったのは、午後五時半頃だったということです」
「崎田が、『こまがね3号』に乗って、天竜峡に向ったとすると、何時に着くのかね？」
「飯田で、乗りかえですが、それでも、一六時一一分に、天竜峡駅に着くことになっています」
「すると、そのまま、すぐ、旅館には行かなかったということか」
「そうですね。改めて、崎田にきいたら、景色が余りにも素晴らしいので、見て廻ってから、旅館に入ったんだと、いっていました」
「そういうだろうね」
「嘘をついているという証拠はありません」
と、西本は、いった。
「君は、君の友人が、無実だと、信じているのかね？」
「今のところはです」
「しかし、引っかかるねえ。特に、君を、急行『アルプス』に乗るように、すすめたことがね」
亀井は、考えながら、いう。
「しかし、崎田は、私に、相談したいことがあるから、一緒に乗ってくれないかと、いったんです」
西本は、自然と、崎田のために、弁護する姿勢になっていた。
「それで、列車の中で、何を、君に相談したのかね？」
「宮仕えが嫌になったので、会社を辞めたいと、いっていました。彼は、もともと、文学青年で、小説を書きたかったそうです」
「そんなことを、なぜ、君に、相談したんだろう？　大学時代、親友だったのかね？」
「特別に親友だったわけじゃありません。私は、もっぱら、運動に精を出していて、彼は、文学の方でしたから」

「そんな君に、なぜ、相談したのかね？」
「わかりません。たまたま、私と会ったからじゃありませんか」
「もし、君が、警察をやめたくなったら、たまたま会った昔の友人に、相談するかね？」
「いえ。自分で決めますね」
「そうだろう。崎田の言葉は、どうも不自然だよ」
「すると、カメさんは、崎田が、私を、アリバイ作りに利用したというんですか？」
「その可能性もあるだろう」
「それは、ありますが――」
西本の顔が、暗くなった。
考えたくはないが、亀井の言葉にも、一理あるのだ。
確かに、崎田の話には、不自然なところがある。
人生の大事なら、列車の中などでなく、もっと、落着いた、静かな場所で、相談すべきだろう。逆に、簡単な相談ごとだったのなら、なにも、西本の乗る列車を、限定することもない筈である。電話で、話してもいいのだ。それに、崎田には、和多を殺す動機もある。
（崎田が、犯人だろうか？）
もし、そうなら、西本にとって、二重に腹立たしい。二重に残念なことだった。
大学時代の友人が、犯人だということの他に、その友人が、自分を、アリバイ作りに利用したことに、腹が立ち、なさけなくなるのだ。
「西本君」
と、急に、十津川に、呼ばれた。
「カメさんと一緒に、もう一度、松本へ行って来たらどうだね？」
「もう一度ですか？」
「そうだよ。君は、今、友人が犯人かどうか、迷っているんだろう？」
「そうです」
「それなら、とことん調べて、納得して来た方がいい。君が、崎田という友人と乗った急行『アルプス3号』に、乗って、行って来たまえ」

と、十津川は、いった。

11

翌日、西本は亀井と二人、新宿駅から急行「アルプス3号」に、乗った。

この前と同じように、1号車の切符を買って、二人は、並んで腰を下した。

亀井は、時刻表を広げて、熱心に見ていて、西本が話しかけても、生返事しか、戻って来なかった。

今日は、ウィークデイなので、車内は、この間より、空いていた。

甲府に近づくと、同じように、窓の外は、白一色の雪景色になった。粉雪も、舞い始めた。

亀井は、ずっと、時刻表を見ていたが、急に、顔を上げて、

「今日は、私が、崎田の代りをやるよ」

「というと、岡谷で、『こまがね3号』に乗るわけですか？」

「ああ。そうすれば、何かわかるだろう」

「そうなるといいですが」

「わかるさ」

と、亀井は、いった。

岡谷が近づくと、亀井が、先に、座席から立ち上った。

「一緒に、行こうじゃないか。事件の日と同じように」

と、亀井が、いう。

二人は、先頭車の方向に、通路を歩いて行った。

「君も、あの時と同じように、行動するんだ」

と、歩きながら、亀井が、いった。

7号車のところで、西本は、立ち止まった。

亀井は、軽く手をあげてから、8号車の方に入って行き、すぐ、見えなくなった。

岡谷に着く。

すぐ、切り離しの作業が始まった。この間と、全く同じである。

三分後には、先頭の四両が切り離され、急行「こまがね3号」として、先に、岡谷駅を出て行った。
西本の乗っている「アルプス3号」の七両も、岡谷駅を出発した。
西本は、7号車から、自分の席のある1号車に戻った。が、亀井の言葉があったので、一両ずつ、ゆっくり、見て廻った。
亀井は、崎田が、岡谷でおりて、ホームを走り、1号車から7号車までの間に、乗って来ていたのではないかと、いったからである。
しかし、亀井の姿は、どこにもなかった。
ほっとして、西本は、1号車の自分の席に戻って、腰を下した。
雪は、少し激しくなっている。この分だと、松本の街は、かなりの積雪になっているだろう。
列車は、塩尻に停車したあと、終点の松本に着いた。
西本が、席から腰を上げた時、車掌が、近づいて来た。
「西本さんですか？」
と、車掌が、きく。
「そうですが」
「亀井さんからの伝言です。6号車のトイレを見るように、ということです」
「それだけ？」
「そうです」
車掌は、さっさと、他の車両へ行ってしまった。
西本は、通路を、6号車に向って、駈け出した。
6号車に着いて、トイレをのぞいてみた。
最初は、何も眼につかなかったが、よく見ると、壁の上の方に、小さな紙が、セロテープで、貼りつけてあるのに気がついた。
はがして、手に取ってみると、亀井の字で、

〈西本君。彼は、殺せたんだよ〉

と、一行、書いてあった。

12

（カメさんは、どこにいるんだろう？）

西本は、すでに、乗客の降りてしまった車内を眺め、それから、ホームに眼をやった。

その眼に、亀井の姿が、入った。

西本は、あわてて、ホームに飛びおりた。

亀井は、ニヤニヤ笑いながら、

「伝言は、見てくれたようだな」

「見ましたよ。しかし、カメさんは、なぜ、ここにいるんですか？　車で追いかけて来たんですか？」

と、西本は、首をかしげて、きいた。

「この雪で、道路は、車が立ち往生しているよ」

「しかし、岡谷で、ホームに降りて、こちらの『アルプス3号』に、乗りかえたわけじゃないでしょう？　7号車から1号車に戻る時、カメさんの言葉が、気になったから、よく見たんですが、乗っていませんでしたよ」

「当然さ。乗っていなかったもの」

「じゃ、いつ、6号車のトイレに、あの紙を貼りつけたんですか？」

「それを説明しよう。ホームにいたんじゃ寒いな」

亀井は、西本を誘って、駅の外に出ると、近くにある食堂に入った。

温かいラーメンを注文しておいてから、亀井は、時刻表を取り出した。

「岡谷に近づいた時、私は、君と一緒に席を立って、8号車の方に移った。だが、飯田までは、乗っていかなかった。一番先頭の11号車まで歩いて行って、君の視界から見えなくなったところまで行き、列車が、岡谷に着くとすぐ、ホームに降りてしまったんだ」

「しかし、私のいる方に、乗っては来なかったんでしょう？」

「ああ。切り離しの作業が行われている時、私は、ホームの売店のかげに、身をかくしていた。君から、見えないようにね。そして、『こまがね3号』と、君の乗った

『アルプス3号』が、出発して行くのを、見守っていたのさ」
「じゃあ、岡谷のホームに、取り残されたわけですか？」
西本がいうと、亀井は、笑って、
「取り残されたというのは、あまり、いい表現じゃないね。私は、次の列車を、待ったんだ。時刻表を見てみたまえ。君の乗った『アルプス3号』は、一三時三七分に、岡谷を出発した。その四分後の一三時四一分に、松本行の特急『あずさ9号』が、到着する。私は、これに乗ったんだ。『アルプス3号』は、次の塩尻に、一三時四七分に着くが、発車は、一三時五四分だよ。一方、私の乗った『あずさ9号』は、塩尻に、一三時五一分に着くが、『アルプス3号』が、五四分まで停車しているので、私は、乗り込めたんだよ。そして、6号車のトイレに、あの紙片を貼りつけたんだ。セロテープは、車掌に貰ったんだ」
「とすると――」
西本は、急に、気が重くなった。
「そうだよ。君には気の毒だが、崎田は、和多を、殺すことが出来たんだ。今日、私がやった方法でね。崎田は、和多に、ゆすられていたんだと思う。三鷹の殺人放火の現場で、写真を撮られてだよ」
「――――」
「そこで、崎田は、一つのトリックを考えた。松本行の『アルプス3号』の中で、殺すトリックだ。ただ、そのためには、彼のアリバイ作りに協力してくれる証人が必要だ。そんな時、たまたま、君に会い、君が、松本へ行くことを知った。刑事なら、これ以上の証人はない」
「そうでしょうね」
西本は、小さな吐息をついた。
「崎田は、和多に、こういったんだと思う。都内で、金のやりとりは、したくない。だから、列車の中で、やろうとね。『アルプス3号』に乗り、塩尻を過ぎたら、6号車のトイレの近くに来て、待っていてくれ。自分は、現金を持って行くから、そこで、問題の写真と引きかえ

ようとだ」

「――――」

「崎田は、君と、『アルプス3号』に、乗った。そのあとは、今日、私がとったと同じ行動を、崎田も、とったんだ。岡谷でおり、次の『あずさ9号』で、塩尻で、追いついた。6号車のトイレの前で待っていた和多を殺して、トイレに押し込んだ。塩尻から松本まで、わずか、十一分だ、すぐ着く。松本に着くと、崎田は、和多のショルダーバッグを持って、素早くおりて、姿を消した。崎田は、代りに、自分のショルダーバッグを置いておいたんだ」

「天竜峡の旅館に着いたのが、おくれたのは、当然ですね」

「ちょっと、警部に、電話してくる」

亀井は、箸を置いて、立ち上ると、店の電話を借りて、東京の十津川警部に、連絡を取った。

五、六分、話していたろうか。

亀井は、西本のところへ戻って来ると、楽しそうに、

「東京でも、一つ、発見があったようだよ」

「何ですか？」

と、西本が、きいた。

「君が、崎田から借りて来たアルバムのことだよ。崎田が写した天竜峡の写真だ」

「どこか、不自然なところが、発見されたんですか？」

「いや、そうじゃない。警部があのネガを、写真の専門家に見せたらしいんだ」

「それで？」

「何が写してあるかじゃなくて、専門家にいわせると、あの写真は、優秀なレンズを使って撮ったものだというのさ。だから、大きく引き伸しても、周辺が、ぼけないんだということだよ。専門用語は、私にはわからないが、いわゆるバカチョンカメラで撮ったものは、大きく引き伸すと、絵の周辺が、ぼけてしまうそうだよ」

「と、いうことは――」

「崎田は、バカチョンカメラで、あの写真を撮ったといったんだろう？」

「そうです」
「だが、どうも違うんだな。ところで、殺された和多は、ライカをショルダーバッグに入れて、出かけている。そのバッグには、問題の写真とネガも入っていたと思うね。崎田は、和多を殺したあと、ショルダーバッグをすりかえた。当然、ライカも、崎田の手に入ったことになる」
「そのライカで、天竜峡の写真を撮ったんですね？」
「そうなんだな。ライカは、捨ててしまって、どこかで、安物のカメラを買って、撮ればよかったんだが、やはり、そこが、人間の弱さかね。高価なライカを捨て切れずに、それで、天竜峡の写真を撮ったんだな。素人が見たら、どんなカメラとレンズを使ったかわからないが、専門家が見れば、わかってしまうものらしい」
「じゃあ、あの写真も、証拠になりますね？」
「なるね」
「じゃあ、崎田に対する逮捕状は、出ますね？」
「私たちが、東京に戻る頃までには、出ている筈だ。警部は、君が、崎田の逮捕に同行するかどうか、きいていたよ。友人だから、気がすすまないのなら、考えると、いっていた」
「私は、行きますよ！」
西本は、怒鳴るような声を出した。
大声のあとで、彼は、急に、悲しそうな顔になった。

臨時特急を追え

1

国鉄総裁秘書の北野は、休みの日に、テレビを見ていて、急に、不快な表情になった。

今年の運勢というタイトルの一時間番組で、男女三人の占師が、政治、社会、スポーツなどの部門の今年の吉凶を占うというものだった。

三人とも、本なども出している著名な占師である。最初の中、北野は、楽しんで見ていた。プロ野球は、セ、パどこが優勝するか、大相撲で、誰が次の横綱になるかといった占いは、結構、楽しかった。

社会問題になって、今年は、どんな事件が、起きるだろうかという問題になった。

グリコ事件のようなものが、また、起きるだろうという言葉もあった。北野も、この情報化社会では、ああした形の犯罪が、また起きても、おかしくはないと思っていたから、肯きながら、見ていた。

永井不二子という女性占師の番になった。

自ら、霊感の強さを主張する四十代の女性である。

過去の経歴が、はっきりしない女性で、自分では、昔の華族の出身と、いっている。嘘かも知れないが、不二子の霊感は、良く当るという評判だった。

アメリカのスペースシャトルの事故も予言していたというし、フィリッピンの政権交代も適中させたといわれている。本当に適中させたのかどうか、北野は、調べたこともなかったが、彼女が出した何冊かの本は、全て、ベストセラーになり、政治家や、財界人の中にも、彼女の信者は、多いと、聞いていた。

その永井不二子が、司会役のアナウンサーの質問に答えて、こういったのである。

「他の二人の方が、いろいろと、予言されましたけど、どれも、大まかな予言ですわね。年内に、地震があるだろうとか、世界のどこかで、航空機事故があるとかね。何月何日に、どの程度の地震や、航空機事故があるのか不明ですわ。私までが、同じような予言をしても、視聴

者の方は、面白くないと思いますのよ。それで、私が、もっと細かな予言を致しますわ」
「それは、面白いですね。どんな予言ですか？」
「五月上旬に、恐しいことですけど、列車事故が起きますわ」
「本当ですか？　五月上旬というと、あと一ヵ月もありませんが」
半信半疑の顔で、司会役のアナウンサーがきいた。
「わかっていますわ。私も、正直いって、こんな予言はしたくありませんよ。でも、見えるんです」
不二子は、うすく眼を閉じて、やや、甲高い声を出した。
「見えるって、何がですか？」
「血まみれになった沢山の人たちの姿がですよ。列車が、脱線して、負傷した人たちが、呻き声をあげて苦しんでいるわ。それが、私の眼には、はっきり見えるんですよ」
「場所も、わかりますか？」
「ぼんやりとですけどね。西の方じゃありませんわ。東京から見て、北の方ね」
「五月上旬といえば、四月二十九日から始まる連休の間に、事故が起きるということですか？」
「かも知れませんね。まだ、私にも、正確な日時は、わかりませんの」
「しかし、永井先生。鉄道の大惨事というと、これは、容易ならぬことですよ」
「ええ。わかっていますわ。だから、私は、怖いことですけど、申しあげたんですよ。何とかして、この惨事が、防げないものかと思いましてね」
「間違いなく、起きるんですか？　私は、まだ半信半疑なんですが」
「私は、スペースシャトルの事故を、予言しましたわ。フィリッピンの政変もね。ちゃんと、その通りになったじゃありません？」
「それは、そうなんですが――」
「私が、今、申し上げたことは、必ず、その通りになり

ますわ」
「もし、正確な日時がわかったら、もう一度、このテレビに出演して頂けますか？」
「ええ。もちろん、出たいと思いますよ。そして、皆さんに、注意したいと思っていますわ」
と、不二子は、いった。
北野は、聞いていて、自然に、眉をひそめていた。
国鉄は、今、難しい時期にある。少しでも、利用者を増やしたい。そんな時に、永井不二子の発言は、まるで、営業妨害に等しかったからである。

2

翌日、出勤すると、この番組のことが、話題になった。
総裁は、運輸大臣に呼ばれ、出かけてしまったが、局長連中の中には、永井不二子と、昨日の番組を放映した中央テレビに、抗議すべきだという者もいた。
「前に、富士山が今年中に爆発するといった男がいたじゃないか。そのために、観光客が来なくなったといって、山麓の市町村が、抗議したことがある。永井不二子の発言は、それと同じだよ。いや、もっと悪質じゃないかね」
「しかし、まだ、実害が出ていないからね。抗議するとしても、その前に、永井不二子に会って、あの発言の真意をただした方がよくはないかね。中央テレビの意見もだ」
と、いう局長もいた。
結局、北野が、その役目を仰せつかった。
北野は、まず、中央テレビに行き、あの番組のプロデューサーに会った。
田口という四十歳前後の若いプロデューサーだった。
「実は、あの発言には、僕も驚いているんですよ」
と、田口は、外人みたいに、大きく、肩をすくめて見せた。
「それは、どういうことなんですか？」

「あの放送ですがね。だいたいのシナリオが出来ていて、どの先生が、どんな予言をするか、決っていたんですよ。永井先生には、社会問題として、今年は、女性にとって、どんな年になるかを、喋って貰うことになってたんですがねえ。突然、あんな話をしたんで、われわれも、びっくりしたんです」
「あれは、録画でしたね？」
「そうです」
「もう一度、撮り直すことは、考えなかったんですか？」
「考えましたがね。永井先生は、絶対に、五月上旬に、鉄道事故がある。それを警告したいんだといわれたんですよ。それに、このまま放送した方が、反響が大きいと判断したわけです」
「プロデューサーのあなたは、本当に、予言どおりに、事故が起きると、思っているんですか？」
北野が、きくと、田口は、当惑した顔になって、
「正直にいって、わかりませんね。しかし、永井先生の占いは、よく当るので、評判なんです」
「しかし、半月先の事件を、本当に、予言できると、思っているんですか？」
「それは、考え方でしょう。普通に考えれば、人間に未来は予見できない。私なんか、明日のことだって、わかりませんよ。しかし、世の中には、霊感の強い人もいると思うんです。彼女は、特に、強いんじゃありませんか。無下に、それを否定することもないと思うんですがね」
「しかし、明らかに営業妨害ですよ。国鉄にとって、連休は、稼ぎ時ですからね。あの番組を見た人たちが、怖がって、国鉄に乗らなくなったら、大変な減収になってしまいますよ」
「そういわれれば、そうかも知れませんが、表現の自由の問題もありますしね。それに、永井先生は、絶対に、予言通りに事件が起きると主張してますしね。嘘をついていないんだから、そのまま、放送して欲しいと、いわれるもんですからね」

「彼女は、また、テレビに出演するんですか？」
「われわれも、こうした放送をやった手前もありますからね。もし、事故の起きる日時が、はっきりしたら、もう一度、出演して貰うことにしています」
「もし、何も起きなかったら、どうする積りですか？」
北野が、相手を見すえるようにして、きいた。北野にも、国鉄を背負って来たのだという自負と、責任がある。
田口は、軽い狼狽の色を見せた。が、すぐ立ち直って、
「われわれは、ただ、事実を放送しているだけですからね。それについて、いちいち、責任問題をいわれても、困りますな」
「少し無責任ですね」
「テレビで、トーク番組をやった。その中の一人の発言について、テレビ局が、いちいち責任を問われてしまうなら、何も出来なくなりますよ」
と、田口は、開き直りのようないい方をしてから、
「われわれよりむしろ、当人の永井先生に会われて、本当に事故が起きるかどうか、お聞きになったらどうですか」
と、いった。

3

北野は、三鷹に住む永井不二子の家を訪ねることになった。
国鉄三鷹駅を降りたところの煙草屋で、マイルドセブンを買ってからきくと、永井不二子の家は、有名らしく、
「この商店街を抜けると、すぐわかりますよ。変な家だから」
と、教えてくれた。
変な家というのは、本当だった。積木細工を思わせる家の屋根に、なぜか、大きな丸い鏡がのっている。直径一メートルぐらいの鏡が、西陽を反射して、きらきら

光っていた。
テレビには、純白なドレスに、王冠をかぶって出演していたが、自宅では、和服であった。
能衣裳のような派手な模様の着物である。若いお手伝いが、北野を、奥の座敷に案内してくれた。
テレビ局の田口プロデューサーも、先生と呼んでいたが、自宅でも、お手伝いに、先生と呼ばせていた。
不二子は、北野の差し出した名刺を見ても、別に、驚いた表情も見せず、
「ああ、鉄道の方」
と、いっただけである。
「先日のテレビの発言は、どういうことなんですか？」
北野は、自然に、切り口上になっていた。
「テレビ？　ああ、国鉄で事故が起きるということ？」
「そうです。あんな無責任なことを、公器であるテレビで話すというのは、われわれ、国鉄にとっては、営業妨害ですよ。あなたが、反省してあの発言を、訂正して、謝罪して頂けないと、告訴することになるかも知れませんよ」
「私を脅かすの？」
不二子は、眼鏡の奥から、じろりと、北野を、睨み返した。
「告訴するというのは、嘘じゃありませんよ」
と、北野は、いった。
「なぜ、私が、告訴されなきゃならないのかしら？　本当のことをいったのに」
「なぜ、本当のことなんですか？　まだ、起きてもいないんですよ」
「でも、本当に、事故は、起きるのよ」
「それが、見えるというんですか？」
「そうだわ。脱線して、転覆している列車と、血まみれになって、呻き声をあげている人たちが見えるのよ。私はね、前にも、アメリカのスペースシャトルが、発射してすぐ、大爆発するのが見えたわ。いろんな人に、いったんだけど、誰も、信用しなかったわ。それでも、私は、黙っていられなかったのよ。そうでしょう？　私に

は、スペースシャトルが爆発するのが、わかっているんですものね。黙っていられないわ。それで、お友だちに、相談したのよ。アメリカの大統領に、手紙を書きたいって。でも、お友だちは、反対したわ。そんな手紙を出したって、向うは信用しない。それどころか、読みもしないだろうってね。それで、出すのを止めたの。でも、今になったら、あの時、大統領宛に、手紙を出しておけばよかったと思うわ。それと同じなのよ」

「どう同じなんですか？」

「あの時、黙っていようかとも思ったわ。当り障りのないことをいって、お茶を濁したって良かったのよ。今年は、一層離婚が増えるだろうとか、女性の外交官がアメリカ大使になるとかね。でも、あの光景も、見えたのよ。どうしても、警告しないわけには、いかなかったわ。あと半月足らずの間に、大惨事が起こるとわかっていて、黙っているわけにはいかなかったのよ」

「ちょっと、待ってくれませんか」

と、北野は能弁な不二子の言葉を、さえぎった。

「何を？」

「そんな大事故が起こるとは思えませんね。われわれは、絶対に、どんな小さな事故も起こすまいと、日夜、努力しているんです。それでも、五月上旬に、事故が起きるというんですか？」

「ええ。間違いないわ」

「もし、起きなかったら、どうします？　責任をとりますか？」

「責任って？」

「あなたは、テレビで、あれだけのことをいったんですよ。冗談じゃすまない。だから、責任をとるのかどうか、聞いているんですよ」

「それ、私の予言が間違っていたらということでしょう？」

「そうです」

「それなら、責任をとるも何もないわ。間違いなく、五月上旬に、事故が起きるんだから」

4

北野は、国鉄本社に戻ると、局長たちに、ありのままを、報告した。

すぐ、告訴すべきだという局長と、告訴したら、かえって、人々の注目を集めてしまう。放っておけば、ゴールデンウイークに入る頃には、永井不二子の予言など、忘れてしまうだろうという局長とに、意見は、分れた。

しかし、三日後に、永井不二子は、今度は、週刊誌に同じことを発表した。

週刊「パラダイス」という、発行部数六十万部の雑誌だった。

見出しも、センセーショナルになっている。

〈ゴールデンウイークが危い！
永井不二子が、鉄道大惨事を予言！　注意せよ！〉

テレビの時は、五月の上旬といっていたが、今度は、ゴールデンウイークの最中と、なっていた。

「これで、確実に、何パーセントか客が減るよ」

と、局長の一人は、腹立たしげに、いった。

「もし、事故が起きなければ、彼女は、責任をとるといっていましたが」

北野がいうと、局長は、舌打ちして、

「あとで、責任をとって貰っても、何にもならんよ。ゴールデンウイークの稼ぎ時に、客が減ってしまうんだからね」

と、いった。

その通りだった。あとで、永井不二子に、謝って貰っても、仕方がない。

北野は、週刊「パラダイス」の出版社へも、行ってみた。しかし、そこで聞かされたのは、中央テレビで聞かされたのと、同じ言葉だった。

表現の自由について、文句をいわれても困る。これ

は、警告の意味でのせたのだ。そんな言葉だった。
北野としても、一応、文句をいっただけで、引き退がるより仕方がなかった。
北野は、その帰り道、ふと、警視庁に寄ってみた。前に、列車内で起きた事件で世話になった捜査一課の十津川警部のことを、思い出したからである。
幸い、十津川は、部屋にいて、北野を、庁内の喫茶室へ案内した。
北野が、コーヒーを口に運んでから、
「今日は、相談したいことがあって、来たんですよ」
と、いうと、十津川は、微笑して、
「例の女の占師のことですね？」
「そうなんです。正直いって、困っています。まだ、ゴールデンウイークの切符が、売れ残っているんです。特に、東京から北の方面の切符がです」
「そんなに、あの女占師の言葉を、人々は、信じるんですかねえ」
「占師の力というより、マスコミの力だと、僕は、思っているんです」
と、北野は、いった。
「北野さんは、彼女に会われたんですか？」
「会いました」
「印象はどうでした？　うさん臭く見えましたか？」
「うさん臭いには違いないんですが、本当に、事故が見えているようないい方をするんですよ。それに、何といっても、スペースシャトルの事故やフィリッピンの政変を予言した実績がありますからね。それを、マスコミが、増幅したんですから、信じる者が、いても、不思議はないんです」
「もし、事故が起きなかったら――？」
「彼女は、責任をとるといっています」
「責任をね」
「それで、どうしたらいいか、困っているんです。国鉄にとっては、今が、正念場でしてね。今もいったように、ゴールデンウイークの指定席は、売り切れていなくてはいけないんです。それが、東北、上信越方面は、売

れ残ってしまっています。ゴールデンウイークが終ってから、責任をとって貰っても、仕方がないんです」
「それは、わかりますね」
「といって、告訴しても、話を大きくするだけのことだという気がするんですよ。何とかなりませんか」
「国鉄としては、どうして欲しいわけですか？」
「出来れば、彼女が、テレビに出て、あの予言は、でたらめだったと、いってくれれば、いいんですがね。彼女は、絶対に、事故は起きるといって、聞かないんですよ。それどころか、週刊誌にまで、発表し、恐怖を、あおっているんです。何かの罪で、逮捕というわけには、いかないでしょうね？」
「難しいですね」
と、十津川は、いってから、ちょっと考えていたが、
「永井不二子という占師は、本当に、霊感があるんですか？」
「今もいったように、スペースシャトルの事故を予言したといいますし、フィリッピンの政変も適中させたということですから」
「それ、本当ですかね」
と、十津川は、笑った。
「本当だと思うんですが？」
「私はね、北野さん。そういう話は、あまり信用しないんですよ。前にも、飛行機事故を予言して、適中させたという易者に会ったことがありましたがね。くわしく調べてみると、その易者は、年頭に、『今年は、大きな交通事故がある』といっただけだったんですよ。それが、いつの間にか、航空機事故を予言したことになってしまっていたんです」
「彼女の場合も、同じだと思いますか？」
「わかりませんがね。私は、予言というのは信じないんですよ」
と、十津川は、いった。
予言というより、超能力といったものを、十津川は、信じないと、いった方が、いいかも知れない。ある意味で、刑事としての捜査と、相入れないものがあるからだ

ろう。
「もし、彼女の占師としての業績が、インチキだったら、脅して、あの予言を取り消させることが出来ますね」
北野が、きらりと、眼を光らせた。
「そうです。それを、調べてみたら、どうですか。私も、時間の余裕があれば、調べてみますが」
と、十津川は、励ますようにいった。

5

十津川は、自分が動けないので、最近、捜査一課に配属された北条早苗刑事に、永井不二子のことを調べさせることにした。
彼女が適任だと思ったのは、男の刑事たちが、十津川自身も含めてだが、頭から、永井不二子のような占師を、インチキと決めてかかる傾向が、あるからだった。
その点、女の北条早苗は、冷静に、見てくれるだろうという期待があった。少くとも、頭から、インチキと決めてしまうことはないだろう。
十津川が、永井不二子のことを話すと、早苗は、興味津々という顔で、聞いていた。
「君は、占いを信じるかね？」
と、十津川は、きいてみた。
早苗は、にこにこしながら、
「占いは信じませんけど、女性の直観力は信じるんです」
「男の直観力は、信じないのかね？」
「私は、こう思っているんです。神様は、公平で、男性には優れた体力を与えた代りに、女性には、優れた直観力を与えたんですわ」
「すると、君は、永井不二子は、素晴らしい霊能力を持っていると思うのかね？」
「霊能力というのは、よくわかりませんけど、直観力は優れている女性かも知れませんわ」
「まあ、いい。最初から否定する立場で調べるより、一

応、力があると肯定する立場で調べた方が、真実に近づけると思うからね」

と、十津川は、いった。

肯定するよりも、否定する方が、物事を厳しく見てしまうと思ったからである。

そのあと、十津川は、池袋で起きた強盗事件捜査の指揮をとることになったこともあるが、北条早苗には、何もいわずに、委せておいた。

二日後に、強盗事件が解決した時点で、十津川は、北条早苗を呼び、どんな具合か、聞いてみた。

「まず、永井不二子の印象を聞きたいね」

十津川が、興味を持って、きくと、早苗は、

「実は、まだ、彼女に、会っておりません」

「外国へ行ってるのかね？」

「いえ。東京にいますけど、私は、彼女に会う前に、彼女の周辺を調べてみたんです」

「なるほどね。それで、どんなことがわかったのかね？」

「面白いというのか、不思議というのか」

と、早苗は、笑ってから、

「中央テレビと、週刊『パラダイス』に行って来ました。そこで聞かされたのは、やはり、スペースシャトルの爆発と、フィリッピンの政変を予言したという話でしたわ。ところが、いくら調べても、その証拠がありません」

「ほう」

「彼女が、予言した時のビデオもありませんし、週刊誌も見つかりません。噂と名声だけが、ひとり歩きしてしまっているんです」

「それは、面白いね」

「それで、もう一度、中央テレビと、週刊『パラダイス』に行ってみました」

「相手の反応は？」

「中央テレビについていいますと、プロデューサーは、永井不二子が予言を適中させた話を、タレントのKに聞いたといいます。そこで、Kに訊すと、今度は、シナリ

オライターのNに聞いたといいます。Nに会ってみると、彼は、歌手のSが、いっていたといい、どこまでも続いていくんです」
「それで、結局、誰が最初にいったか、わからないというわけかね？」
「はい。ただ、永井不二子が、二つの大事件を予言し、適中させたという噂だけが、ひとり歩きしているんです。怖いのは、なまじ、誰がいい出したかわからないだけに、この噂を、否定しようがありません」
「事実だという証拠もない代りに、嘘だと決めつける証拠もないということか？」
「ただ、それだけならいいんですが、彼女の予言は適中するという噂が、広まっているということが、問題だと、思いますわ」
「それで、これから、どうするね？」
「これから、永井不二子本人に会って来るつもりですわ」
と、早苗がいった時、十津川の前の電話が鳴った。
相手は北野だった。十津川は、早苗に、「ちょっと待っていなさい」と、いってから、
「何かありましたか？」
と、北野に、きいた。
「今日の午後三時に、永井不二子が、中央テレビの『午後の世界（ワールド）』に出演します」
北野は、怒りを無理に抑（おさ）えたような声を出した。
「例の予言のことですか？」
「そうです。事件が起きる日時を、もっと詳（くわ）しく予言するといっているそうです」
「すると、彼女は、最初にいった線に沿って、動いているわけですね」
「そうです。こちらでも、いろいろと、手を回したんですが、彼女を抑えられませんでした」
「中央テレビですね？」
「何か、手を打ってくれるんですか？」
「北条早苗という刑事が、彼女のことを調べています」
「女性――ですか？」

「ええ。優秀な刑事ですよ」
と、十津川は、いった。

6

早苗は、中央テレビ局に出かけた。
着いたのは、午後二時半だったが、永井不二子は、すでに第一スタジオに入って、打ち合せをしていた。
早苗は、入口にいたADの一人に、警察手帳を見せ、スタジオの隅で、見学させて貰うことにした。
三時になって、「午後の世界」が、始まった。
永井不二子の出番は、二十分ほど過ぎてからだった。
司会者は彼女に、おもねるように、
「永井先生は、前に、五月上旬に、国鉄で、大きな事故がある。それも、東京より北でと予言されたんで、一部で、大変なパニックになっています。今までに、数々の事件を予言されていますから、当然だと思いますね。噂では、国鉄側から、抗議もあったとか聞きましたが」
と、いった。
不二子は、茶色のガウンのようなものを羽おり、いつものように、小さな王冠を頭にのせていたが、
「ええ。いろいろと、妨害はありましたよ。でも、私は、見ることが出来るんです。血まみれの乗客の姿や、脱線し、横転している車両が。それに、黙っていることは、私の良心が、許しませんわ」
「同感ですね。それで、前に、正確な日時がわかったら、もう一度、テレビに出て、それを、全国の皆さんに発表して下さるということでしたが」
「覚えています。それで、今日、このテレビに、出させて頂くことになったんですわ」
「すると、正確な日時が、わかったんですね？」
「ええ。何月何日かは、わかりました。それを今日、発表します。それは――」
「ちょっと待って下さい。大事なことですから、ゆっくりと発表をお願いします」
司会者は、大げさないい方をした。

急に、早苗の横で、誰かが、舌打ちした。ちらりと、横を見ると、三十七、八歳の男が、永井不二子と司会者を睨んでいた。

舞台には、東北地方の大きなパネルが、持ち込まれた。

早苗は、隣りの男が、気になりながら、永井不二子を、見守った。

不二子は、東北地方のパネルを横において、じっと、眼を閉じている。

「血を流して苦しんでいる乗客の中に、東北訛りの人が多いわ」

と、不二子は、眼を閉じたまま、甲高い声で、いった。

「いいかげんなことをいうな！」

早苗の横で、例の男が、小声で文句をいった。もちろん、舞台の上の不二子たちに、聞こえる筈はない。近くにいた若いADが、咎める眼で、男を見ただけである。

司会者は、相変らず、不二子に対して、おもねる感じで、

「東北弁が聞こえるということは、やはり、東北地方で、事故が起きるということになりますねえ」

「はい」

不二子は、眼を閉じたままでいう。

「それで、くわしい場所と、日時は、わかりますか？われわれがというより、日本人全部が知りたいと思うのは、そのことなんですが」

「私の眼には、五と三という数字が見えています」

「五に三ですか。ひょっとすると、それは、五月三日ということじゃありませんか？」

「そう。五月三日だわ」

「時間は、わかりませんか？　何時頃ということがわかれば、一層、限定できますが」

「明るくはないわ。暗いの。事故の現場には、強烈な照明が当てられてるわ」

「じゃあ、夜ですね？」

「ええ。夜だわ」

「場所は、わかりませんか？」
「待って。何か見えるわ」
「皆さん、静かに！」
司会者は、大げさに、両手を広げて、いった。
「横倒しになっている客車に、何か字が書いてあるのが見えるのよ」
不二子は、眼を閉じたままで、いう。
「どんな字ですか？　教えて下さい」
「赤い色の字だわ。特急という字だわ」
「間違いありませんか？」
「ええ。いくら見ても、特急という字です」
「他には、何か見えませんか？」
「もう見えません。疲れたわ」
不二子は、大きな溜息をついた。
司会者は、ひとり、張りきって、
「これで、ずいぶん、いろいろなことがわかりましたね。それを、整理してみましょう。事故は、五月三日の夜に起こることがわかりました。問題の列車は、特急列車で、東北地方に入ってから、事故に遭うことも、はっきりしました。これだけわかれば、この事故から、身を守ることが可能だと思いますよ」
「私に、いわせて下さい」
不二子が、横から、いった。
「また、何かわかりましたか？」
「そうじゃなくて、私が、テレビで、予言した真意を、視聴者の皆さんに、わかって貰いたいの。私が、売名行為で、やっていると思う人があるかも知れないし、そういって、私を非難する人もいます。前に、予言した直後、私の家に、励ましの手紙と一緒に、脅迫の手紙も、沢山、来ましたわ。でも、売名なんかじゃありません。私は、これまでに、スペースシャトルの爆発や、フィリッピンの政変を予言して、もう十分に、有名ですから、売名の必要なんかないんです。でも、黙っていられませんでした。私に、見えるからなんです。脱線して横倒しになっている列車、五と三の数字、血まみれの乗客たちが、見えるんです。スペースシャトルの時も、フィ

リッピンの時もそうでした。それなのに、黙っていたら、それは、私が、義務を果さないことになりますわ。救えたかも知れない人たちを、見殺しにしたことになります。だから、私は、こうして、テレビに出て、私に見えることを、お話したんです」

「先生の今度の予言が、売名でないことは、私が、よく知っています。皆さんに申しあげますが、永井先生は、もし、自分の予言が外れたら、責任をとると、いわれているんです」

7

「あとで、責任をとって貰っても仕方がないんだ」

早苗の横の男が、腹立たしげに、いった。

早苗は、笑いながら、小声で、

「国鉄の北野さんですね？」

「あなたは？」

「捜査一課の北条です」

「ああ、十津川さんに、聞きましたよ」

「外へ出ましょう」

と、早苗は、先に、スタジオを出た。

北野が、あとから、ついて来た。

二人は、中央テレビの外にある喫茶店に入った。

「向うは、とうとう、宣戦布告して来ましたよ」

と、北野は、いった。

「そうですわね。責任をとると、いってましたけど」

「だから、余計、手に負えないんですよ。警察は、何とも出来ませんか？　十津川さんは、あなたが、優秀な刑事だといっていましたが」

「彼女は、しきりに、転覆している列車や、血まみれの乗客の姿が見えると、いっていましたわね」

早苗は、落ち着いた声でいい、コーヒーにクリームを入れた。

「いってましたね」

「なぜ、見えると、いったのかしら？」

「きっと、彼女には、見えるんでしょう。血まみれの死

体や、哀れな列車の残骸が」
「北野さんには？」
「見える筈がないじゃありませんか。五月三日に、事故なんか起きる筈がないんですから」
「彼女には、なぜ見えるのかしら？」
「それはつまり、彼女が、すごい霊能力があるからじゃありませんか。そういってるんだから」
「怒らないで下さい」
「すいません。今度のことで、ずっと、気が立っているんです。五月三日の東北本線の特急券は、これで、がたッと、キャンセルがでますからね」
「彼女は、いつも、何かが見えるのかしら？　事件が、起こりそうになると」
「そうなんでしょうね。スペースシャトルの時も、見えたんじゃないかな」
「一ヵ月前に、私鉄のS線で、衝突事故がありましたわね。死傷者が、百人近く出た」
「ええ」
「あの事故は、彼女は予言していなかったわ」
「そうですね」
「つまり、あの事故は、彼女には、見えなかったことになりますわ。市民の義務に燃えている彼女が、もし、事故を事前に知っていたら、当然、テレビなり、週刊誌なりに発表して、人々の注意を喚起する筈ですものね」
「ええ」
「とすると、見えなかったんだわ。つまり、彼女は、鉄道の事故が、見えたり、見えなかったりすることになりますわ」
「まあ、そうかも知れませんが、それが、どうだというんですか？　国鉄の被害は、変りませんよ。肝心のゴールデンウイークだというのに、あの女のおかげで、大損害なんですよ」
北野が、わめくようにいうので、早苗は、苦笑しながら、
「落着いて、考えましょう」
と、いった。

「もし、見えたり見えなかったりするとすれば、普通なら、自信がなくなる筈ですわ。そう思いません？　たとえ、事故が見えたとしても、ひょっとして、違うのではないかという疑心暗鬼に陥るのが、普通ですものね」
「あの女は、普通じゃありませんよ」
「でも、彼女は、占いを商売にしていますわ」
「ええ。商売人ですよ。だから、余計、腹が立つんです」
「冷静になって下さい。スタジオで彼女を見ていたんですけど、相当の目立ちたがり屋だと思いますわ」
「それも、わかっていますよ。目立ちたがり屋だから、テレビに出て来て、喋りまくるんです」
「商売人で、テレビに出るのが好きな人なのに、なぜ、そんな危険を冒したのか、不思議に思っているんです。あれだけくわしく発言してしまった上に、責任をとるとも、いってしまった。もし、適中しなかったら、彼女は、占師の仕事をやめざるを得ないと思いますわ」
「当然ですよ。これだけ、大さわぎをしたんですから。われわれだって、損害賠償を要求しますよ」
「目立ちたがりで、占いを仕事にしている彼女が、なぜ、そんな危険を冒したのかしら？　名声は、今だって、十分にあるのに。それに、今いったように、事故は、見えたり、見えなかったりするわけだし――」
「私にわかるわけがないでしょう。勝算があるから、あんなに派手に、喋りまくっているんじゃないですか」
北野は、面倒くさそうに、いった。が、早苗は、きらりと、眼を光らせて、
「なぜ、勝算を持ってるのかしら？」
「それは――」
「その理由を、知りたいと思いますわ」
と、いってから、早苗は、急に、立ち上った。

8

「どうしたんです？」
北野が、きいた。

「彼女が出て来たから、話をしてみようと思います」
永井不二子が、マネージャーらしい小柄な女性を連れて、テレビ局の玄関を出て来るのが見えた。
そのまま、車が来るのを待っている。
「駄目ですよ。話に応じませんよ」
と、北野がいうのへ、早苗は、ニッコリ笑って、
「大丈夫。私は、これでも、刑事ですからね」
と、いい残して、店を出た。
通りを渡ると、丁度、ブルーメタリックのベンツが、不二子の前に、横付けになったところだった。
不二子が、乗り込んだ。が、なぜか、マネージャーは、乗ろうとしない。そのまま、ドアが閉まろうとしたところへ、早苗が、顔を出した。
「お話を伺いたいんですけど」
「忙しいの。またにしてね」
「それでも、お話を伺いたいんです」
早苗は、警察手帳を、不二子の前に突きつけ、相手のひるんだ隙に、さっさと、彼女の横に乗り込んだ。
運転手が、当惑した顔で、「どうします？」と不二子に、きいた。
「私の家に帰るわ」
と、不二子が、いった。
車が、ゆっくり走り出した。
「テレビ、拝見しましたわ」
早苗は、わざと、警察手帳を、手に持ったまま、不二子に、話しかけた。
「ありがとう」
不二子は、そっけなく、いった。
「予言が適中しなければ、責任をとるといわれたのには、感動しましたわ」
「それが、当然でしょう」
「責任をとるということは、どういうことでしょう？占いを、お辞めになるんですか？」
「もちろん。辞めますわ。しかし、絶対に、事故は起こるから、そういう事態にはならないと、思っていますけど」

「その事故を防ぐ方法は、ありませんの？」
「ないわ。私にも、わからないもの」
「でも、あなたは、予言なさったんだから、防ぐ方法も、おわかりになると思いますけど」
「残念ながら、私に見えるのは、転覆した列車や、血まみれの人々の姿だけなのよ。五月三日の何時何分のどこの列車とわかっていれば、何とか事故を防ぐ方法もあると思うけど、そこまでは、見えないわ。五月三日の東北地方へ行く列車を、全て、止めてしまえば、事故を防げるとは思いますけど、それだけの勇断は、国鉄には、ないんじゃないかしら？」
「永井先生は、いつも、大事故が、事前に見えてくるんですか？」
「ええ。スペースシャトルの時も、フィリッピンの政変の時もね」
「一ヵ月前に、私鉄で大きな事故がありましたけど、あれについては、何も警告なさいませんでしたね。あの時は、見えなかったんですか？」
「ああ、あの時ね。残念なことに、あの時は、ニューヨークへ行っていたのよ。私のような霊能力のある人間の世界的な集りが、ニューヨークであったの」
不二子は、誇らしげに、いった。
このあと、早苗が、不二子の子供の時のことなど質問している中に、車は、三鷹の不二子の家に着いてしまった。

9

早苗は、警視庁に帰った。
十津川が、「ご苦労さん」と、声をかけた。
「三時の永井不二子のテレビを見たよ。五月三日の夜行列車、それも特急列車とまで、いっていたね」
「彼女は、あの予言が適中することに、自信を持っていますわ」
と、早苗は、いった。
「それは、テレビの画面からも、伝わって来たよ。それ

について、君は、どう感じたね？」
「なぜ、彼女が、あれほど自信満々でいられるのか、不思議で仕方がないんです」
「それは、いわゆる霊能力があるからじゃないのかね？予知能力といってもいい」
「それがあっても、私には、不思議ですわ」
「なぜだね？」
「彼女は、見えるというんです。でも、見えるのは、転覆した列車と、血まみれの乗客と、五と三の数字。それに赤い特急の文字、ああ、それに、夜だということぐらいですわ。肝心のことが、一つもわかっていないんです。何時何分に、どこを発車し、どこへ行く列車なのか、転覆する場所は、どこなのか、という肝心なことがですわ。それなのに、どうして、自信満々なのか、不思議で、仕方がないんです」
「なるほどね。これから、どう捜査を進めていく積りだね？」
「二つばかり、今すぐ、調べたいことがあります」
と、早苗は、いった。
一時間ほどして、早苗は、戻って来た。
「おかしなことが、増えましたわ」
と、早苗は、十津川に、いった。
「どんなことだね？」
「私は、彼女に、一ヵ月前の私鉄の事故のことをきいてみたんです」
「ああ。百人以上の死傷者が出た衝突事故だね」
「あの時、彼女は、何の予言もしていないんです。だから、あの事故は、見えなかったのかと、きいてみましたわ」
「意地の悪い質問をしたもんだね」
と、十津川が、笑った。
「彼女は、こう答えました。あの時、ニューヨークの霊能力者の国際的な集りに出席していたとですわ。日本にいて、スペースシャトルの事故やフィリッピンの政変を予言していますのにね、その辺の矛盾には、気付かないようですわ。それに、ニューヨーク行の件ですけど、

行ったのは、事実でしたわ。でもあの私鉄の事故は、三月二十八日の午後七時十五分に起きています。彼女が、日本を出発したのは、翌二十九日の午後なんです」
「事故の後か？」
「はい。事故の時は、彼女は、東京にいたんです。それなのに、彼女には、事故は、見えなかったんですわ」
「君は、二つ調べたいことがあるといっていたね。もう一つは、どんなことだね？」
「今日、中央テレビに、彼女を迎えに来ていた車があったんです。ブルーのベンツで、彼女の車ではありませんでした。ナンバーから、陸運局に調べて貰いましたら、水谷明という建設会社の社長の車とわかりました」
「その水谷という社長と、永井不二子とは、何か関係があるのかね？」
「まだ、わかりませんが、水谷は、年齢五十歳。従業員百五十六人の建設会社をやっています。彼女の三鷹の家も、この会社が、建てたそうですわ」
「スポンサーというやつだろう。有名な占師には、政治家や、実業家、それに芸能人の取り巻きがつくというから、別に、不思議は、ないんじゃないのかね」
「そう思いますが、もう少し、この男のことを調べてみたいんです」
「やってみたまえ」
と、十津川は、いった。

10

ゴールデンウイークが、始まった。
永井不二子は、いぜんとして、五月三日に、東北で、列車事故があるという言葉を、あちこちで、撒き散らしていた。
国鉄の広報室は、その件についての問い合せに対して、応対に忙殺された。
「五月三日の青森行の夜行特急の切符を買っているんですが、乗って大丈夫ですか？」
そんな質問ばかりである。

電話は、ひっきりなしにかかって来て、広報室の電話回線は、パンク寸前になったくらいである。

上野駅に、直接、電話して来たり、窓口にやってくる人もいた。

国鉄としては、当然、「大丈夫です」と、答えざるを得ない。それで、相手が、納得してくれればいいのだが、必ず、

「本当に、大丈夫ですか？」

と、重ねて、きく。

「事故なんか、起こりませんよ」

「しかし、永井不二子は、必ず、転覆事故が起きると、予言してるじゃないか」

「あんなものは、信じられません」

「万一、事故になったら、どう責任をとってくれるのかね？」

「起きれば、もちろん、責任をとりますが、起きませんよ」

どの電話も、同じなのだ。中には、五月四日か、五日の切符と、取りかえて欲しいという人もいた。

だが、この要求には、応じられなかった。五月三日をのぞいて、他の日は、どの列車も、満席になっていたからである。それで、電話口での口論になったりした。

「調べは、進んでいるかね？」

十津川は、北条刑事を呼んで、きいた。

「水谷明については、いろいろと、わかりましたけど、五月三日の特急列車とは、なかなか、結びつきません」

早苗は、困惑した表情で、十津川に、いった。

「水谷が、五月三日に、東北地方に、旅行に出るという予定はないのかね？」

「ありません」

「水谷と、永井不二子との関係は、単なるスポンサーなのかね？」

「男と女の関係だという人もいますけど、本当かどうか、わかりませんわ。それに、二人が、どんな関係でも、それは、直接、五月三日の予言とは、結びつきませんわ」

「水谷明の経歴は？」
と、十津川は、きいた。
「年齢は、五十歳です。長野市の生れで、地元高校を卒業して、上京しました。さまざまな仕事についたあと、三十五歳で、建設会社を作りました。最初は、うまくいかず、借金に追われて、姿を消したりしたこともあったようですが、現在は、業績も、順調です」
早苗は、手帳のメモを見ながら、いった。
「東北の生れじゃないのかね？」
「私も、ひょっとすると、と思ったんですが、違いましたわ」
「永井不二子の方は、どうだったかね？」
「彼女も、東北の生れではありません。千葉市内で、生れていますわ」
「水谷と、同郷というわけでもないんだな？」
「はい」
「水谷建設の営業成績は、順調だといったね？」
「はい。ここ四、五年は、順調で、受注も増えています。税金も、ちゃんと、払っていますし――」
「水谷の周辺にも、犯罪の匂いはないかね？」
「前科はありませんわ。何かの犯罪に関係したこともありません」
「百五十六人の従業員は、どうだね？」
「そちらの方は、全部、調べていませんけど、建設会社ですから、かなり、荒っぽい人間もいると思いますわ」
「水谷は、東北とは、全く関係ないのかね？」
十津川は、念を押した。
早苗は、ちょっと考えていたが、
「全くないとは、いい切れません。水谷は、旅行好きですから、東北にも、何回か行っていると思いますし、建設用の木材は、東北地方からも、買い入れていますから」
「それなら、東北地方のことは、かなり詳しいと見ていいだろうね」
と、十津川は、いった。
個人的な旅行に、列車を使ったとすれば、東北本線を

走る特急列車のことも、よく知っているだろう。
十津川は、亀井を呼んで、話に、参加させた。
「北条君の結論は、どうなんだね？」
と、その亀井が、早苗に、きいた。
早苗は、申しわけなさそうに、
「いくら調べても、結局、よくわからないんです。ひょっとすると、水谷が、永井不二子に指示して、あんな予言をさせているのではないかと考えたんですけど、そうだとしても、理由が、わかりません」
「水谷と、永井不二子とは、時々、会っているのかね？」
「昨日も、新橋の料亭で、夕食を一緒にとっていますわ」
「水谷に、家族はないのかね？」
「奥さんは、二年前に、亡くなっていますわ。娘が一人いましたが、すでに結婚して、大阪です」
「再婚の気配はないのかね？」
「今は、独身を楽しんでいるみたいですわ。だから、永井不二子との仲も、いろいろと、いわれるんだと思います」
「もう少し、水谷のことを、調べてみたいね」
と、亀井が、いった。

11

しかし、時間は、容赦なく、たっていった。
五月三日が、来た。
北野をはじめとして、国鉄の関係者は、誰も、永井不二子の予言を、信じてはいなかった。
だが、気にはなるのだ。
うす気味悪いことに、かわりはない。今日、特急列車を運転する運転士や、同乗する車掌の中には、神社で、お祓いを受けてから、乗車する者も、多かった。
念のために、上野駅に、対策本部が、設けられ、北野も加わった。が、北野の役目は、警察との連絡だった。
対策本部では、列車を、東北本線に、しぼることにし

た。

東北新幹線は、対象から外すことにした。

新幹線も、特急列車に違いはないが、「特急」という赤い文字というのが、在来線の感じだったからである。

上野から、東北本線で、北へ向う特急列車は、朝から、次々に、発車して行く。

午前六時五三分発、黒磯行、新特急「なすの1号」が、最初の特急列車である。

何ごとも、起きない。

永井不二子の予言も、夜の特急ということだから、昼間は、安全なのか。

一五時〇四分発の秋田行L特急「つばさ13号」から、緊張が始まった。

この列車は、福島発が、一八時二一分。この辺から、夜を迎え、終着の秋田に着くのは二二時五七分になるからである。

国鉄としては、万一に備えて、鉄道公安官を、同乗させることにした。

北野は、16番線ホームに立って、この列車を、見送った。

さすがに、乗車率は、六十パーセントくらいである。平静をよそおっているが、乗客の顔は、何となく、不安気に見えた。

次の「なすの13号」は、宇都宮行なので、公安官は、乗せなかった。

「なすの15号」「なすの17号」と、いずれも、宇都宮止まりである。

二〇時五〇分発の特急「あけぼの1号」は、青森行のブルートレインだった。

上野を発車する時から、すでに、夜を迎えている。

普通なら、満席の筈なのに、これも、六十パーセントくらいの乗車率になっていた。切符を買ってから、キャンセルした人が、かなりいるのだ。

北野は、十津川に、電話をかけた。

「今のところ、どの列車も、順調に、動いていて、事故の報告は、来ていません」

と、北野は、いった。
「こちらは、永井不二子と、彼女のスポンサーの水谷明を、監視しているんですが、二人とも、今のところ、東京の住所から、動きませんね。永井不二子の家には、中央テレビのレポーターが、待機していますよ」
「そうですか。事故が起きた時の談話をとるためですか？」
「と、思いますね」
「むかつきますね」
と、北野は、いった。
午後十時を過ぎた。
まだ、事故の連絡は、どこからも、来ない。
午後十時丁度（二二時〇〇分）には、青森行のブルートレイン「あけぼの3号」が、上野駅を出て行った。
この辺から、寝台特急（ブルートレイン）が、次々に、北に向って、上野駅を発車して行く。
二二時二〇分。青森行の「はくつる1号」
二二時二四分。秋田行の「あけぼの5号」
二三時〇〇分。青森行の「はくつる3号」
普段なら、これで、上野発、東北本線の特急列車は、終りである。
だが、ゴールデンウイーク中の五月二日から四日にかけて、もう一本、臨時の特急列車が、発車する。
二三時〇三分発の「あけぼの51号」である。
寝台列車ではなく、座席特急である。
最後のその特急列車も、上野駅を出て行った。
午前零時を過ぎたが、事故の連絡はない。
「やはり、でたらめだったんじゃないかね」
と、対策本部で、上野駅の助役の一人が、肩をすくめるようにして、いった。
「何もなかったら、わざわざ、対策本部なんか作ったのが、馬鹿みたいだねえ」
もう一人の助役が、いった。
「週刊誌に書かれるんじゃないか。国鉄は、占師の言葉なんか信じないといっておきながら、心配で、対策本部を、設けていたなんてね」

そんな助役たちの会話を聞きながら、北野は、じっと、時計に、眼をやっていた。

早く、夜が明けないかなと、思う。永井不二子の予言など、信じはしないが、どうしても、気になってしまうからである。

午前一時を過ぎた。

緊張していた対策本部の空気も、次第に、だらけてきた。

「少しばかり、馬鹿馬鹿しくなってきたよ」

と、助役の一人がいい、小さく、欠伸をした。

（永井不二子は、何の勝算もなく、あんなことを、いったのだろうか？）

北野には、そこが、わからなかった。

午前二時になった。いぜんとして、事故のニュースは、入って来ない。

「やれ、やれ」

もう一人の助役が、立ち上って、大きく、深呼吸をした。

その直後だった。

東北本線の白河の先の阿武隈川にかかる鉄橋で、列車の転落事故があったという連絡が入った。

北野たちの顔色が、変った。

12

転落事故を起こしたのは、臨時特急の「あけぼの51号」だった。

第一報のあと、第二報は、なかなか、入って来なかった。

いらだちが、対策本部を支配した。

北野は、十津川にも、電話で知らせた。日頃、あまり、驚くことのない十津川だったが、この時は、

「本当に、事故が起きたんですか？　本当に」

と、狼狽の色をかくさなかった。

「くわしいことはわかりませんが、白河の先で、事故があったことは、間違いありません。こちらも、愕然とし

ています」

北野は、正直に、いった。

第二報が、対策本部に届いたのは、午前四時近くだった。

客車三両が、鉄橋から転落し、三十名以上の死傷者が出ているというのである。

この数字は、当然、増えてくるだろう。

永井不二子の予言どおり、転落事故が起き、乗客が、血まみれになったのだ。

客車が転落した川は、水が少かったが、それでも、負傷者の中には、流され、溺れる者も出ているらしい。

暗闇の中では、救助作業が、なかなか、進展しないのだろう。

東京にいる北野は、ただ、いらだちながら、詳報を待つより仕方がなかった。

夜明けと共に、副総裁の小野田が、ヘリコプターで、現地に飛ぶことになり、北野も、同行した。

どうして、三両もの客車が、鉄橋から転落したかわからなかったが、現地に着いてみて、北野にも、その理由が、わかった。

鉄橋そのものが、破壊されているのである。

「何者かが、爆薬を仕掛けたんですよ」

と、現場の復旧作業に当っている保線区員が、小野田に、いった。

三両の客車は、折り重なるように、川の中に落ちていた。

救急車が、ひっきりなしに、走り廻っている。

死者は、河原に並べられ、毛布をかぶせてあった。

福島県警から、パトカーも、駈けつけていた。

東京では、死傷者三十名と聞いていたが、ここでは、もっと多くなりそうだと、わかった。流された死体も、ありそうだという。

爆薬は、鉄橋の、ほぼ中央部に仕掛けられ、臨時特急「あけぼの51号」が、通過中に、爆発したのだ。

もし、「あけぼの51号」が、満席だったら、死傷者は、百名をこえていたろうという。永井不二子の予言のおか

げで、乗客が少かったので、犠牲が、少かったともいう。

マスコミも、事件を知って、駈けつけて来た。

テレビや、新聞のヘリコプターが、現場の頭上に飛び始めた。

13

十津川たちは、複雑な表情で、持ち込まれたテレビの画面を見ていた。

十津川、亀井、それに、北条早苗だった。

中央テレビの朝のニュースショウの時間である。

現場の惨憺たる光景にかぶせて、永井不二子に対するインタビューが入ってくる。

「不幸にも、永井先生の予言が、適中してしまいましたね」

「ええ。恐れていたことが、現実になってしまいましたわ」

「誰かが、鉄橋に、爆薬を仕掛けたといわれていますが、そこまで、先生は、わかっていましたか？」

「いいえ。残念ながら、そこまでは、見えませんでしたわ」

「もし、今度の事件の解決に、警察が、協力を要請したら、協力しますか？」

「私に出来ることでしたら、喜んで」

永井不二子は、そういっていた。

死傷者のほとんどは、秋田までの切符を買っていたという。

身元のわかった人の名前が、次々に、画面に、テロップで、出てくる。今のところ、死者十二名、負傷者五十九名だが、この数字は、更に、増える見込みだという。

「永井不二子は、犯人を、知っていますわ」

早苗が、テレビを見ながら、いった。

「すると、犯人は、水谷明ということになるのかな？」

十津川が、きく。

「そう思います」

「しかし、水谷が、なぜ、鉄橋に爆薬を仕掛けて、列車を、転落させるんだね？」
「いろいろ考えられますわ」
「例えば？」
「国鉄に、恨みを持っているとか、或いは、どうしても殺したい人間が、この『あけぼの51号』に、乗っていたとかですわ」
「その一人を殺すために、何人もの乗客を殺したのか？」
「動機が、かくせますわ。それに、建設会社なら、ダイナマイトだって、簡単に手に入る筈です」
「それは、少し、おかしいんじゃないかね？」
と、口を挟んだのは、亀井だった。
「どこがだね？　カメさん」
十津川が、きいた。
「水谷が、北条刑事のいう理由で、爆破したとします。永井不二子に、例の予言をいわせたのは、水谷ということになりますが、なぜ、そんなことをさせたのか、わからなくなります。水谷の殺したい人間が、『あけぼの51号』に、乗ることになっていたとして、永井不二子の予言のおかげで、乗るのを、やめてしまうかも知れないじゃありませんか」
「それは、カメさんのいう通りだね。どうだね？　北条君」
と、十津川が、早苗を見た。
「確かに、そうですけど、水谷が、犯人に違いありませんわ。他に、考えられませんもの」
「三つの方法を考えてみよう」と、十津川が、いった。
「一つは、問題の列車の乗客のことだ。死傷者の中に、水谷と関係ある人間がいたかどうかを、調べる。これは、福島県警と、協力して進める。第二は、水谷が犯人だとすると、彼は、東京にいたから、誰かに、やらせたことになる。水谷の部下か、知人で、白河に行った者がいないかどうか調べる。第三は、永井不二子だ。彼女は、テレビで、警察に協力するといっているんだから、呼んでみようじゃないか」

14

十津川は、北条早苗を、すぐ、福島県警に行かせてから、永井不二子を警視庁に呼んだ。

不二子は、女のマネージャーの他に、若くて、眼つきの鋭い男を連れて、警視庁に、やって来た。ボディガードだと、いった。

「世の中には、馬鹿な人がいて、まるで、あの事故を、私がやったみたいにいって、脅迫の電話をかけて来たりするんですよ。それで、ボディガードを連れて歩くことにしましたの」

と、不二子は、いった。

十津川は、不思議なものでも見るような気持で、彼女を見た。いくら、自分の予言が当ったといっても、死傷者が、何人も出ているのだ。苦悩の表情があって当然なのに、眼の前の不二子には、それがない。得意気ですらある。

「適中しましたね」

と、十津川は、いった。

「当然ですわ」

「しかし、百人近い死傷者が出ていますよ」

「国鉄当局が、いけないんですわ」

「なぜですか？」

「私の予言を信じて、五月三日の夜行特急を、走らせなければ、こんなことには、ならなかったんですよ」

「しかし、これは、事故じゃありません。誰かが、爆薬を仕掛けたんです。犯罪です」

「でも、私の予言は、当りましたわ」

不二子は、変に光る眼で、十津川を見た。

自分を、予知能力者と、信じ込んでいる顔だった。

「水谷明さんとは、どんな関係ですか？」

十津川は、話題を変えた。

不二子の顔が、なごんだ。

「親しいお友だちですわ」

「具体的に、いってくれませんか？」

「政治家や、財界の方で、私のお友だちは、沢山いますわ。水谷さんも、その中の一人ですわ」
「仕事をする上で、あなたの意見を、聞いたりするわけですか？」
「ええ。新しい事業を始める時に、私の意見を参考にしてくれますわ。そういう方は他にも、何人も、いらっしゃいますけど」
「あなたが、今度の事件を予言した時、水谷さんは、何かいいましたか？」
「いいえ。水谷さんは、私のような霊能力はないから、何もいいませんよ」
「水谷さんが、最近、何かに困っていたようなことは、ありませんか？」
「ありませんよ。仕事も、順調のようですしね」
「水谷さんと、知り合われたのは、いつ頃ですか？」
「そうですわねえ。二年前だったと思いますけど」
「すると、スペースシャトルの爆発の時は、もう、知り合われていたわけですね？」
「ええ」
「最初、どんな風に、知り合われたんですか？」
と、十津川は、きいた。
「よく覚えてるんですけど、私のために、政治家のTさんがパーティを開いて下さった時、水谷さんが、きれいな花束を贈って下さったんですよ」
「花束ですか。なかなか、ロマンチックですね」
「そうなんですよ。あの人は、ロマンチックなんです」
不二子は、嬉しそうに、いった。

15

不二子のいったことが、事実かどうか、十津川は、調べてみた。T氏といえば、元国務大臣で、現在も、保守党の中堅議員である。
このT氏が、二年前に、不二子のために、パーティを開いたのだろうか？
秘書に電話してきいてみると、相手は、笑って、

「それは嘘ですよ」
「しかし、彼女は、Tさんが、自分のために、パーティを開いてくれたと、いっていますが」
「それで、困っているんです」
「と、いいますと？」
「二年前に、うちの先生が、国務大臣に就任したんですが、その時、突然、彼女が、電話して来ましてね。うちの先生のことを、大臣になる人だと予言したら、その通りになった。おめでとうございますというんですよ。別に、悪い気はしないので、有難うございますと、礼をいっておきましたよ。そのあと、うちの先生の大臣就任の祝賀パーティがあったんですが、その時、招待もしていないのに顔を出して、参会者に、しきりに、自分を売り込んでいましたね。パーティというのは、そのことじゃありませんか。最近でも、やたらに、うちの先生の名前を使うんで、困っているんですよ」
「使うというのは、どんな風にですか？」
「まるで、うちの先生が、彼女のおかげで、大臣になれたみたいにいい廻っているんでね。二、三度、注意したんですが、彼女は、そう思い込んでいるんで、手に負えませんよ」
と、秘書は、笑った。
思い込むという言葉に、相手が、力をこめたところをみると、それが、特別に、印象に残っているからに違いない。
不二子は、思い込みの強い性格なのだ。
他人の開いたパーティに、勝手に出て行っても、自分のために開いてくれたパーティだという。嘘をついているのではなく、そう思い込んでいるのではないだろうか。
亀井と若い西本刑事が、水谷建設の従業員の一人一人を、調べていた。東北に、行っていた者がいないかどうかである。
夜になって、福島県警へ行った北条早苗から、電話が入った。
「亡くなった方や、怪我をされた家族の方が、こちらに

駈けつけて来ています」
と、早苗が、いった。
「こちらでも、死傷者の名前が、どんどん、発表されているよ。亡くなった十二人の死因は、何だね？」
「いろいろです」
「と、いうと？」
「三両の客車は、川の中に転落したので、溺死もありますし、圧死もあるみたいですわ。三両の客車の中の一両は、爆発をまともに受けて、破壊されてしまっていますので、乗客が、外に放り出されています。そのため、死体が、下流まで流されてしまったケースも、あるみたいですわ」
「亡くなった十二人については、全部、身元が、わかったようだね？」
「はい。幸い、身元が、わかりました。死体が、さほど損傷していませんでしたし、身分証明証なり、運転免許証を持った人が、多かったからのようです」
「永井不二子の予言については、県警は、どう見てるんだね？」
「彼女に予知能力があったとは、思っていないみたいです。何かおかしいとは、思っているようですが、今は、爆発物の解明に、全力をあげていますわ」
「ダイナマイト説が出ているが、そちらでは、どうだね？」
「こちらでも、鉄橋に、ダイナマイトを仕掛けたという説が有力ですわ。それから、時限装置ではなく、無線装置で、爆発させたのだろうということです」
「すると、犯人は、現場にいたわけか？」
「はい。ただ、爆発のあったのが、午前二時近くですから、目撃者は、見つかっていません」
「そうだろうね。問題は、犯人と、動機だがね。まだ、どちらも、わからないか？」
「はい。まだ、わかりません。こちらでは、過激派のテロ説も、出ていますが」
「それはないと思うね」と、十津川が、いった。
「国鉄に聞いたんだが、あの列車に、政府の要人や、財

界の有力者は、乗っていなかったということだよ。それに、過激派が狙うのなら、新幹線が一番、効果的だろう。在来線の、しかも、臨時列車では、効果は、少いからね」

「すると、やはり、水谷明の線でしょうか？」

「と、思っているんだがね。そちらで、何かわかったら、すぐ、連絡してくれたまえ」

と、十津川は、いった。

16

二日目の午後になって、亀井が、面白いことを、摑んで来た。

水谷建設で、問題の五月三日の午後、木材の買付けに、大型トラックが、米沢に向かって、東京を出ているというのである。

吉田という二十六歳の運転手と、営業部長の田代という四十八歳の男が、そのトラックには、乗っている。

「十一トン積みの大型トラックです。米沢スギを買付けに行ったと、いっています」

と、亀井が、いった。

「本当に、米沢へ行っているのかね？」

「五月四日の朝、米沢市内に着き、実際に、買付けをやり、東京に戻って来ています」

「すると、問題の時刻には、白河の近くを走っていた可能性があるわけだね？」

「そうです。トラックに、ダイナマイトや、無線の発信装置を積んで行ったということも、十分に、考えられます。もちろん、否定はしていますが」

「問題は、動機か」

「そうですね。動機があれば、このトラックで、ダイナマイトを運んだと、いうことになると思うんですが」

残念そうに、亀井が、いった。

十津川は、今度の事件で亡くなった十二名の乗客に注目した。

すでに、十二名の名前、住所、行先などが判明してい

た。もし、この中に、水谷明と関係のある人間がいれば、それが、事件の解明の手掛りになるのではないかと思ったからである。

十津川は、アイウエオ順に、十二名の名前を、並べてみた。

①伊藤　英夫　(40)　溺死　住所は秋田　農業
東京からの帰り

②　妻　貞子　(35)　溺死　〃

③次女　みどり(9)　溺死　〃

④石井　孝　(21)　溺死　東京　学生
秋田へ帰省

⑤内海　文子　(60)　圧死　山形　無職
東京からの帰り

⑥江上　昌夫　(22)　溺死　東京　学生
山形へ帰省

⑦大久保　進　(30)　圧死　東京　会社員

⑧妻　ゆう子　(28)　圧死
この二人は、東北の温泉めぐりで、周遊券にて乗車

⑨砂田　三郎　(22)　溺死　東京　学生
秋田の郷里へ帰るため

⑩中村　雅夫　(50)　溺死　東京　会社員
周遊券にて、東北旅行

⑪林　英司　(23)　圧死　東京　学生
米沢へ帰省

⑫村田　洋子　(28)　溺死　東京　ＯＬ
秋田へ帰省

三人の会社員（一人はＯＬ）は、水谷建設の社員ではなかったし、取引先の会社でもなかった。

四人の学生は、帰省のために、「あけぼの51号」に乗ったことになっている。

十津川は、それが事実かどうか、秋田、山形、米沢へ問い合せてみた。

地元の警察が、調べてくれたところによると、四人と

も、郷里の家族に、ゴールデンウイークに帰ると、いっていたことが、わかった。

四人の家族は、現場に駈けつけ、涙ながらに、遺体を引き取って行ったということだった。

ただ、その中の一人、石井孝の母親は、息子が、四月二十九日には、帰るといっていたのにと、泣いたという。その日に帰省していれば、死なずにすんだと、思ったからだろう。

本人の石井孝に、何か用があったのか、それとも四月二十九日の切符が買えなくて、五月三日の「あけぼの51号」に、乗ったのかも知れない。

周遊券利用が三人いる。家族や知人に聞くと、三人とも、四月二十九日の列車が、満席だったので、五月三日の「あけぼの51号」にして、特急指定券を買ったというから、石井孝も、同じ理由だったのではないか。若い学生なら、予言など、信じないだろう。

解明の手掛りが、見つからない。

17

水谷明が、今度の事件に関係しているとする。一番の問題は、動機だが、他にも、わからないことがある。

なぜ、東北本線だったのか？

なぜ、臨時特急だったのか？

なぜ、鉄橋上だったのか？

この疑問を、一つ一つ解いていけば、事件の真相に、到達できるのだろうか？」

北条刑事から、電話が入った。

「死んだ江上昌夫の両親なんですが、今日になって、息子は、四月二十九日に帰って来ると、いっていたといい出しました」

「ちょっと待ってくれ。石井孝の母親も、そういっていたんだよ。江上昌夫の場合も、間違いないんだね？」

「はい。四月二十九日に、帰るといっていたので、待っていたんだと、いっていますわ」

「いつ、両親に、いったんだろう？」
「四月の五、六日頃、電話をかけて来て、二十九日には帰るといったんだそうです。それで、二十九日に、帰って来ないので、電話したといっていましたわ」
「それで、息子さんは、何と答えたんだ？」
「それが、東京のアパートにいなかったんだそうです」
「学生は、あと二人いたが、そっちは、どうだね？」
「もう一度、確認してみましたが、あとの二人は、自宅に、ゴールデンウイークに帰るといっただけで、四月二十九日とは、いわなかったそうです」
「四月二十九日というのは、面白いね。何かのヒントになるかも知れん」
「なるでしょうか？」
「調べてみよう」
と、十津川は、いった。
十二人の死者の中に、学生が、四人いた。
その中の二人は、四月二十九日に、帰るといったのに、実際には、五月三日の列車に乗っている。
「どう思うね？　カメさん」
と、十津川は、きいた。
「ゴールデンウイークの切符は、手に入りにくいということじゃありませんか。二人とも、四月二十九日の列車で、帰郷したかったが、手に入らなかった。それで、仕方なく、五月三日の、それも、臨時特急の切符を買って乗ったということだと思うんですが」
「あり得るね。だが、それが、事実かどうか、調べて貰いたいんだ」
と、十津川は、いった。
亀井は、江上昌夫が住んでいた中野のアパートに出かけて行った。
その間に、十津川は、上野駅に電話をかけ、四月二十九日の山形行の特急列車の切符は、四月五日か、六日でも、買えたかどうか、きいてみた。
四月十日までなら、いくつかの特急列車に、まだ、座席があったという返事だった。
江上昌夫が、山形の両親に、四月二十九日に帰ると

いって来た時には、まだ、この日の特急列車の切符は、買えたのである。

三時間後に、戻って来た亀井は、更に、江上の部屋から、四月二十九日のL特急「つばさ13号」の切符を見つけ出して来た。

「つばさ13号」は、一五時〇四分に、上野を出て、山形には一九時四三分に着く。

江上昌夫という学生は、明らかに、この列車で、山形へ、四月二十九日に帰るつもりでいたのだ。

「この切符は、部屋のどこにあったんだ？」

と、十津川は、亀井に、きいた。

「机の引出しを開けたら、入っていましたよ。だから、すぐ見つかりました」

「とすると、失くしたと思って、五月三日の『あけぼの51号』に乗ったんじゃないんだね」

「そうですね。何か、急用が出来て、五月三日に変えたわけでもないと思います。それなら、山形の両親に、その旨、電話したでしょうし、この切符を、払い戻していると思うのです。彼は、金持ちの息子というわけじゃないようですから」

「私と一緒に、もう一人の石井孝のアパートへ行ってくれないか」

と、十津川は、亀井を誘った。

石井のアパートは、高田馬場にあった。木造アパートで、六畳一間に、小さな台所がついているが、トイレは共同で、バスはない。

「こういう部屋は、なつかしいですよ。私も上京した時は、一間だけのアパートでしたから」

と、亀井は、狭い部屋の中を見廻しながら、いった。

「江上昌夫のアパートも、同じ感じかね？」

十津川が、きく。

「そうです。トイレはついていましたが、バスはないです」

「石井孝も、四月二十九日の切符を、買っていたのかな？」

と、十津川は、いい、二人は、部屋の中を、探してみ

た。
机の引出しには、入ってなかったが、洋ダンスのコートを調べていた亀井が、にっこりして、
「ありました！」
と、いった。
四月二十九日の寝台特急「あけぼの5号」の切符だった。この列車は、上野を、二二時二四分に発車し、終着の秋田に着くのは、翌三十日の午前七時三〇分である。
「どういうことですかね？　これは」
亀井が、眉をひそめて、見つけた切符を、見つめた。
「誰かが、五月三日の『あけぼの51号』の切符を買って、石井孝と、江上昌夫に渡したことになるね」
「水谷明ですか？」
「だとすると、なぜ、そんなことをしたかが問題だよ」
と、十津川は、いった。

18

今度の事故で、十二人が死んだが、その中に、四人の学生がいた。
この四人に、共通点があるだろうか？
死因は、三人が溺死で、一人が、圧死である。これは、乗っていた車両によるのだろう。
溺死した三人は、4号車、圧死した学生は3号車の切符を持っていた。
郷里は、秋田二人、山形、米沢各一人で、ばらばらといっていいだろう。
大学も、四人とも、別々である。アパートも、違う場所にある。お互いを知っていたという形跡は、なかった。
水谷明と関係があったとも、思えなかった。水谷は、四人の大学のどれとも、関係がなかったからである。
「しかし、何かあるね」

と、十津川は、いった。
少くとも、二人の学生は、四月二十九日の切符を買っていたのに、帰らず、五月三日にしたのである。そこに、何かあるに違いない。
北条早苗刑事が、帰って来た。
「一つ、変なことを発見したんです」
と、早苗は、疲れた顔も見せず、いった。
「四人の学生のことでかね？」
「それに、関係があるかも知れませんわ」
早苗のいうのは、次のようなことだった。
鉄橋が爆破されて、「あけぼの51号」の2号車、3号車、4号車の三両が、川に転落した。
その結果、十二名の死者が出ているのだが、2号車からは、死者は出ていない。九名の死者が、3号車、残りの三人が、4号車というわけである。
「つまり、4号車では、学生三人だけが、亡くなっているんです」
と、早苗が、いった。
「それが、おかしいのかね？」
「三人とも、二十代の元気のいい青年ですわ。他の乗客の中には、老人も何人かいるのに、怪我をしただけで、助かっています。こんな中で、若い三人が、なぜ、三人とも、溺死したのか、不思議で仕方がありません」
「なるほどね」
「三人の中、石井孝は、大学の水泳部にいたと、両親がいっていますから、泳げないから溺死したということはありませんわ。それに、鉄橋に仕掛けられたダイナマイトは、丁度、3号車のところで、爆発したことが、わかりました。転落した三両の中で、3号車が、一番、破壊されていましたから、死亡者も、一番、多いんです」
「遺体は、全部、解剖したんだろう？」
「はい、死因を調べるためですわ。でも、あまり詳しい解剖は、出ていませんでした。遺族が、一刻も早く、遺体を引き取りたいと、いっていたからだと思います」
「じゃあ、三人の学生が溺死したのは、間違いないんだね？」

「はい」
「4号車では、若い三人の学生だけが溺死したか――」
と、十津川は、ひとりごとのようにいって、考えていたが、
「永井不二子が、最初に、事故を予言したのは、いつだったかね？」
と、亀井に、きいた。
「確か、四月十五日でした」
「その頃、死んだ学生たち、いや、4号車の三人だけに、しぼってみよう。この三人が、何をしていたか、知りたいな」
と、十津川は、いった。

19

その調査に、十津川は、亀井たち七人の刑事を動員した。
彼等は、三人の大学に行き、教師に会い、クラスメイトや、ガールフレンドにも、会った。
最初にわかったのは、石井孝のことだった。
彼の友人の一人が、石井は、四月十日から三日間、アルバイトをするといっていたと証言したのである。二十九日に、郷里の秋田に帰るのだが、切符を買ったら、金がなくなってしまったので、稼ぐのだと、いったという。
「石井は、この週刊誌で、仕事を見つけたそうです」
と、亀井は、アルバイトを紹介する専門の週刊誌を、十津川に、見せた。
「しかし、その中にあるどの仕事をやったのか、わからんだろう？」
「そうなんですが、西本君と、その週刊誌を調べていて、面白いものを見つけました。五十六ページです」
と、亀井が、いう。
十津川は、そのページを開いてみた。
いくつかのアルバイトの紹介が、並んでいる。
その中の一つに、十津川の眼が、止った。

〈日給一万円、危険手当五千円。交通費支給。
午前九時から五時まで。昼休み一時間。
残業あり。
身体頑健な男子生徒求む。
水谷建設　TEL――〉

「電話して確めましたが、この水谷明の会社です」
と、亀井が、いった。
「石井孝は、この仕事をやったのかな？」
「そう思います。他の二人の学生も、この雑誌を見て、水谷建設に電話したんじゃないでしょうか。三人が、同じアルバイトをしたとすると、共通点になりますし、水谷明とつながって来ます」
と、亀井は、いった。
どんな仕事なのかを、十津川は、調べることにした。
千葉県船橋に近い湿地帯に、地下二階、地上九階のビルを建てる工事に、水谷建設が、参加している。といっても、水谷建設が、請け負ったのは、その基礎工事の部分である。
地下水が、どんどん湧いてくる土地なので、特殊な工法が、採用された。
直径一・五メートルの鋼管を、敷地の周辺に、何本も打ち込み、水を抜いたあと、コンクリートを流し込んで、土地を強くする工法である。
どうやら、石井孝たちは、その作業で、働いたらしい。危険が伴うので、危険手当も、出ている。
基礎工事は、現在、ほぼ、終了していた。
十津川たちは、この工事で働いたアルバイトの氏名を明らかにするように、水谷建設に申し入れた。
名簿が、提出された。が、そこに、石井孝、江上昌夫、砂田三郎の三人の名前は、見つからなかった。
工事中に、事故はなかったという。
十津川たちは、名簿にあった人たちに、片っ端から、当ってみた。
驚いたことに、十人の中、五人は、でたらめな名前

だった。明らかに、作られた名簿なのだ。
それでも、全く架空の人間だけの名簿は、作るのをはばかられたとみえて、実在の学生の名前もあった。東北から、出稼ぎに来た人の名前もである。
十津川たちは、根気よく、その一人一人に会って、工事のことを聞いた。
その中の一人が、江上昌夫のことを覚えていた。やはり、江上は、この工事現場で、働いたのだ。
もう一つ、興味ある話を、何人かから、聞くことが出来た。
四月十二日の午後、事故があったらしいというのである。
何本目かの鋼管を打ち込んだあと、中の湧水を、排水した。午後五時に作業が終り、工事責任者である水谷建設の人間が、その鋼管に、蓋をして、帰ってしまった。
だが、中に、まだ、アルバイトの学生がいた。鋼管の中に、再び、水が湧き出して来て、逃げ場のない彼等は、中で、溺死したらしいというのである。

20

少しずつ、謎が、解けて来た。
四月十二日の夕方、事故が起きたのだ。
水谷建設の工事現場で、アルバイトの学生三人が、地中に打ち込んだチューブの中で、溺死した。
それも、責任は、水谷建設にある。しかも、三人もである。
公けになれば、水谷建設の責任が、問われる。
そこで、社長の水谷は、恐しい計画を立てた。
列車事故で、死者が出る。その中に、三人の死者を、埋没させてしまうという計画である。
死んだ三人の郷里は、秋田二人と、山形一人だった。となると、事故を起こす列車は、東北へ向うものでなければならない。
ゴールデンウイークが迫っていた。三人の学生は、ゴールデンウイークには、郷里へ帰ると、他の連中に喋っ

ていたから、その間に走る列車ということになってくる。

もう一つ、必要なことがあった。それは、三人の死因が、溺死だということだった。単なる事故で、死者が出たのでは、その中に溺死体が、混ざっていては、おかしくなる。

問題の列車は、鉄橋から転落し、客車が、川に落ちる必要があった。

もちろん、水谷明は、こうした十津川たちの推理を、頭から、否定した。

「証拠がありますか？」

と、水谷は、いった。

三人の遺体は、すでに、家族によって、荼毘に附されてしまっている。

「東京周辺の冷凍倉庫を調べてくれ」

と、十津川は、部下に、いった。

三人の学生が溺死したのは、四月十二日である。そして、問題の臨時特急「あけぼの51号」が、転落したのは、五月三日深夜である。その間、放置しておけば、腐敗してしまう。それを防ぐために、大きな冷凍庫に、入れておいたに違いないと思ったからである。

十津川の推理は、適中した。

千葉市内の冷凍倉庫を、四月十二日に、借りた会社が見つかったのである。架空の食肉会社だった。

しかも、その会社は、五月三日の午後、十一トントラックでやって来て、冷凍倉庫に入れてあった木箱三つを、運んで行ったというのである。

その時、現われた男は、水谷建設の営業部長に、そっくりだった。

まず、営業部長が、逮捕され、社長の水谷明が、自供した。

十津川は、水谷明に、ききたいことがあった。

「なぜ、あなたは、永井不二子を使って、あんな予言をさせたんですか？」

「私にだって、良心というものがあるからですよ」

と、水谷は、神妙に、いった。

「どんなことです？」

「彼女の予言は適中する。彼女が、ああいう予言をすれば、あの列車の乗客は、少くなると思ったからです。私は、出来るだけ、犠牲は、少くしたかったんですよ。今更なんだといわれるかも知れませんがね。出来れば、五月三日の列車が、全部、動かないでくれれば良かった。そうなれば、私も、諦めて、工事の事故のことを公けにして、謝罪する気になったでしょうからね」

水谷は、大きな溜息をついた。

一瞬、十津川は、彼の言葉を信じかけた。が、すぐ、厳しい眼になって、相手を見すえた。

「嘘をいってはいけませんね。工事現場で事故があったのは、四月十二日だ。ゴールデンウイークの列車の切符は、ほとんど売れてしまっていた。だが、あなたは、どうしても、ゴールデンウイークの列車の切符を、三枚、手に入れる必要があった。それで、永井不二子に、あんな予言をさせたんだ。信じない人もいるが、気味悪く思う人もある。予言された五月三日の特急の切符は、買い控えるだろうし、キャンセルする人も出てくる。あなたは、それを狙ったんだ。少しでも、良心がある人間なら、あんな恐しいことを、最初から考えないよ」

最北端の犯罪

1

二年ぶりに、稚内へ来た。

やっと取れた三日間の休暇である。東京警視庁捜査一課の若い西本刑事は、こんな時、必ず、旅に出る。

ベテランの亀井刑事は、休暇が貰えたら、一日中、寝ていたいねというが、西本は若いだけに、じっとしていられなくて、カメラ片手に、旅に出てしまうのだ。

西本は、カメラ以外に、もう一つ、持って行くものがあった。

西本は、旅先にある金融機関で、千円を払い、通帳を作って貰うことにしていた。

その通帳は、すでに、二十冊を越えている。

二度目に、同じ場所へ行く時、西本は、通帳を持って行って、また、千円預金してくる。その日付けが、あとで、思い出の日付けになるわけである。

稚内は、二度目だったから、西本は、カメラと一緒に、札幌開発銀行の通帳を持って出かけた。

二年前の夏に、千円預金して、作って貰った通帳である。

駅前の食堂で、少しばかり遅い昼食をとってから、西本は、日本最北端の銀行へ出かけて行った。

「今日は」

と、西本は、笑顔で、銀行に入って行き、通帳に、千円札一枚を添えて、窓口に出した。

通帳へ記入されている間、西本は、壁にかかっているいろいろな掲示を眺めていた。

地方銀行も、都市銀行とのオン・ライン化がすすんでいるという。

もっとも、CDカードを作って貰っても、預金が、少くては、役に立たないだろう。

「西本さん」

と、窓口の行員に呼ばれた。

二十五、六歳の女の行員である。

「西本明さんですね？」

と、確認するように、西本を見た。
「そうです。西本明です」
「しばらくは、お下しになりませんか？」
「ええ。このままにしておきたいと思います」
たかが、二千円である。二年間の間に、前に入れた千円に利息がついているだろうが、そんなものは、たかが知れている。
西本が、照れながらいうと、相手は、ひどく熱心な口調で、
「もし、このまま置かれるのでしたら、ぜひ、定期にして頂きたいと思いますけど」
と、いい、定期預金のパンフレットをくれた。
西本は、相手が、からかっているのだろうと思いながらも、
「考えておきますよ」
と、いって、通帳をポケットに入れて、外へ出た。
海岸に向って歩いて行くと、さすがに、北海道も、北端の町だけに、風が、痛いような冷たさだった。
東京は、小春日和だったが、ここでは、もう、真冬のような寒さである。
二年前に来た時は、夏だったので、冬の稚内を見るのは初めてである。
港の防波堤には、かもめたちが、寒そうに、身体を寄せ合っている。今は、利尻、礼文行の船が出ているが、やがて、欠航するようなことになるのだろう。流氷の季節がやってくるからだ。その頃に、また来てみたいが、果して、休暇がとれるかどうかわからない。
その日、稚内に一泊したあと、西本は、翌日、網走から、知床に向った。
知床では、雪が舞っていた。すでに、斜里から先へ行くバスは、運行を止めていて、西本も、残念ながら、知床半島の縦断は、出来なかった。
網走に、二泊目の宿をとってから、三日目には、札幌から、東京への飛行機に乗っていた。
午後三時二〇分に、羽田着。まず、空港ロビーから、捜査一課に、電話を入れた。やはり、休暇中の事件のこ

とが、心配だったからである。
「安心しろ。これといった事件は、なかったよ」
と、電話に出た亀井刑事が、いった。
「これから、まっすぐ、家に帰りますから、何かあったら、電話して下さい」
「今日一日、休暇をとってるんだろう。こっちの心配なんかしないで、ゆっくり寝ろよ」
「とにかく、すぐ、帰ります」
西本は、それだけいって、電話を切ると、モノレールに乗った。
京王線の明大前近くの自宅マンションに着いたのは、五時近かった。
1DKの部屋である。ズボンのポケットから、キーを取り出したが、鍵穴にさし込んでから、錠が開いていることに気がついた。
あわてて、ドアを開けて、中へ入った。
「やられた！」
と、思った。
六畳の部屋が、めちゃめちゃに、引っくり返してあったからである。

2

翌日、警視庁に出勤すると、案の定、みんなに、からかわれた。
刑事が、空き巣に入られては、お笑いだというわけである。
「それで、何を盗られたんだ？」
と、亀井が、きいた。
「預金通帳が、二十一冊と、印鑑です」
西本が、いうと、亀井は、びっくりして、
「そんなに、預金してたのか？」
「違いますよ」
西本は、あわてて、預金通帳のいわれを、説明した。
「千円か二千円しか入っていませんから、全部で、せいぜい三万円前後です。それでも、私にとっては、大金で

すが」
「他に、盗られたものはないのか？」
「ありません。きっと、大金が預金してあると思って、盗んで行ったんでしょうが、今頃、呆れてますよ」
「君は、確か、東京オリンピックの時の記念銀貨を持っていたろう？」
「ええ。五枚、持っています」
「今、大変な値段になっているんだろう？」
「そうなんです」
「それは、大丈夫だったのか？」
「盗られていませんでした。きっと、泥棒は、値打ちを知らなかったんでしょう。助かりましたよ」
西本は、ほっとした顔で、いった。
その日、世田谷で、傷害事件があったが、簡単に、解決してしまった。
殺人事件が、一日の中に、二件も三件も起きることがあるかと思えば、不思議に、平穏な日もあるのだ。
西本は、北海道で撮ってきた写真の現像を、駅近くのDP屋に頼んでから、家に帰ったが、また、びっくりしてしまった。
昨日の今日だというのに、部屋の中が、空き巣に、引っかき廻されていたからである。
西本は、呆れると同時に、無性に、腹立たしくなってきた。
それに、刑事が、二日続けて、泥棒に入られたのでは、みっともないこともあった。
部屋を整理してみたが、盗られたものはなかった。オリンピック記念銀貨も、ちゃんとあった。
西本の住んでいるマンションは、七階建である。その五階に、西本の部屋がある。彼の部屋は1DKだが、3DKまで、広さは、いろいろである。泥棒は、なぜ、もっと広い部屋に入らなかったのだろう。
次の日、出勤すると、亀井も、「そりゃあ、おかしいな」と、いった。
「多分、同じ泥棒だろう。君は、何か、空き巣が欲しがるようなものを、持っているんじゃないのかね？」

「そんなものは、持っていませんよ。現金はないし、預金通帳だって、昨日、全部、盗られてしまいましたからね。高いものというと、例のオリンピック銀貨と、カメラですが、不思議なことに、どちらも、盗まれていないんです」
「そこが、おかしいよ」
と、亀井はいい、上司の十津川警部にも、西本のことを、話した。
「警部も、妙だと思われませんか？」
「思い当ることはないのかね？」
と、十津川が、西本に、きいた。
「全くありません」
西本は、正直に、いった。
「二回も、それも、続けて入られて、盗られたのは、千円ずつ、預金した通帳が、二十一通か」
「そうなんです。日本各地の金融機関で、作って貰った通帳ですが」
「犯人は、そんな通帳を集めているマニアなのかね？」
「そうは思いません。誰だって、その土地へ行って、銀行やなんかへ行き、お金を払えば、通帳は、作ってくれますから」
と、西本は、いった。
「しかし、二日間入られて、盗られたのは、その通帳だけなんだろう？」
「そうです。印鑑も、盗まれました」
「それなら、犯人は、おろす気で、盗んだことになる」
「そうですが、全部おろしても、三万円ぐらいのものです」
「よし。犯人が、おろしたかどうか、調べて貰おう」
と、十津川は、いった。
結果がわかったのは、午後になってからである。
西本明名義の通帳からは、一円も、引き出されていないという返事だった。
「犯人は、そのまま、通帳も、印鑑も、持っているんだ」
と、十津川は、西本と、亀井に、いった。

「すると、やはり、マニアということになりますか？」
亀井が、首をかしげて、十津川を見た。
「いや、マニアということは、ないと思うね。西本刑事もいうように、自分で旅行に行って、そこの金融機関で、通帳を、作って貰えばいいんだからね」
「では、もっと預金額が大きいと思って、犯人は、あわてて盗んで行ったということですかね。まさか、千円、二千円といった小額の預金通帳とは、思わなかったでしょうからね。あとで、がっかりして、おろしにも行かなかったんじゃありませんか。そんな小額の金をおろしに行って捕ったのでは、合わないと、思ってです」
「それは、わかるが、翌日も、同じ犯人らしいのが、西本刑事のマンションに忍び込んだのは、どういうことなのかね？」
「犯人の意地みたいなものじゃありませんか」
と、亀井が、いう。
十津川は、笑って、
「意地ねえ」
「折角、二十一通もの預金通帳を盗んだんです。百万単位の金額はあると思ったんじゃありませんか。それが、どの通帳にも、千円か二千円の金額しかのっていない。犯人にしてみれば、馬鹿にされたように感じたんじゃないでしょうか。それで、かっとして、もう一度、盗みに入ったんだと思うんですが」
「そうねえ」
と、十津川は、あいまいな表情になった。
どうも、亀井の考えに、賛成できなかったからである。
十津川は、自分が、空き巣の立場になって考えてみた。
西本刑事の部屋に忍び込む。そして、二十一通もある預金通帳を見つけた。
しかし、あわてて、印鑑と一緒に、持ち去ったといえるだろうか？
どのくらいの金額か、まず、調べるのではないだろうか？　それが、常識というものだろう。

一冊でも見て、千円か、二千円しか預金してなければ、他の通帳も、調べてみるのではないか。

と、いって、犯人が、そんな通帳と知っていながら、なぜ、持ち去ったかが、わからなくなってくる。

「君は、休暇をとって、稚内から、知床を廻って来たんだったね？」

十津川は、確認するように、西本に、きいた。

「そうです。稚内から、網走、知床と廻って、帰って来ました」

「そこでも、例によって、銀行へ、寄ったのかね？」

「ええ。寄りました。稚内と、網走の銀行に、寄って来ました」

「千円で、通帳を、作ったわけだね？」

「網走は、初めてなので、作って貰いましたが、稚内の方は、二度目なので、前の通帳に、また、千円預けました」

「その通帳も、盗まれたのかね？」

「いえ。その二通は、帰った翌日、ここへ持って来てしまったので、机の引出しに入っています。申しわけありません」

「いや、構わんさ。一つ聞きたいんだが、旅先の銀行で、通帳を作る際、住所は、どうするのかね？」

と、十津川が、きいた。

西本は、机の引出しを開けながら、

「僕は、いつも、東京の現住所にしています」

「それで、オーケイなのかね？」

「構わないそうですよ。他に、その土地の地名を書いてもいいんです」

西本は、二通の預金通帳を取り出して、十津川に、渡した。

「千円と、二千円で、恥しいんですが」

「思い出を作る方法としては、なかなか、素敵だよ」

十津川は、笑いながら、網走の通帳から、見ていった。

千円だけ、ちょこんと入っているのが、ユーモラスな感じである。

次に、稚内の分を見た。
「おい」
と、急に、十津川は、眉を寄せて、
「二千円だといったな？」
「利息がついていますから、二千円と、何十円かだと思いますが」
「見なかったのか？」
「見たって、仕方がありませんよ。百万、二百万の金額なら、見て楽しいでしょうが」
「いや、もっと多いぞ」
「警部は、僕を、からかってるんですか？」
「違う。三千万だ」
「え？」
「三千万と、二千七十八円になってる。君は、三千万円も、札幌開発銀行に、預金したのかね？」
「とんでもない！」
西本は、あわてて、十津川警部が渡してくれた自分の通帳を見た。
確かに、ゼロが、いくつも並んでいる。
西本は、「イチ、ジュウ、ヒャク、セン、マン、――」と、数えてみた。
間違いなく、三千万円である。
「これは、何かの間違いですよ」
西本は、十津川と、亀井に向って、首を振って見せた。
「どう思う？　カメさん」
十津川が、亀井を見た。
「多分、空き巣が続けて二回も入った理由が、これだと思いますね」
と、亀井は、いった。

3

「この三千万円は、今年の十月三十日に、振り込まれている」
と、十津川は、通帳を見ながら、いった。

「私が、稚内へ行く六日前です」
西本が、緊張した顔で、いった。
「西本明という名前は、そう特別な名前じゃない。札幌開発銀行稚内支店には、きっと、もう一人、西本明という人間が、口座を作っていたんだ。この三千万円は、きっと、もう一人の西本明に振り込まれたのが、間違って、君の口座へ、入ってしまったんだと思うね」
「そんなことがあるでしょうか？」
「番号が似かよっていて、三千万円を振り込んだ人間が、うっかり、間違えて書いたら、同姓同名の別の人間の口座に、入ってしまうだろう。それが、君の場合にも、起きたんだ」
「理屈としては、わかりますが、それなら、なぜ、稚内の支店から、何か、通知が来ないんでしょう？　電話番号は、わからなくても、住所は、書いて来ましたから、速達が、来るとか」
「稚内支店へ、電話してみたまえ」
と、十津川が、いった。
西本は、電話番号を調べて、ダイヤルを回した。
支店長が、出た。
「私は、十一月五日に、そちらで、千円預金した西本明です。東京の」
「ああ、連絡して下さるのを待っていたんですよ」
支店長は、ほっとした声を出した。
「実は、私の通帳に、三千万円もの金額が、記入されているんです。何かの間違いだろうと思って、お電話したんですが」
「そうなんですよ。実は、こちらに、同じ西本明という方が、口座を持っていらっしゃいまして――」
「そうだと思いました」
「三千万円は、東京中央銀行で、振り込まれたものでしてね。もう一人の西本明さんへのものなんです。番号も、似かよっていたので、間違えました」
「それで、もう一人の西本明さんは、どうしています？」
「実は、六日の午後、もう一人の西本さんが、三千万円

をおろしに見えたんですよ。しかし、こちらとしては、間違いかどうかわからないので、あなたに、連絡しようと思ったんです。あなたが、間違いだと、いって下されば、こちらに、三千万円を引き下しに来られた西本さんが、正しいことになります」

「しかし、連絡がありませんでしたね」

「そうなんです。もう一人の西本さんですが、丁度、東京に行くので、あなたと会って、事情を説明して、了解を得るといわれたんですよ。それで、電話して来られたんでしょう」

「まあ、そうなんですが」

「間違いとわかって、こちらも、ほっとしています。ただ、間違いでも、一度、そちらの通帳に記入してしまったので、それを、訂正しなければなりません。できれば、あなたの通帳を、こちらへ送って頂けませんか。もう一人の西本さんに、お預けになられても結構ですが。一番いいのは、お二人で、もう一度、こちらへ来て頂くことなんですが」

「もう一人の西本さん、住所は、わかりますか？」

「稚内市中央二丁目××番地です。ご一緒に来て頂けますか？　それとも、通帳を送って頂けますか？」

「もう一人の西本さんと、相談しますよ。ただ、三千万円という大金が、からんでいることなので、大事をとりたいと思います」

「わかります」

「ひょっとすると、ニセの西本さんが、私に、会いに来たのかも知れません。そちらの窓口に来たのは、どんな男の人か、教えてくれませんか」

と、西本は、いった。

「そうですね。年齢は三十七、八歳。身長は百七十センチ前後と思います。窓口の行員が、タレントのNに似ているといっていました。私も、そう思いましたよ。ただ、口元に、かなり大きなホクロがあって、お話をしていて気になりました。そちらへ行ったのも、同じ人ですか？」

「ええ。同じ人です」

4

西本は、首をかしげながら、電話の内容を、十津川や、亀井に、報告した。

「とにかく、間違いだったのは、わかりました」

「しかし、おかしいな」

と、十津川が、いった。

「もう一人の西本明の行動でしょう？」

と、亀井が、応じた。

「そうだよ。西本刑事のマンションに、忍び込んだのは、多分、この男だ。堂々と、会いに来ないで、なぜ、泥棒みたいに、忍び込んだのかが、問題だな」

「何か、匂いますね」

と、亀井が、いう。

「カメさんの鼻には、どんな風に、匂うんだ？」

「もう一人の西本明、面倒なので、Aとしますか。Aは、振り込まれた三千万円を受け取りに行って、もう一人の西本明の方に、それが入ってしまっているのを知って、驚いたに違いありません。しかし、手続きが、必要です。銀行では、西本刑事に、連絡をとるといったが、Aは、自分が東京へ行って、話をすると、いいました。そして、東京に来たが、話をする代りに、西本刑事のマンションに忍び込んだんです。何もなければ、そんなことはしません。明らかに、この男には、後暗いところがあると思いますね。それに――」

「問題の三千万円も、いわくのある金らしいね」

「そう思います。それと、Aは、西本が刑事だと知って、びっくりしたんじゃないですかね。これでは、会って、うまく話を持っていけないと考え、問題の通帳を、盗みに入ったんだと思いますね」

「犯罪の匂いのする金か」

と、十津川は、呟いてから、

「しかし、それだけじゃあ、どんな金か、どんな犯罪に関係しているかも、わからないな」

「どうしますか？」

「今日も、相手は、西本刑事のマンションに、忍び込むかも知れん。何しろ、三千万という大金が、からんでいるからね」

と、十津川は、いってから、西本と、清水の二人の刑事に、すぐ、西本のマンションへ行くように、いった。

「一人が部屋に入り、一人が、マンションの外で、見張るんだ。西本刑事が聞いたような人相の男が来たら、押さえて、連れて来たまえ」

5

二人の若い刑事が、出かけると、十津川は、改めて、考え込んだ。

亀井は、西本のいい残していった男の人相を、黒板に、書き止めた。

「警部。私は、三千万円は、何かの分け前じゃないかと思うんです」

と、亀井は、指につけたチョークの粉を、叩き落しながら、十津川に、いった。

「私も、今、同じことを、考えていたんだよ。現金を強奪したが、それを持って逃げるのは、危険だ。そこで、めいめい、どこかの金融機関に、口座を作っておき、中央から、振り込んだのではないかとね」

「そう思います」

「三千万円が、振り込まれたのは、確か、十月三十日だったね？」

「そうです」

「もし、現金強奪事件でもあったとすれば、その事件は三十日当日か、その前ということになるんだが――」

と、いいかけて、急に、十津川は、眼を光らせた。

「千葉市内で、現金強奪事件が、あったね？」

「確か十月二十九日の午後です。奪われた金額は、一億円で、犯人は三人でした。東京方面に逃げたことは、わかっていますが、いまだに、一人も逮捕されていません」

「三人で一億円なら、一人当り三千万円強で、一致する

ね」
「その三人の中に、これに該当する男がいたかどうかですね」
亀井は、黒板の文字に、眼をやった。
十津川は、事件のくわしいことを聞くために、千葉県警に、電話を入れた。
この事件を担当している浜田警部が、電話口に出てくれた。
二、三度、会ったことのある警部である。
その時は、いやに、せっかちな男だという印象を受けている。
「あの事件じゃ、とにかく、参っていますよ」
と、浜田は、いきなり、大声でいって、十津川を、苦笑させた。
「何か、手掛りが、見つかりましたか？」
十津川が、きいた。
「それが、全く、手掛りなしです。何しろ、襲われた銀行員の方が、犯人の顔を見ていないんですからね。背後から、いきなり殴られて、気絶している間に、一億円を奪われたんですよ」
「すると、犯人が、三人組だというのは、どうしてわかったんですか？」
「たまたま、近くを通りかかった主婦が、車に乗り込んで、東京方面に逃げる三人の男を目撃していたからなんです。ただ、彼女も、三人の後姿しか見ていないんですよ。午後三時という時間なのに、この主婦以外、一人の目撃者もなしです。本当に、参りました」
「実は、ちょっと面白いことがありましてね」
十津川は、こちらの奇妙な事件のことを話した。
浜田は、「うん、うん」と、小さく唸りながら聞いていたが、
「確かに、面白いですね。関係があるかも知れませんね」
「こちらの男は、身長百七十センチくらいで、年齢は三十七、八歳。タレントのNに似ているそうです。もし、こんな男が、そちらの捜査で浮んで来たら、教えて下さ

い」
と、十津川は、いった。
十津川が、次に電話したのは、北海道の稚内警察署である。
札幌開発銀行稚内支店で、西本明名義の通帳を作った男が、稚内市内の住所を書いていたからである。
稚内市中央二丁目××番地とである。そこに、誰か住んでいるのか、それとも、架空の所番地なのか、調べて貰うことにしたのである。
三時間ほどして、稚内署から、返事があった。
「問題の番地ですが、架空ではありませんでした。しかし、そこは、新生館という旅館でした」
と、稚内署の刑事が、いった。
「じゃあ、その旅館に、泊っていたのかな？」
「その通りです。十月二十一日に、西本明という男が、一泊しています。銀行に問い合せたところ、二十二日に、通帳を作っています」
「どんな客だったか、聞いてくれましたか？」
「まだ半月しかたっていないので、旅館の従業員は、この泊り客のことを、よく覚えていました。そちらのいわれた通り、三十七、八歳で、タレントのNによく似ていたといっています」
「西本明の名前で、泊っていたんですか？」
「そうです。宿泊者カードには、札幌の住所を書いてありますが、これは、でたらめでした」
「書いたのは、本人ですか？」
「そうです。あとで、そちらに、転送します」
「その他に、この男のことで、何か、わかったことは、ありませんか？」
「指紋が採れました」
「本当ですか？」
「この男は、将棋が好きで、帳場から、将棋盤を借りていき、ひとりで、詰将棋に熱中していたというのです。その後、誰も、その将棋盤や、駒には触れていないということなので、この男のものと思われる指紋が、駒からも、盤からも、鮮明に、検出できました。これも、転送

します」
「ありがたい。すぐ、送って下さい」
と、十津川は、いった。
稚内署から、問題の男の書いた宿泊者カードと、指紋が、電送されて来た。
指紋は、すぐ、警察庁に届けて、前科者カードと、照合して貰うことにした。
西本のマンションに出向いた二人の刑事からは、いっこうに、連絡がなかった。
犯人も、用心して、近づかないのだろう。
だが、三千万円は、欲しい筈である。となると、相手は、どう出てくるだろうか？
夜になっても、西本のマンションには、誰も、現われなかった。
「どうしたらいいですか？　部屋の電気をつけてもいいですか？　それとも、暗いままで、留守に見せかけておきますか？」
と、西本から、電話がかかってきた。
「明りをつけなくて、大丈夫かね？」
「自分の部屋だし、狭いですから、別に困りません」
「夕食は、とったのか？」
「菓子パンと、牛乳で、すませました。大丈夫、がんばれます」
「それでは、もう少し、粘ってみてくれ」
と、十津川は、いった。
指紋の照合の方は、期待した結果が出た。
前科者カードに、のっていたのである。
そのカードにあった名前は「南田豊」である。
年齢三十五歳。年齢より、老けて見えるのだ。
前科は三つ。傷害二件と、殺人未遂が一件である。
顔写真も、コピーして、送られて来た。
なるほど、タレントのNによく似ている。
一年前に、府中刑務所を出所したばかりだった。
すでに、午後八時を過ぎていたが、十津川は、府中刑務所に、電話をかけ、三年間、入っていた南田豊に、どんな面会人があったか、きいてみた。

夜にも拘らず、刑務所では、直ちに、書類を調べてくれた。
その結果、出所間近かになって、ひんぱんに面会に来た一人の女の名前を、教えてくれた。
鈴木まゆみ。年齢は三十歳だという。
「なかなかの美人でしたよ」
と、係官が、いった。
「南田の女ですか？」
十津川が、きいた。
「いや。最初、面会に来たとき、南田は、彼女を知らなかったみたいです。二人の会話から考えると、彼女は、南田の仲間の女のようです」
「その仲間が、直接、会いに来られないので、自分の女を、連絡に寄越していたということですか？」
「そう思います」
「鈴木まゆみというのは、本名ですか？」
「運転免許証で、確認しています。それから、今は、何をしているかわかりませんが、面会に来た頃は、新宿の『くじゃく』というクラブのホステスでした」
「こちらでも、当ってみましょう」
と、十津川は、いった。
電話を切ると、十津川は、亀井と二人で、新宿歌舞伎町の雑居ビルの中にあるクラブ「くじゃく」に、出かけた。
丁度、客の立て込む時間なのに、店の中は、がらんとしている。景気が悪そうだった。
二人は、小柄だが、抜け目のなさそうなマネージャーから、話を聞くことにした。
「鈴木まゆみさんなら、一ヵ月前まで、ここで、働いていましたよ。ここでは、本名のまゆみで、やっていましたが」
と、マネージャーは、十津川にいった。
「今、どこで、何をしているか、わかりませんか？」
十津川が、きく。
「さあねえ。やめたあとまで、連絡がある女の子というのは、少いですからね」

「じゃあ、彼女とつき合っていた男のことを、教えてくれませんか？　なかなか美人だったようだから、男がいたと思うんですがね」
「春ちゃん」
と、マネージャーは、三十二、三歳のホステスを呼んで、
「この娘が、彼女のことは、よく知っていますよ」
と、十津川たちに、紹介した。
春ちゃんは、鈴木まゆみと、同じマンションに、住んでいたという。
「よく、マンションの方へ、背の高い男が、遊びに来てたわ」
と、彼女は、いった。
亀井が、念のために、南田豊の写真を見せたが、違うと、いった。
「この人は、時々、お店の方に来てたわ。まゆみちゃんのことを、どうしてだか、ねえさんと呼んでたわね」
「背の高い男だが、名前は、わからないかな？」
亀井が、食いさがった。
「わからないわ」
「彼女は、その男のことを、何と呼んでいたね？」
「名前は、呼んでなかったわね。変な呼び方をしてたの」
「変な？」
「そうだ。先生って、呼んでたわ」
「先生って、学校の先生かね？」
亀井が、不審そうに、きいた。
春ちゃんは、笑って、
「まさか。あんな怖い顔をした先生なんかいるもんですか」
「じゃあ、なぜだ？」
「彼女に、聞いたことがあったわ。どうして、先生って、呼ぶのかって。そしたら、頭が切れるから、友だちが、みんな、彼のことを、先生って、呼ぶんですって。自慢してたわ」
「その男のモンタージュを作りたいので、協力して欲し

いんだがね」
と、亀井が、いった。

6

「先生」と呼ばれる男のモンタージュが、出来あがった。
「なるほど、怖い顔をしているねえ」
と、十津川は、感心したように、いった。
細面で、冷酷な感じの眼と、唇だった。
「どこかで見た顔ですよ」
亀井が、いった。
「しかし、うちで扱った事件の関係者なら、私も知っている筈だがね」
十津川が、首をかしげた。
「その通りです。捜査四課の部屋で、この男の写真を見たんだと思います」
「すぐ、照会してみよう」
十津川は、自分から、捜査四課へ足を運び、同期の花村警部に、モンタージュを見せた。
花村は、ひと眼見るなり、あっさりと、
「片山勇じゃないか。奴が、どうかしたのか？」
「どんな男なんだ？」
「一年前に解散したS組の幹部だった男さ」
「二十二、三人の小さな組だったんだろう？」
「そうだ。片山は、頭が切れて、S組じゃ、顧問格だった。S組が解散してからは、大人しくしていると、思っていたんだがね。片山が、何かやったのか？」
「まだ、はっきりしないんだ。わかったら、連絡するよ」
と、十津川は、いった。
これで、二人の名前が、わかったことになる。
片山勇と、南田豊。この二人に、もう一人が加わって、十月二十九日の午後三時、千葉市内の銀行脇で、銀行の車を襲い、一億円を強奪したのだろう。
朝になって、西本から連絡が入った。

「とうとう、現われませんでした」
と、西本が、疲れた声で、いった。
「向うも、用心したんだろう」
「どうしますか？」
「田中君たちをやるから、彼が、そちらへ着き次第、君は、出勤する恰好で、こちらへ来たまえ」
「田中刑事に、キーを渡しますか？」
「わからないように出来るなら、そうしてくれ。相手は、相手で、君のマンションを、見張っているかも知れん」
「わかりました」
と、西本は、いった。
田中と、日下の二人が、行き、西本と、清水の二人は、警視庁に、帰って来た。
二人とも、徹夜で、疲れ切っていたので、十津川は、毛布を持って来て、部屋の隅で、寝かせることにした。
若い二人は、すぐ、健康的ないびきを立てた。
「カメさんは、南田豊が、西本刑事のマンションに、また現われると、思うかね？」
十津川は、小声で、亀井に、きいた。
「そうですね。三千万円ですから、現われるんじゃないかと思いますが、南田が、片山に、相談したとすると、片山は、頭の切れる男だそうですから、止めるかも知れません」
「止めるかな？」
「西本君が、刑事であることは、もう、知っていると思われます。そうなると、片山は、止めるでしょうね」
「しかし、三千万だよ。そんな大金を、みすみす捨てるかね？」
「そこは、片山という男の考え方によると思います」
「しかし、彼が、止めろといっても、南田は承知しないんじゃないかね。自分の分け前が無くなるんだ」
「それを、片山が、どうやって、なだめるかだと思いますね。自分の分け前の中から、一千万ぐらい渡しておいて、次には、もっと大きな仕事をやって、取り戻そうとするんじゃないか。私は、それが、心配なんですが」

「そうだな。それがあったな」
十津川は、考え込んでしまった。
もっと大きな仕事を、もっと、派手にやられては、かなわない。
彼等は、一億円の現金を強奪したから、三千万円を失っても、あと、七千万円、持っている筈である。
それだけあれば、拳銃だって、ダイナマイトだって買うことが出来る。特に、片山は、元暴力団の幹部だったから、拳銃を手に入れるルートだって、知っているだろう。
「よし。午後二時に、記者会見をやる」
と、十津川は、いった。

7

記者たちは、妙な顔をして、午後二時に、集って来た。最近、事件らしい事件が起きてないのだから、当然だった。
そんな記者たちに向って、十津川は、にこにこ笑いながら、
「今日は、殺伐なことじゃなくて、楽しい話題を記者の皆さんに、提供しようと、思いましてね。実は、うちの西本刑事が、大金持ちに、なり損ねた話なんだ」
と、切り出した。
十津川は、西本の預金通帳を、記者たちに見せた。
西本自身も、空き巣のこととは離して、預金通帳のことを、話した。
「それで、どうするんですか？」
と、記者の一人が、きいた。
「札幌開発銀行では、稚内支店までこの通帳を持って来て欲しいと、いっているので、明日、北海道へ飛ぶ積りです。ちゃんとした手続きをとって、この三千万円は、正当な人に返しますよ」
西本は、神妙な顔で、答えた。
翌日の朝刊に、その記事がのった。
〈刑事さん、百万長者の夢〉

〈さすが刑事、三千万円を返す〉
そんな見出しだった。
もちろん、西本に、好意的に、書いてあった。
十津川と亀井は、ひと足早く、朝、八時一〇分の飛行機で、札幌に向った。
九時を過ぎてから、西本が、羽田を発った。万一、飛行機の中で襲われた時のことにそなえて、清水刑事も、一緒の飛行機に、乗ることにさせた。
稚内にも、十津川と、亀井が、先に着いた。
二人はすぐ、札幌開発銀行稚内支店に出かけ、支店長に会って、事情を説明した。
「うちの西本刑事が、間もなく、やって来て、通帳と、印鑑を渡します。西本明こと、南田豊は、そのあとから、やって来て、通帳の書きかえを求めると思います。その時、彼を逮捕したいと思っているんです」
「ただ、通帳の書きかえに来るだけの人間を、逮捕できるんですか？」
「南田は、出所後、ほとんど、まともな職についていません。それが、三千万円もの大金を手に入れた。まともな金の筈がありません。逮捕して、その点を、問い質すつもりでいます。きっと、ボロが出ると、信じています」
「そうだと、いいですが」
「南田は、きっと、何もわかっていない、自分が、逮捕される筈はないと信じて、ここに来ると思っているのです。それも、われわれにとっては、付け目なのですよ。彼が、ここに、現われるに違いないと思う点ですから」
と、十津川は、いった。
午後二時近くに、西本が、やって来た。
窓口に、通帳と印鑑を預けて、外へ行った。
あとは、南田豊が、現われるのを、待つだけである。
十津川と亀井は、支店長の了解を得て、内部にかくれ、西本と、清水の二人は、外で、見張ることになった。
「南田は、現われると、思いますか？」
じっと、入口に眼をやりながら、亀井が、きいた。

時々、二人、三人と、客が入って来る。その度に、二人は緊張するのだが、南田は、なかなか、現われなかった。

「必ず、現われるさ」

と、十津川は、自分に、いい聞かせる調子で、いった。

「もし、南田が、犯人でなかったらとは、お考えになりませんか？」

「大丈夫だよ。やましくなければ、西本刑事のマンションに、泥棒猫みたいに、忍び込んだりはしないさ」

と、十津川は、いった。

しかし、午後三時の閉まる時刻になっても南田は、姿を見せなかった。

「来ませんでしたね」

と、亀井が、いった。

「向うも、用心しているんだろう」

十津川は、疲れた顔で、いった。

二人は、そっと、銀行を抜け出すと、西本たちと、打ち合せておいた旅館に、入った。

西本と、清水も、十二、三分して、旅館にやって来た。

「雪になりました」

と、西本は、肩の雪を払いながら、十津川に、いった。

そういえば、暗くなってから、急に、冷え込んだ感じがする。

四人で、揃って、夕食をとった。

食事がすむと、十津川は、東京に電話をかけた。

向うで、調べてくれている田中刑事たちに、何かわかったか、聞くためである。

「どうやら、三人目の男が、浮び上って来ました」

と、田中が、いった。

「どんな男だ？」

「例の鈴木まゆみの弟です。名前は、鈴木明。二十四歳。チンピラです。どうやら、この男は、運転を受け持っていたと思われます」

「その男が、現金強奪に、加わったという証拠があるのかね？」
「確証はありませんが、鈴木明は、事件の前に、近く大金が入るから、奢ってやると、友人たちに、いって廻っていたそうです」
「現在どこにいるかわかるのかね？」
「わかりません」
「どんな男なんだ？　特徴のある顔かね？」
「丸顔で、口の大きな男です。高校時代、ボクシングをやっていたので、右の耳が変形しているそうです。身長は百六十五センチですから、今の若者にしては、小柄だと思います」
「わかった」
と、十津川は、いった。
翌日は、雪が降り続いた。
稚内の街は、家々の屋根も道路も、白一色に、染められていく。
今日は、西本と清水を、銀行の中に入れ、十津川と亀井は、外で、見張ることにした。
寒い。とにかく寒かった。
「こんな日は、来ないんじゃありませんか」
と、亀井が、いったときである。
「来たよ。しかも、二人連れだ」
十津川が、興奮した口調で、いった。
粉雪が舞う中を、二人の男が、傘一つで、歩いて来るのが見えた。
「南田ですね」
亀井も、興奮した顔になっている。
「もう一人は、鈴木明だよ」
と、十津川が、いった。
二人の男は、銀行の入口で、立ち止まり、周囲を見廻してから、中に入って行った。
十津川と、亀井も、物かげから出て、銀行の中に入って行った。
南田が、窓口に、自分の通帳を差し出していた。
鈴木明の方は、壁に寄りかかって、見守っている。

十津川が、南田に近づいた。
「南田さんだね。ちょっと、聞きたいことがあるので、署まで、来てくれませんか」
十津川が、声をかけた瞬間、相手は顔色を変え、脱兎のように、外へ飛び出した。
壁に寄りかかっていた鈴木も、反射的に、逃げ出した。
十津川と、亀井が、二人を追いかけた。西本と、清水の若い刑事たちも、必死で、追った。
南田が、雪に滑って転んだ。十津川と、亀井が、それをねじ伏せて、手錠をかけた。
鈴木明の方は、西本と清水が、二百メートル近く追いかけて行って、捕えた。
「何をするんだ！」
と、南田が、声をふるわせた。
十津川は、雪まみれになったコートを、はたきながら、
「逃げたのは、まずかったな」
と、南田に、いった。

特急「おき3号」殺人事件

1

最近の豪華な結婚式を見なれた眼には、簡素な式だった。

ハネムーンも、海外には行かず、九州を、三泊四日で、周遊旅行してくるという。

十津川は、五月二十日、この結婚式に立合い、一八時〇五分発の寝台特急「富士」に乗るという二人を、本多捜査一課長と、東京駅まで送って行った。

元警視庁の幹部で、現在、公安関係の政務次官をやっているOBの子息の結婚式だった。

時には、こんな、義理で出席しなければならないパーティもある。事件でも起きてくれれば、出席しなくてすむだろうと思っていたのだが、幸か不幸か、この日には、何の事件も起きなかった。

東京駅まで送ったのは、たまたま、警視庁への帰り道に当っていたからである。

「珍しく、簡素な結婚式だったじゃないか」

と、帰り道で、本多が、いった。

「そうですね」

「父親の山崎さんは、派手好きなのに、面白いよ」

と、本多は、笑った。そういえば、政務次官の山崎晋太郎は、芸能人に会ったりするのが好きだし、よく、問題発言をする人である。

今日、結婚したのは、その長男で、一流企業に就職したのだが、現在は、父親の秘書になっている。ゆくゆくは、政治家として、父親のあとを継ぐ気なのだろう。

新婦は、資産家の娘である。政界入りを狙う青年と、資産家の娘というのは、何となく、似合いのカップルの感じだった。

十津川も、祝辞を頼まれたのだが、それだけは、辞退した。パーティで、喋るのは、死ぬほど、嫌なのだ。

警視庁捜査一課に戻ると、亀井刑事が、「いかがでした？」と、きいた。

十津川は、

「思ったより簡素だったよ。スモークが焚かれたり、ゴンドラがおりてくることもなくてね。ただ、祝電が、総理大臣からも来ていたね」
「将来の総理大臣を夢見ているわけですか」
「多分ね。野心満々の青年に見えたよ」
と、十津川は、いった。
山崎徹。二十九歳。眉の太い、唇の薄い青年だった。意志が強く、どこか、酷薄な感じも受けた。
しかし、夜に入って、都内で殺人事件が起きたことで、十津川は、結婚式のことは、忘れてしまった。

2

山陰本線の特急「おき3号」は、米子から、小郡までを走る。
特急といっても、わずか四両編成の気動車で、グリーン車は、連結されていない。
東海道本線などを走る特急列車とは、感じが、違うのである。
「初夏の山陰路」の写真を撮っている写真家の石田友二は、鳥取、松江と、廻って来て、五月二十一日に、松江から、特急「おき3号」に乗った。
次は、出雲市で降りて、出雲大社の写真を撮るつもりである。
石田は、本当は、気ままな旅が好きだったから、今度のように、出版社に頼まれ、きちんと予定表に従っての旅行というのは、苦手である。
と、いっても、写真集の出版予定日が決っていては、自由勝手な旅行は、難しいだろう。
特急「おき3号」は、松江発九時五四分で、出雲市には、一〇時二三分着である。
四両の中、二両が指定、残り二両が自由席である。
ゴールデンウイークが終ったウイークデイということもあって、車内は、がらがらだった。
向い合って、指定席に腰をすえ、同行している出版社の若い井上が、さっそく、手帳を広げて、

「出雲に着いたら、すぐ、ハイヤーを調達します。それで、出雲大社から、日御碕へ廻りましょう。ウミネコのいる経島なんかも、題材として、面白いと思っているんですが」

と、いう。

石田は、首をすくめて、

「ねえ、君。カメラの対象ぐらい、ボクに選ばせて欲しいね」

「それは、よくわかっています。ただ、僕としては、先生の参考になればと思いまして、いろいろと、調べているんですが」

「これと決めないで行って、ボクは、驚きを持ちたいんだよ。驚きがないと、いい写真は撮れないんだ」

「はい。わかっています」

と、いったが、本当に、わかっているかどうか、心もとない。

列車は、日本海に沿って走り続ける。

暗く、寒い日本海も、今は、明るく、優しい海に変っていた。

玉造温泉で、停まる。

「今度、ゆっくりと、先生と一緒に、温泉に来たいですね」

と、井上は、勝手なことをいっている。

玉造温泉を出ると、次は、出雲市である。

井上は、ふと、腕時計を見て、

「あと、五分で、出雲市です」

「ちょっと、トイレに行ってくる」

と、石田は、いって、席を立った。

五十歳を過ぎてから、やたらに、トイレが近くなった。

医者にきくと、どうも精神的なものらしいのだが、講演の時とか、列車に乗った時など、やたらに、行きたくなってくる。

行かないと、不安なのである。

トイレをすませ、反対側の洗面所で、手を洗っていると、

「――さん？」
と、声をかけられた。
え？　という感じで振り向いた。若い男が立っていたが、
「あッ、失礼。人違いでした」
「ああ」
と、肯いて、もう一度、手を洗おうとした時、いきなり、背中を、ナイフで、刺された。
「何をする！」
と、怒鳴った。が、更に、一突きされて、石田は、眼の前が暗くなり、その場に、崩折れた。

3

一〇時二三分。特急「おき3号」は、出雲市駅に着いた。
K出版の井上は、荷物を持って、通路で、うろうろしていた。
「どうしたんだろう？」
と、呟やいてから、トイレのところまで、歩いて行った。
トイレも、反対側の洗面所も、ドアが閉っているので、のぞくわけにもいかない。
「先生！　石田先生！」
と、大声で、呼んでみた。
出雲市には、二分停車である。気が気ではなかった。
（年齢だからな。トイレの中で、心臓発作でも、起こしているんじゃないだろうか？）
そんな心配も、起きてくる。
「どうされたんですか？」
通りかかった車掌が、きいた。
井上は、事情を説明した。
「中で倒れているんじゃないかと、それが、心配なんですよ」
「トイレは、誰も入ってないですがね」
と、車掌はいい、無造作に、ドアを開けた。

車掌がいったように、中は、空だった。
車掌は、次に、反対側の洗面所のドアを開けた。
「あッ」
と、叫んだのは、井上だった。
車掌も、顔色を変えている。
床に石田が倒れていて、背中から流れた血が、床を、赤く染めていた。
夏用のブルゾンの背中には、ナイフが、突き刺さったままである。
「先生！」
と、井上が叫んだが、反応はなかった。
車掌は、ホームに飛びおりると、そこにいた助役を呼んだ。
発車時刻が来ていたが、それを、遅らせて、公安官が二人、列車に乗り込んできた。
すでに、死亡していると思われたが、駅では、救急車を呼んだ。
毛布が持ち出され、血だらけの石田の身体を包み、ホームにおろした。
編集者の井上も、荷物を担いで、救急車に同乗することになった。
救急車は、サイレンの音をひびかせて、出雲市駅から、近くの救急病院へ急いだ。
七分後に、病院に着いた。が、石田は、すでに、死亡していた。
出雲市警察署から、刑事二人が、病院に飛んで来た。
ナイフを使った殺人事件ということだったからである。
おかげで、石田に同行していた井上は、その刑事たちの質問ぜめにあった。
石田は、ズボンの尻ポケットに、二十万円も入った財布を突っ込んでいたのに、それが盗まれていなかったことから見て、物盗りの犯行ではなく、怨恨による殺人と見られたからである。
正直にいって、井上は、石田と組んでの仕事は、今度が初めてだった。
風景写真では、有名な人だとは知っていたが、性格

や、生き方は、知らなかった。
家庭のことも、よくわからない。三年前に妻に先立たれて、現在、やもめ暮しというのも、今度の撮影行の出発間際に、編集長に教えられたのである。
だから、刑事に、石田のことを、あれこれ質問されて、困ってしまった。
「何も知らんのですか」
と、刑事にいわれても、井上は、当惑するだけである。
殺されたことで、思い当ることはないかときかれると、なおさら、返事に困ってしまった。
仕方がないので、井上は、警察から、東京の中村編集長に、電話をかけた。
中村は、身体が大きくて、物に動じないことから、大人と呼ばれていたが、さすがに、その中村も、驚いたらしく、
「信じられないよ。石田さんが、殺されたなんて。他人に恨まれるような方じゃないんだ」
「僕も、あれこれ、警察にきかれて、困っているんですよ。誰か、石田さんのことを、よく知っている人を、至急、こっちへ寄越してくれませんか」
「娘さんに、すぐ知らせるよ」
「娘さんが、いるんですか？」
「ファッション・デザイナーをやってる娘さんがいるんだ。そちらへ、すぐ行くように、連絡しておく」
と、中村は、いった。

4

同じ日の一四時五九分（午後二時五十九分）に、寝台特急「富士」は、終点の宮崎に、到着した。
駅のホームにも、南国の明るい太陽の光が、射し込んでいる。
宮崎で降りた乗客は、さほど多くなかったが、その中に、新婚らしいカップルが、三組もいるのは、やはり、宮崎なのだろう。

山崎徹も、新妻のはるかの肩を抱くようにして、ホームに降り立った。
改札口を出ると、きちんと背広を着た中年の男が、近づいて来て、
「山崎様ご夫妻で、ございますね？」
と、声をかけて来た。
「そうですが？」
と山崎がいう。
「山崎先生から、お電話がありまして、息子夫婦が、ブルートレインの『富士』で、ハネムーンに行くので、よろしくといわれましたので、お迎えにあがったんです」
「おやじが。困るな」
「申しおくれましたが、私は、Nホテル支配人の松本でございます。山崎先生には、ひとかたならぬお世話になっております」
男は、丁寧にいい、名刺を、山崎に渡した。
山崎は、肩書きつきのその名刺を、はるかにも見せてから、
「おやじのお知り合いですか」
「とにかく、車にお乗り下さい。お荷物は、お持ちします」
と、松本は、二人の荷物を、奪い取るようにして、待たせてある車に、案内した。
白いベンツである。
二人を乗せて、走り出すと、
「東京から、宮崎までは、お疲れになったでしょう？」
と、松本は、助手席から、きいた。
「個室寝台で、ゆっくり寝たから、疲れていませんよ」
「ああ、『富士』には、個室寝台がございましたね。私も、利用したことが、ございますが、お二人では、ちょっと、不便じゃございませんか？」
「二室借りました。本当は、一室に、二人がいてはいけないんだそうですが、私たちは、新婚ということで、車掌さんも、二人一緒にいても、見て見ぬふりをしてくれましたよ」

と、山崎は、微笑した。
「国鉄も、そのくらいのサービスは、してくれませんとね」
と、松本は、いってから、
「私どものホテルでは、お二人のために、スイートルームを、用意させて頂きました。山崎先生が、おいでになった時も、同じ部屋でございます」
「おやじも、旅行好きなんだな」
「立派な先生で、ございますよ」
と、松本は、いってから、新妻のはるかにも、万遍(まんべん)なく気を配って、
「奥さまは、お疲れじゃございませんか？」
と、声をかけた。
はるかは、明るい笑顔で、
「私も、朝は弱いんですけど、お昼過ぎまでゆっくり寝て来ましたから」
「ずっと一緒にいたかったんだけど、狭苦しいからといって、追い出されてね。あのあと、彼女は、ゆっくり眠ったんじゃないのかな」
と、山崎が、笑いながら、いう。
「追い出したなんて。あなたの方が、眠りたいからって、自分の部屋に帰ったんだわ」
「まあ、まあ」
と、松本は、手で、なだめるようにしてから、
「ブルートレインの個室寝台は、ちょっと、狭過ぎますね。あれでは、一人でも、息がつまりますよ」
「もっと広くするか、アベック用のコンパートメントを作れって、投書してみるかな」
山崎は、はしゃいだ口調で、そんなことを、いった。
ホテルに着くと、新妻のはるかは、家に電話をかけて、宮崎に着いたことを知らせた。
一五時一三分になっていた。

5

東京警視庁では、島根県警からの捜査協力の要請を受

けた。
特急「おき3号」の車内で殺された写真家石田友二の交友関係の捜査である。
「彼の写真は、好きですよ」
と、亀井刑事が、十津川に、いった。
「風景写真が、有名だったね」
「私は、彼の富士山の写真集を持っていますが、これは、何度見ても、あきませんね。素晴らしい労作です」
「どこかで、それを、見たような気がするよ」
「彼の富士山の写真は、有名ですから」
「それなら、カメさんに、この捜査は、頼もうか」
と、十津川は、いった。
「あんな芸術家が、なぜ殺されたんですかね」
亀井は、わからないというように、首を振りながら、若い西本刑事を連れて、出かけて行った。
亀井たちは午後六時を過ぎて、帰って来た。
亀井は、元気がなかった。
「いくら調べても、石田を殺したい人間は、見つかりませんね」
と、亀井は、いう。
「そんなに立派な人間だったのかね？」
「修身の教科書みたいな人間じゃありませんが、写真一筋で、他の欲がなかったんですよ。いい家に住みたいとか、金儲けをしようといった気はなかったので、そうした面で、衝突することがなかったようです」
「しかし、写真のライバルは、いたわけだろう？」
「何人かいました」
「そのライバルが、石田友二を殺す可能性はないのかね？」
「それぞれ、みな有名になっていますし、経済的には、石田友二より恵まれているんです。いい家に住み、弟子を持ち、大家になっています。その中では、石田友二が一番、経済的には、恵まれていないし、弟子もいません。ライバル意識から、石田を殺すとは、思えませんね」
「しかし、わからないところで、激しいライバル意識を

燃やしているかも知れないよ」
「そう思ったので、主なライバルの写真家について、西本君が、アリバイを、調べました」
と、亀井は、いった。
西本刑事が、手帳を広げて、
「実は、今日の午後一時から、帝国ホテルで、梶岡晴記という有名な写真家の喜寿を祝うパーティが開かれたんです。このパーティに、問題のライバルと思われる写真家が、全員出席しています。受付をやった人にきくと、全員、午後一時には、顔を見せたというのです」
「石田が殺されたのは、何時だったかね？」
「特急『おき3号』が、出雲市に着く直前ですから、午前十時二十分頃と思います」
「殺したあと、東京に飛んで、午後一時のパーティに出席は出来ないかね？」
「特急『おき3号』は、一〇時二三分に、出雲市に着きます。犯人は、ここで、列車からおりて逃げたと思われます。新幹線を使って、東京に帰るのは、大阪からでも、三時間かかりますから、間に合いません」
「すると、飛行機か？」
「そうなんですが、これが、駄目なんです。出雲―東京間は、飛行機が、飛んでいますが、出雲発は、一〇時〇〇分と、一九時〇〇分の二本しかないのです」
「すると、同じ写真家に、容疑者はなしか」
「そうです」
「石田は、経済的には、どうだったんだ？　借金は、してなかったのかね」
と、十津川は、きいた。
「借金はありません」
と、亀井が、答える。
「しかし、金儲けの気はなかったんだろう？」
「そうなんです。しかし、借金もありません。小さいが、自宅があり、そこに、秋田犬と暮しています」
「一人暮しか？」
「奥さんは、三年前に亡くなっています。二十七歳の娘さんがいて、彼女は、ファッション・デザイナーとし

て、働いています。私はわかりませんが、かなり、有名だそうです」
「一緒には、暮していないんだね？」
「娘さんは、マンション暮しです。まだ、結婚はしていません」
「逆に、石田が、誰かに、金を貸していて、その返済を迫っていたということはないのかね？」
「それも、ないようですね。貸した金を、請求できるほど、気が強くないし、貸すくらいなら、やってしまうという性格だったということです」
「敵がいないということか」
「そうなんです。性格の良さもありますし、彼を殺して奪いたくなるほどの財産は、持っていない。仕事一筋だが、憎らしくなるほどの強烈なものはない。友人は一杯いるんですが、悪口が聞こえて来ないんです」
「しかし、石田は、どこかで、敵を作っていたんだ」
と、十津川は、いった。

6

出雲市警察署には、被害者石田友二の一人娘、ゆう子が、一八時二五分着の飛行機で、駈け付けた。
空港から、出雲市内まで、車で、二十四、五分かかるので、彼女が、警察に着いたのは、午後七時少し前である。
しっかりした、気の強そうな女に見えたが、父親の遺体を見ると、突然激しく、泣き出した。
今度の事件を担当した島根県警の三浦警部は、ゆう子が、落ち着くのを待って、
「われわれは、ぜひ、お父さんを殺した犯人を捕えたいのです」
と、話しかけた。
「はい」
と、ゆう子が、肯いた。
「東京警視庁で、お父さんの交友関係を調べて貰いまし

たが、殺すほど、お父さんを恨んでいる人間は、見つからないという回答なのです」
「父は、人に好かれていましたから」
「そのようですね。しかし、誰かが、お父さんを、殺したんです。それも、車中で殺したということは、たまたま、出会って、口論となって、殺したということではないと思います。同行した出版社の人の話では、トイレに立ってすぐ、殺されているからです。多分、犯人は、お父さんを殺す目的で、特急『おき3号』に乗り込んで来て、チャンスを見て、お父さんを殺したんですよ」
「犯人は、それほど、父を憎んでいたということですか？」
ゆう子は、青白い顔で、いった。
「そうなりますね」
「しかし、父は――」
「そうなんです。写真一筋で、人に憎まれることのなかった方というのは、わかっています。しかし、人間というのは、どんなことで、人の恨みを買うかも知れません。例えば、お父さん自身のことではなくて、家族のことでということも、考えられます」
三浦が、いった時、ゆう子の表情が動いた。
三浦は、それを、見逃がさずに、
「何か、思い当ることが、おありのようですね？」
「いいえ。そんなものは、ありませんわ」
「本当にありませんか？」
「ええ。ありません」
ゆう子は、堅い表情で、否定した。
だが、三浦は、何かあると思った。ゆう子から離れると、三浦は、東京警視庁に、電話をかけた。

7

警視庁捜査一課では、十津川が、亀井を呼んで、
「申しわけないが、もう一度、石田友二のことを、調べてくれないか」
と、いった。

「何か、向うから、いって来ましたか？」
「島根県警では、殺された原因が、石田本人ではなく、一人娘の石田ゆう子に、あるのではないかと、いって来たんだよ」
「なるほど、家族ですか」
「一人娘で、可愛がっていたと思うから、優しい男でも、娘のためには、カッとすることも、あり得るだろうからね」
「私も、あり得ると思います」
「娘の名前は、石田ゆう子で、現在、ファッション・デザイナーだ。住所は、ここだよ」
と、十津川は、メモを渡した。
亀井は、翌朝、早く、西本刑事を連れて、調べに出かけて行った。
昼近くになって、二人は、帰って来た。
亀井は、入手した石田ゆう子の写真を、十津川に、見せた。
父親の石田友二と、並んでいる写真だった。
「よく似た親娘だね」
と、十津川は、微笑した。
親娘だから、顔立ちが似ているのは当然だが、それにしても、よく似ている。雰囲気も似ているのだ。
「そうでしょう。なかなかの美人ですよ」
「性格も、似ているのかな？」
「そうらしいですね。頭はいいんですが、そのくせ、簡単に、欺されるという性格のようです」
と、亀井は、いう。
そのくせ、肝心の報告は、いっこうに、口にしようとしないのだ。
（カメさんらしくないな）
と、思いながら、
「それで、何か、わかったのかね？」
「わかったんですが、実は、弱ったことになりました」
「どうしたんだ？」
「思った通り、どうやら、今度の事件の原因は、被害者の娘さんに、あるらしいんです」

「それなら、良かったじゃないか、容疑者が浮んで来ないのかね？」
「一人、浮んで来ました」
「どんな奴なんだ？」
「まずいことに、山崎徹という名前が、浮んで来たんです」
「山崎徹？」
と、十津川は、おうむ返しにいってから、さすがに、当惑した表情で、
「山崎晋太郎さんの息子のかね？」
「そうです。警部と、課長が、出席された結婚式の主です」
「それ、間違いないんだろうね？」
「残念ながら、間違いありません」
「くわしく、話してくれないか」
と、十津川は、いった。
「問題の石田ゆう子ですが、才能のあるデザイナーです。ところが、すれていなかったというのか、異性関係になれていなかったというのか、ある日、近づいて来たスマートな男に、夢中になってしまったわけです」
「それが山崎徹というわけか」
「そうです。山崎は、どうも、大学時代から、プレイボーイだったようですね。彼の方は、たまたま、あるパーティで出会った石田ゆう子を見て、引っかけたというだけのことだったわけです」
「うん」
「山崎は、野心家です。結婚も、その野心を達成するための手段と考えるような男ですからね。資産家の娘でもない石田ゆう子と、結婚する意志は、最初から、なかったわけですよ」
「それで？」
「しかし、石田ゆう子の方は夢中になってしまったんです。これは、伝聞で、確証はないんですが、どうも、彼女は、妊娠して、おろしたことも、あったようです」
「うん」
「そのあと、彼女は、自殺を図りました」

「いやな話だな」
「それを知って、父親の石田は、激高しました。銀座のクラブで、山崎が飲んでいるところに乗り込んで行って、激しく、彼を面罵して、殴りつけました。その場に居合せたホステスの一人に、彼女のマンションで会って、話を聞きましたが、石田友二の怒りは、すごいものだったそうです。殺してやるとまで、いったので、さすがの山崎も、真っ青になっていたようです」
「それは、いつのことなんだ？」
「今から、約二ヵ月前です」
「それを、逆恨みして、山崎が、石田友二を殺したか？」
「山崎というのは、自尊心のかたまりみたいな男で、それが傷つけられると、いつまでも覚えていて、仕返しをするということです」
「山崎の他に、容疑者は、いないのかね？」
「ええ、山崎徹だけです」
「参ったね」
「しかし、警部。山崎徹は、現在、ハネムーンで、九州に行っているわけでしょう。それなら、犯人じゃありませんよ」
と、亀井は、なぐさめるように、いった。
「それは、そうなんだがね」
十津川は、ぶぜんとした顔で、いった。
山崎には、アリバイがあるかも知れない。しかし、一応、調べなければならないだろう。
本多課長の困惑が、眼に見えるような気がする。
政務次官の山崎晋太郎は、もっと、困惑し、怒り出すかも知れない。
それでも、このままにしておくわけにはいかないので、十津川は、まず、本多課長に、話をした。
案の定、本多は、「うーん」と、唸った。
「どうしても、山崎徹を、調べなければ、ならないのかね？」
「容疑者は、今のところ、彼一人です」
「しかし、彼は、今、九州に、ハネムーンに行ってるん

だろう？　私と君で、東京駅へ送って行ったじゃないか」
「そうです」
「それなら、アリバイありじゃないか。ハネムーン中に、山陰に廻って、人殺しなんか出来ないんじゃないかね」
「まず、不可能だと思います」
「石田友二が、殺されたのは、二十一日の特急『おき3号』の中だったね」
「その通りです」
「ちょっと、待ちたまえ」
と、いって、本多は、棚から、時刻表を取り出して、机の上に広げた。
「特急『おき3号』が、出雲市に着く直前に、殺された？」
「一〇時二三分、出雲市着ですから、殺されたのは、十時二十分頃です」
「その時刻に、山崎徹は、どの辺に、いたのかね？」
「当然、ブルートレイン『富士』の中です。『富士』は、一〇時〇八分に、中津を出発し、次の宇佐は、一〇時二七分ですから、その間を走っている筈です」
「九州の国東半島近くを走っている頃だな」
と、本多は、時刻表の地図を見ながらいい、
「これでも、駄目かね？」
「その時、本当に、『富士』に乗っていたという証拠が、必要です」
「本人や、花嫁に、いろいろと、質問しなければならないんだろう？」
「そうなりますね」
「山崎さんが、息子を、犯人扱いにしたといって、怒るかも知れんね」
「その恐れは、ありますが、山崎さんも、警察のOBですから、わかって貰えると思います。事件が起きれば、関係者から、事情を聞くのが、当然だと」
「そうだな」
と、本多も、いった。

「アリバイが成立すれば、問題はないわけですから」
「それで、どうやるね？」
「所轄は、島根県警ですから、まず、向うと、相談します。現時点で、山崎徹のことを調べるとなると、現在、九州を旅行中ですから、九州の県警とも、相談しなければならないと思いますね」
「じゃあ、君が、島根県警へ、直接行って話してくれないか。山崎さんは、警視庁のOBだからね。電話だけで、変な誤解を招くと、いけない」
「わかりました。私が、行って来ます」
と、十津川は、いった。

8

五月二十三日、朝七時五五分発の飛行機で、十津川は、出雲に、発った。
東京―出雲間の航空便は、早朝のこの便の他は、一六時五五分しかなかったからである。
出雲空港には、九時二五分に、着いた。
D―9から降りて、空港ロビーに入って行くと、電話しておいたので、島根県警の三浦警部が、迎えに来てくれていた。
「何か、面倒なことのようですね」
と、三浦は、捜査本部に行く車の中で、十津川に、いった。
十津川は、なるべく、冷静に、事情を説明した。
「山崎晋太郎さんなら、よく知っています。あの方の息子さんですか」
と、三浦も、難しい顔になった。
「簡単に、アリバイが成立してくれるといいんですがね」
「動機の問題もありますね。女癖の悪さがマスコミに洩れるのも、まずいですね」
「しかし、山崎徹というのも、ひどい男ですよ」
「そうですね。石田ゆう子さんが、口をつぐんでしまった理由も、わかりますね」

「彼女は、まだ、出雲市にいるんですか？」
「石田さんの遺体は、解剖があったりして、今日の午後、娘さんに、引き渡すので、まだ、市内のホテルに、泊っていますよ」
「そうですか」
と、だけ、十津川は、いった。
問題が、こじれてくれば、石田ゆう子にも会って、古傷に触れるような質問をしなければならなくなるかも知れない。
二十五分ほどで、捜査本部になっている出雲市警察署に着いた。
十津川は、本部長の署長にも会い、事情を説明した。
そのあとで、三浦と、具体的な捜査方法について、相談した。
「今、山崎夫婦が、どこにいるか、わかりますか？」
と、三浦が、きいた。
「二人は、五月二十日に、ブルートレインの『富士』で出発しました。三泊四日で、九州を廻るといっていましたから、今日中に、東京へ帰ってくると、思いますね」
「すると、山崎徹に対する訊問は、東京でということになりそうですね」
「或いは、東京に帰る飛行機の中でということでしょうね。帰りは、福岡から、飛行機を使うと、いっていましたから」
「しかし、飛行機の中でというと、奥さんも一緒ということになってしまいますね」
と、三浦は、いった。
確かに、ハネムーンの途中での訊問というのは、不粋だろう。
結局、二十四日に、東京で、三浦警部が、山崎徹に会うことにし、それには、十津川が、同席することになった。
翌日、二人は、飛行機で、東京に飛び、その足で、議員会館に、廻った。
ハネムーンから帰った山崎は、二十四日には、父親の秘書として、議員会館に、出ていると聞いたからであ

る。
山崎徹には、近くの喫茶店であった。
「結婚式には、出席して頂いて、ありがとうございます」
と、山崎は、十津川に、礼をいってから、
「今日は、何のご用ですか？」
「それは、私が、説明します」
と、三浦が、いった。彼が名刺を渡すと、山崎は、
「ほう、島根ですか」と、感心したように、いった。
「それで、島根県警が、僕に、何の用ですか？」
「五月二十一日に、山陰本線を走る特急『おき3号』の車内で、写真家の石田友二さんが、殺されました。石田さんは、ご存知ですね？」
「名前は、知っていますよ。有名な写真家ですからね」
「石田さんに、銀座のクラブで、殴られたことが、ありますね？」
「さあ。酔うと、いろいろありますからね」
と、山崎は、はぐらかすように、笑った。
「それで、あなたのアリバイを、お聞きしたいんですが」
「僕のアリバイって、僕が、疑われているんですか？」
「少しでも、被害者と関係のあった人は、全部、調べているんですよ」
「参ったな。僕は、十津川さんも、ご存知のように、五月二十日が、結婚式で、その日の夕方、ブルートレインの『富士』で、ハネムーンに、出かけているんです。二十一日も、列車の中ですよ。殺せる筈がないじゃありませんか」
山崎は、肩をすくめた。
「東京駅で、『富士』に乗ったのは、十津川さんが見ています。終点の宮崎でおりるのを、誰か、見ていますか？」
と、三浦が、きいた。
「宮崎ですか？」
と、山崎は、きき返してから、
「ああ、Nホテルの松本という支配人が、駅に、迎えに

来てくれていましたよ。おやじが、電話しておいたらしいんです。これが、その支配人の名刺です」
と、いい、ポケットから、一枚の名刺を出して、三浦に、渡した。
「これを、お借りしていいですか？」
「どうぞ、どうぞ、電話して、きいてみて下さい」
「列車の中では、誰かに、会いましたか？」
「車掌には、会っていますよ。個室寝台でしたから、他の乗客と顔を合せることは、ありませんでしたがね」
「そうですか」
「僕は、何もしていませんよ。ずっと、家内と一緒だったんだから」
と、山崎は、いった。
山崎と別れると、三浦が、宮崎のNホテルに、電話をかけた。
電話がすむと、三浦は、十津川に向って、
「事実でしたよ。松本という支配人は、間違いなく、五月二十一日に、宮崎駅に、迎えに行ったといっています。『富士』が、宮崎に着くのは、一四時五九分で、五分前に、着いて、改札口のところで、待っていたそうです」
「出発と、到着の時は、『富士』に、乗っていたことが、確認されたわけですか」
「あとは、東京―宮崎の間ですね」
「どうします？」
「その列車に乗務していた車掌に、会ってみたいですね」
二人は、東京駅に行き、丁度、上りの「富士」で引き返して来た専務車掌に会った。
五月二十日東京発の「富士」に、乗務していた専務車掌である。
今村という五十四歳の車掌だった。
十津川が、山崎徹と、新妻のはるかの並んだ写真を、今村車掌に見せた。
「五月二十日の『富士』に、乗ったカップルですが、覚えていますか？」

と、三浦が、きいた。
今村は、写真を見て、すぐ、
「ああ、覚えていますよ。個室寝台にいた方ですね。確か、7号室、8号室でした」
と、はっきり、いった。
「二人は、東京から、終点の宮崎まで行ったわけですが、ずっと乗っていましたかね？」
「ご質問の意味が、よくわかりませんが」
「東京で、乗ったのと、宮崎で降りたのは、確認されています。問題は、その間なんですよ。その間、この男の乗客の方が、果して、ずっと、『富士』に乗っていたのかどうか、それが知りたいんですがね」
三浦がいうと、今村車掌は、当惑した顔になって、
「そういわれましても、ずっと、お客様を、見張っているわけじゃありませんので」
「車掌室は、どこにあるんですか？」
「私がいた乗務員室は、個室寝台の1号車に、ついているんです」
今村は、三浦の差し出した手帳に、1号車の図を描いて見せた。
通路に面して、十四の個室が並んでいる。それが、いわば、客室で、通路のドアを開けると、デッキである。乗務員室は、そのデッキについている。
「ですから、乗務員室にいると、客室のことは、わかりません。それに、個室は、ドアが閉りますから、中が、見えないんです」
と、今村車掌は、いった。
「車内検札の時には、彼等に、会ったでしょう？」
「ええ。『富士』の東京発は、一八時〇五分で、まだ、寝るには早いですから、お客様は、たいてい通路に出て、外の景色を見たり、食堂車へ行ったりされています。その時に、車内検札をしたので、はっきり、覚えています」
「そのあと、二人を見たのは、何時頃ですか？」
「十一時半頃でした」
「夜中の？」

「はい」
「もうみんな寝ている時間じゃないですか？」
「そうです。十一時に、お休みなさいの車内放送をしますから」
「なぜ、そんな時間に、二人に会ったんですか？」
「男の方が、寝巻姿で、乗務員室を、ノックされたんですよ」
「彼は、何の用だったんですか？」
十津川がきくと、今村車掌は、いかにも、人の好さそうな笑顔になって、
「それが、新婚さんらしい質問だったんですよ。個室寝台は、あくまで、一人用です。それで、もうしばらく、彼女の部屋にいてもいいかという質問だったんです」
「それで、何と、返事をしたんですか？」
「個室に二人入っていることは、許されていませんが、お客様は、ちゃんと、二室分の切符を買っているし、新婚さんらしいので、大目に見ますと、ご返事をしました」
「彼は、何といいました？」
「ありがとうといわれました。それから、寝る時は、自分の部屋に戻る、とも、いわれましたね」
「それが、十一時半ですか？」
「そうです」
「列車が、どの辺を走っている時ですか？」
「名古屋発が、二二時五三分ですからね。大垣あたりじゃなかったかと思います。名古屋を出てからだというのは、覚えているんです」
「そのあとは、会っていませんか？」
「降りる時に、お会いしましたが、それだけですね」
と、今村車掌は、いった。
「その時の様子は、どうでした？」
三浦が、きいた。
「ちょっと、お疲れの様子が、新婚さんらしくて、微笑ましかったですよ」

9

二人は、東京駅構内の食堂で、おそい昼食を、とった。

「どうも、アリバイは、完全なようですね」

三浦は、ライスカレーを、美味そうに食べながら、十津川に、いった。

「しかし、個室寝台というのが、気になりますよ」

十津川が、いった。

彼の方は、そばだった。医者に、やや太り過ぎといわれてから、節食しているのである。

「途中で、抜け出せるからですか？」

「ええ。ドアが閉っていれば、中で、眠っていると思う。その間に、『富士』から降りて、問題の『おき3号』に乗り込み、石田友二を殺したことも、十分に、考えられますからね」

「なるほど」

「特急『おき3号』は、米子―小郡の間を走っています。その米子には、大阪や、京都から、行くことが出来る筈です。『富士』を、例えば、京都、大阪で降りて――」

と、十津川は、いいかけてから、頭を叩いて、

「ああ、『富士』は、京都、大阪に、停まらなかったんだ。運転停車はしても、乗客の乗り降りは、なかったんですね」

「それに、うまく、『おき3号』に乗れたとしても、『富士』に戻るのが、大変ですよ。『富士』は、どんどん、遠ざかって、しまうんですから」

と、三浦は、いった。

「おき3号」の中で、石田友二が、刺された時、「富士」は、すでに、国東半島の近くを走っているのだ。

追いついて、しかも、何くわぬ顔で、乗り込むのは、難しいだろう。

「山崎徹は、シロですか」

「十津川さんも、これで、ほっとされたんじゃありませ

んか？」
「そうですが、これで、犯人を捜すのが、大変になりましたよ」
と、十津川は、いった。
三浦警部は、その日の中に、島根県警に帰った。
十津川は、本多に、調査結果を、報告した。
本多も、さすがに、ほっとした表情になった。
「君は、まだ、不満そうだね？」
と、本多が、きいた。
「どうも、すっきりしないんです」
「山崎徹の行動がかね？」
「何か、わざとらしく思えるんですよ。夜中に、わざわざ、専務車掌に会って、彼女と、一緒に部屋にいていいかと、質問するというのはです」
「そうかね。私は別に、妙な気はしないがね。いかにも、ハネムーンの新婚らしい質問と、思うがねえ」
「私には、アリバイ作りに、そんな時間に、乗務員室をノックしたように思えて、仕方がないんですが」
「しかし、十一時半のアリバイ証明が、何か意味があるかね？　石田友二が、その時間に殺されたのなら、アリバイ作りといえるが、『おき3号』が米子を出るのは、九時間以上、あとだからね」
「そうですね、そうなんですよ」
十津川は、繰り返した。
結局、山崎徹のアリバイは、成立ということに、決った。

10

新しい容疑者を探す捜査が始まった。十津川たちも、島根県警に、協力して、被害者の身辺を洗い直した。
だが、なかなか、容疑者は、見つからなかった。
収穫のない日が、二日続いたあとのことである。
聞き込みに廻っていた西本刑事が、警視庁に戻って来ると、
「山崎徹のことですが」

と、十津川に、いった。
「あれは、もういいんだ。アリバイが成立したからね」
「そうなんですが、六月一日に、盛大な披露パーティを開くそうです。都内のホテルの大広間を借り切って、二千人ぐらいの招待客になるということです」
「私は、呼ばれてないよ」
「今度は、警察関係は、呼ばないそうです」
「煙たくなったか」
と、十津川は、笑った。が、急に、笑いを消した顔になって、
「その情報は、確かなのかね？」
「間違いありません。一億円ぐらいかけるんじゃないかという噂です」
「結婚の披露宴だろう？」
「そうです」
「急にやることになったのかね？」
「いや、ホテルの予約は、三ヵ月前にとられています」
「妙だな」
十津川は、考え込んでしまった。
亀井が、顔を向けて、
「何か、おかしいですか？」
「山崎夫婦はね、結婚式は、質素なのがいいといってね、ハネムーンも、九州へ出かけた。私なんかは、今どきの若者にしては、珍しく、健全な生き方だと感心したんだがね。実際には、一億円もかけて、披露宴をやるというんだ。これでは、彼の考えが、めちゃめちゃだよ」
「どういう気なんですかね？」
亀井も、首をかしげた。
「質素な結婚式は、見せかけだったということになってくる」
と、十津川は、いった。
西本刑事が、口を挟んで、
「改めて、世界一周のハネムーンに出かけるそうですよ」
「ますます、おかしいね」
十津川の顔が、一層、厳しくなった。

「世界一周のハネムーンをやることが決っていたのなら、あの三泊四日の九州旅行は、いったい、何だったんだろう？」
「簡素を売り込むためのものだったんですかね？」
「それなら、すぐあとで、盛大なパーティを開いたり、世界一周に、出かけたりは、しないだろう」
「すると、どういうことが、考えられますか？」
「石田友二を殺すためのハネムーンとは、考えたくないんだがね」
「いや、案外、そんなところだったのかも、知れませんよ」
と、亀井が、いう。
「もう一度、調べて来てくれないか」
十津川は、西本刑事に、いった。
「何を、調べて来ますか？」
「第一に、九州のハネムーンのことだ。これは、いつ考えられたのか知りたい。第二は、殺された石田友二の山陰路の写真撮影が、いつ企画されたのかだよ。どちらが先かで、山崎を、もう一度、調べなければならなくなるからね」
と、十津川は、いった。
すぐ、西本は、出かけて行った。
今度は、五時間ほどして、暗くなってから、戻って来た。
「わかりました」
と、西本は、息をはずませ、十津川に、報告した。
「石田友二の山陰行の企画は、三月中旬に、すでに、出来ていたと、出版社は、いっています」
「何日に、どこを撮り、どの列車を利用して移動するという詳しい取材計画は、いつ出来たんだ？」
「五月十日に、出版社が作って、石田友二に知らせています。切符や、ホテルの手配などは、十五日です」
「それで、山崎徹のハネムーンの方は、どうなんだ？」
「これが、面白いんです。まず、結婚式ですが、最初は、海外へ出て、そこの教会でということになっていたんです。それが、五月に入って、急に、山崎本人の意向

で、国内で、簡素にということに、変りました」
「面白いよ。それは」
「九州へのハネムーンは、もっと後で、五月十八日、結婚式の二日前に、急遽、手配されています」
「やっぱりだな」
と、十津川は、いった。

11

十津川は、島根県警の三浦警部に、電話をかけた。
「すると、やはり、石田友二を殺したのは、山崎徹ということになりますか？」
と、三浦が、きいた。
「その可能性が、大きくなりました。これは、想像ですが、山崎は、石田友二が、五月になってから、山陰路に、撮影に行くことを知って、殺すことを、考えたんじゃないでしょうか。石田のスケジュールに合せて、結婚式とハネムーンを作った。どうやったかは、わかりませんが、山崎は、ハネムーンの途中で、抜け出して、特急『おき3号』の車内で、石田友二を殺したんです」
「しかし、疑問が、二つありますね」
「すでに、山崎のアリバイは、成立してしまっているということでしょう？　もう一つは何ですか？」
「動機です」
「山崎は、銀座のクラブで、石田友二に、殴られている。これに対する怒りからでしょう」
「しかし、それだけのことで、綿密に計画を立てて殺すほど、憎むでしょうか？」
「なるほど。その点も、もう一度、調べる必要がありますね」
と、十津川は、いった。
「動機の解明は、そちらにお委せします。こちらでは、当日の『おき3号』の乗客や、車掌に会って、車内で、山崎を見なかったかどうか、きいてみます」
と、三浦は、いった。
「そうして下さい。私の方は、問題の動機と、トリック

の解明に、当ってみます」
十津川は、約束して、電話を切った。
彼は、亀井、西本の二人を、呼び集めた。
「これは、島根県警に対する協力捜査ということなので、この人数で、やるよりない。もう一つ、一度、シロと決めたのに、また、山崎徹を調べるとなると、問題視される恐れがある」
と、十津川は、二人に、いった。
「内密で、調べますか？」
と、亀井が、きく。
「はっきりするまで、それで行こう。責任は、私が持つよ」
「何から、取りかかりますか？」
「まず、動機だな。一応、山崎が、石田友二の一人娘に手を出し、揚句に捨てた。それを石田が怒って、衆人環視の中で、山崎を殴った。それに対する復讐だろうと、想像はつくんだが、他にも、理由があるかも知れない。それを、調べて貰いたいんだよ」
「委せて下さい」
亀井は、胸を叩き、西本を連れて、出て行った。
後に残った十津川は、黒板に、関西から、中国地方にかけての地図を描いてみた。
それに、「富士」と、「おき3号」のルートを、書き加えた。
それに、各駅の発着時刻も、付け加えていった。
第一に、気がつくのは、山崎の乗ったブルートレイン「富士」の方が、かなり早く着いているということだった。
例えば、「おき3号」は、出雲市に、一〇時二三分に着く。
山陽本線の広島は、位置としては、出雲市より西だが、「富士」が着くのは、四時間四十分も前の五時四三分である。
（この辺に、何かありそうだな）
と、十津川は、思った。
例えば、「富士」が、広島に着いた時に、山崎はそっ

と、列車から降りてしまう。個室寝台だから、新妻のはるかは、気がつくまい。

広島から、何とかして、出雲市へ行く。いや、出雲市に着く直前に、「おき3号」の車内で、石田友二は、殺されているから、出雲市の一つ前の駅から、乗り込む必要がある。

一つ手前というと、玉造温泉になる。

「おき3号」が、この玉造温泉を出るのは、一〇時〇一分である。

つまり、その時刻に、何とか、玉造温泉に行ければいいのだ。

果して、五時四三分に、広島で降りて、一〇時〇一分までに、玉造温泉へ行くことが出来るだろうか？

鉄道を利用して、玉造温泉に行くには、広島から、芸備線、木次線と乗りつぐと、山陰本線の宍道に出られる。

宍道は、玉造温泉の二つ前だが、この駅には、特急「おき3号」は、停車しないから、玉造温泉へ、戻る必要がある。

このルートで、間に合うだろうか？

十津川は、時刻表を使って、調べてみた。

広島から出る芸備線の列車で、五時四三分に、一番近いのは、五時五五分発の普通列車である。

これに乗ると、木次線との乗りかえである備後落合着が、九時四七分になる。乗りかえて、最初に出る木次線の列車は、一〇時四三分発の急行「ちどり」しかないのだ。

この急行「ちどり」が、玉造温泉に着くのが、一三時一三分で、とうてい間に合わない。

（もっと手前で、「富士」を降りたのかも知れないな）

と、十津川は、思った。

ブルートレイン「富士」は、深夜に、京都、大阪付近を走るので、京都、大阪、神戸では、乗客の乗り降りするような停車はしないのだ。

名古屋に、二二時五一分に着き、二分停車のあと、発車だが、その後は、午前四時一四分に、福山に着くま



で、「富士」は、停車しない（運転停車は除く）。

それなら、山崎は、二二時五一分に、名古屋で、降りたのではないだろうか。

この時刻では、もう、新幹線もないし、飛行機も、飛んでいない。

（何か、適当な列車が、あるだろうか？）

十津川は、時刻表のページを、繰ってみた。

丁度、いい列車があった。

東京発、浜田行のブルートレイン「出雲1号」が、二三時〇二分に、名古屋につき、三分停車で、発車している。

同じ東海道本線のレールを使っているから、乗りかえの時間も、必要ない。

この「出雲1号」に、乗りかえると、米子には、翌朝の、午前六時四三分に着く。

問題の特急「おき3号」の米子発が、九時二八分だから、ゆうゆうと、乗ることが出来るのだ。

それだけではない。「出雲1号」は、安来、松江と停

車するから、犯人はそこで、「おき3号」に、乗りかえることも出来る。

（この方法をとったのか？）

と、考えてから、十津川は急に、時刻表を放り出してしまった。

ブルートレインの「富士」の専務車掌の証言を思い出したからである。

彼の証言によれば、山崎徹は、十一時半頃、乗務員室にやってきて、話を交わしているのだ。

午後十一時半といえば、列車は、名古屋を過ぎてしまっている。

つまり、山崎は、「出雲1号」には、乗りかえられないのだ。というのは、「富士」は、その後、四時一四分に、福山に着くまで、停車しないし、一方、「出雲1号」の方は、京都から、山陰本線に入ってしまうからである。

（畜生！）

と、十津川は、舌打ちした。

推理が、うまくいかなかったからではなかった。

山崎に、してやられたと思ったからである。山崎が、わざわざ、深夜の十一時半に、車掌に話しかけた理由が、今、わかった。

もし、山崎が、それをしていなかったら、名古屋で降りて、「出雲1号」に、乗りかえたと思われ、反論出来なくなってしまう。だから、山崎は、自分のアリバイ作りのために、そんな時間に、わざわざ、乗務員室に行き、車掌に話しかけたのだ。

（やられたな）

と、思い、十津川は、窓際に行って、煙草に、火をつけた。

山崎は、用意周到なのだ。

（だが――）

と、十津川は、思う。

逆にいえば、山崎が、これほど、アリバイ作りに気を遣ったことで、彼の犯行という疑いは、ますます、濃くなったことになる。

（彼は、絶対に、「富士」を途中で降りて、石田友二を殺したのだ）

だが、どのルートを使ったのだろうか？

名古屋で、降りなかったとすれば、次の福山か、広島になる。

広島五時四三分では、間に合わないことは、この間、検証した。

となると、残るのは、福山だけである。

福山を、四時一四分に降りたら、間に合うのだろうか。

十津川は、また、机に戻り、時刻表の地図を見た。

福山から、山陰本線に行くには、福塩線―芸備線―木次線と乗りかえて、北へ行けば、山陰本線の宍道に出る。

このルートで、果して、間に合うだろうか？

福山を一番早く出る福塩線の列車は、六時〇二分発である。二時間近くも間があるが、これより早い列車がないのだから、仕方がない。

この列車に乗ると、八時四三分に、塩町に着く。ここで、芸備線に乗りかえである。

塩町では、九時五五分発の急行、「ちどり」にしか乗れない。これは米子行で、宍道一三時〇二分、玉造温泉一三時一三分で、肝心の特急「おき3号」には、とうてい間に合わない。

「駄目か」

と、十津川は、がっかりして、手に持っていたボールペンを、投げ出した。

12

亀井が、西本と、帰って来た。

「山崎徹という男は、調べれば調べるほど、大した奴ですよ。悪い意味でですがね」

と、亀井は、十津川に向って、溜息をついて見せた。

「そんなかね」

「高校二年の時に、友人が死んでいます」

「ほう」
「表面上は、ケンカをしていて、その友人が、誤って、崖から転落して死亡したことになっていますが、当時の友人は、山崎が、突き落としたと、今でも、思っていますね」
「原因は、どんなことだったのかね？」
「それが、何かで、山崎のことを馬鹿にしたらしいんですよ。あの年代なら、よく、悪口をいい合うし、相手の欠点だって、平気で口にしますからね。山崎は、それを、根に持って、復讐したんです。それも、いった当人が、忘れた頃になってです。われわれに、話してくれた友人も、山崎の執念深さには、驚いたといっています」
「面白いね、その話は」
と、十津川は、いった。
「この性格は、大学、社会人になっても、変らなかったようです」
「何か、それらしい話があるのかね？」
「山崎が、就職してからですが、同じ課内に、彼ともう一人、エリートコースを歩く新人がいたそうです。二人とも、女子社員の人気を集めていたんですが、忘年会の時、もう一人のほうが、シャンソンを上手く歌って、大喝采を受けましたが、山崎の方は、得意満面で歌ったのが、伴奏に合わなくて、失笑を買ってしまったわけです。山崎としては、自尊心を傷つけられたわけですが、こんなことは、よくあることです。ところが、忘年会のことなんか、みんなが忘れてしまった頃、もう一人のエリートの飲んだコーヒーに、水銀が入っていて、死にはしませんでしたが、しばらくは、声が出なくなってしまったそうです」
「山崎がやったという証拠は、あったのかね？」
「いや、ありません。しかし、あれは、山崎がやったのだと固く信じている人間が、今でも何人かいるんです」
「今度の事件も、それと同じなのかな？」
「多分に、それがあると、思いますね。山崎は、自尊心が、異常に強い男です。銀座のクラブで、得意になって、飲んでいたところへ、石田がやってきて、殴った

上、罵倒したわけですから、山崎の自尊心は大いに傷ついたと思います。これは、今になってわかったことですが、あの夜、このクラブには、有名な財界人や、芸能人なんかも、飲みに来ていたそうです」
「その中でのことだから、猶更、山崎の自尊心が、傷ついたということだね」
「そう思います。山崎は、じっと、復讐の機会を狙っていたんだと思いますね」
「西本君は、どう思うね？」
十津川は、黙っている若い西本刑事に、きいた。
「カメさんの考えに同感ですが、もう一つ、理由があるような気がします」
と、西本は、いった。
「どんな理由だね？」
「山崎は、政界に野心を持っています。石田ゆう子とのことは、公けになれば、野心家の山崎にとって、大きな痛手になると思うんです。ゆう子自身は、自分自身も、傷つくことですから、公けにはしないでしょうが、父親の石田友二の方は、わかりません。銀座のクラブに乗り込んで来て、山崎を殴った男ですからね。いつ、公けにするかわからないのを、山崎は、ずっと、心配していたんじゃないかと思うのです。政界入りが、近づけば、近づくほどです」
「なるほど、山崎にしてみれば、事前に、危険な芽をつみ取ったということか」
「私は、そう思います」
「カメさんは、どう思う？」
「西本君のいった動機も、あったと思いますね」
と、亀井も、賛成してから、十津川に、
「それで、山崎のアリバイは、崩せそうですか？」
「崩れそうで、崩れないんだよ」
と、十津川は、首をすくめた。

13

十津川は、二人に、今までの推理を話して聞かせた。

「山崎は、名古屋では、降りなかった。これは、はっきりしている。また、広島で降りたのでは、間に合わない。残るのは、五月二十一日の午前四時一四分に、福山で降りることしかないんだが、今いったようなことで、うまく特急『おき3号』に、乗れないんだよ」

と、十津川は、いった。

「問題は、四時一四分に、福山で降りているのに、六時過ぎまで、乗る列車がないということじゃありませんか？」

西本が、考えながら、十津川に、いった。

「どういうことだ？」

と、亀井が、きく。

「二時間が無駄になっています。その二時間、車で飛ばせば、百キロは、動けます。時刻表で見ると、福山から、福塩線の塩町まで、約八十キロですから、少くとも、六時には、塩町に着いているんじゃありませんか」

「理屈としては、その通りだね」

と、十津川は、微笑した。

「更に、車で、山陰本線の玉造温泉に行っても、いいと思いますが」

「そりゃあ、駄目だよ」

十津川は、いった。

「なぜですか？」

「君の推理では、福山から、タクシーを使うことになる。そうだろう？」

「その通りです」

「福山駅へ降りて、タクシーを拾うとなると、駅前にとまっているタクシーということになる。もし、そうだとすると、調べれば、そのタクシーは、すぐ、見つかってしまうよ。タクシーの運転手は、何時間も、山崎を乗せていれば、顔を覚えてしまう。そして、山崎を、福山から、どこまで乗せたと証言すれば、それで、山崎は、終りだ。もう一つ、列車は、たいてい時刻表どおりに動くが、車は、そうはいかない。道路事情によって、簡単に、二十分、三十分と、所要時間が変ってしまう。殺人をやるわけだからね。山崎は、そんなあやふやな交通手

段を使って、計画は、立てないと思うよ」
と、十津川は、いった。
「しかし、鉄道を利用しても、上手くいかんのでしょう？」
「そうなんだよ。だが、彼は、鉄道を利用したんだ。特急『おき3号』の車内で、石田友二を殺したことにも、それが現われてるよ。もし、きちんとした計画を立てずに、殺るんだったら、石田が、東京にいる時にでも、殺すだろう」
十津川は、自信を持って、いった。
山崎は、自信満々の計画を立てたに違いないのだ。
その計画が、綿密であればあるほど、不確定な要素の多い車は、使わない筈である。
島根県警の三浦警部から電話が、入った。
「面白い聞き込みが一つありましたので、お電話しました」
と、三浦は、弾んだ声で、いった。
「山崎を見た人間がいたんですか？」
「いたんです。問題の五月二十一日に、山崎と思われる人間を乗せたという、タクシーの運転手が、見つかったんです」
「タクシーですか？」
「特急『おき3号』の方は、残念ながら、車内での目撃者は、まだ、見つかりません。問題のタクシーですが、山崎らしい男を、出雲市駅から、出雲空港まで、乗せたと、運転手は、いっているんですよ」
「時間は、何時頃ですか？」
「それが、午前十時半頃に、乗せたと、いっていますね」
「すると、『おき3号』が、出雲市に着いた直後ですね？」
「そうなります」
「すると、山崎は、『おき3号』の車内で、石田友二を殺して、出雲市で降り、すぐ、タクシーを拾ったことになりますね」
「それで、出雲空港で、五月二十一日に、ここから出発

した乗客名簿を調べたんですが、山崎徹の名前は、ありませんでした」
「当然、偽名を使っていますからね。帰りは、飛行機を、使ったんですよ」

14

十津川は、電話を切ると、亀井たちに向って、
「やはり、山崎が、犯人だよ。彼は、帰りは、飛行機を、使っている。とにかく、ブルートレインの『富士』が、終点の宮崎に着くまでに、車内に戻っていなければならないんだから、飛行機を使うよりなかったんだがね」
と、いった。
「そちらの方を、先に、考えてみようじゃありませんか」
と、亀井が、いった。
特急「おき3号」の車内で、殺人を犯したあと、先に行っている「富士」に、追いつけるだろうか？
十津川たちは、時刻表と、首っ引きになった。
山崎だって、同じようにして、殺人計画を練ったに違いないのである。
「ブルートレイン『富士』の宮崎着は、一四時五九分ですね」
と、亀井が、時刻表を見ながら、いった。
「しかし、カメさん。その時刻に、宮崎に着けても、駄目なんだ。『富士』に乗っていなければならないからね」
「そうなんですよ。となると、ぎりぎり、一つ手前の駅から、乗り込むことになりますね。一つ手前というと、日豊本線の高鍋ですね。『富士』は、高鍋発が一四時三四分だから、もし、飛行機で、宮崎空港に着いたとなると、高鍋に、一四時三四分までに行ける余裕が、必要ですね」
「じゃあ、逆算していってみよう」
と、十津川は、いった。
宮崎発一三時四三分という普通列車がある。大分行で

ある。
この列車に乗ると、高鍋には、一四時一六分に着く。
「富士」に、乗り込めるのだ。
宮崎空港から国鉄宮崎駅までは、二十五、六分である。
とすると、宮崎空港に、一三時一五分に着けば、何とか、間に合う筈である。
出雲―宮崎を、直接結ぶ飛行機は、ない。
「出雲からは、かなりの便が出ていますね。東京、大阪、福岡に出ています」
と、亀井は、時刻表を見ながら、いった。
「だから、東京、大阪、福岡のどこかを経由して、宮崎へ行ったんだ」
「宮崎へは、東京、大阪、福岡のいずれからも、便がありますね」
「やはり、直線距離で、一番近い福岡が、本命だろうね」
と、十津川は、いった。
出雲―福岡間は、往復一便ずつしかない。
だが、適当な便なのだ。
出雲一一時二〇分→福岡一二時三〇分。
この一便である。
出雲市のタクシーは、十時半に、駅前で、山崎と思われる男を乗せたと、証言している。
出雲市駅から、空港までは、車で、二十四分である。
ゆっくり、一一時二〇分発の福岡行に乗れるのだ。
次は、福岡から、宮崎である。
この間には、往復それぞれ、六便が、運航されている。
一二時三五分福岡発という便がある。TDAの835便である。
これに乗れば、一三時一五分に、宮崎に着く。
「宮崎空港に、何時までに着けば、良かったかな？」
十津川は、確認するように、亀井に、きいた。
「一三時一五分です」
と、亀井が、いう。

十津川は、ニヤッと、笑った。
「それなら、ぴったりだ。一三時一五分に、宮崎に着くんだ。空港から、宮崎駅までが、渋滞していても、どうにか間に合うね」
「アリバイの片方が、崩れましたね」
亀井も、ニッコリした。
特急「おき3号」の車内で、石田友二を殺した山崎は、飛行機を乗りついで、宮崎に先廻りして、何くわぬ顔で、「富士」に、戻ることが、出来たのである。
十津川は、この推理を、島根県警の三浦警部に、伝えた。
その一方で、TDAに電話をかけ、出雲―福岡、福岡―宮崎の便が、五月二十一日に、正常に動いていたかどうかを、きいてみた。
もし、遅れたりしていたら、十津川たちの推理は、崩れてしまうのだ。
回答は、十津川を、満足させた。五月二十一日は、時刻表通り、運航されたというのである。
十津川は、ほっとした。
あとは、目撃者探しである。
これは、島根県警が、やることになった。
二十一日のTDAの出雲↓福岡916便と、福岡↓宮崎の835便で、山崎徹を見た者はいないかということである。
翌日の午後、三浦が嬉しそうに、連絡して来た。
「二つの便に、同じ名前の乗客がいましたよ。北野悟、住所は、松江市になっていますが、該当者なしです」
「それが、怪しいですね」
「それから、二つの便に乗務していたスチュアーデス三人に会って、山崎の写真を見せました」
「それで、反応は、ありましたか？」
「ありましたよ。出雲から福岡へ飛ぶYS11のスチュアーデスからです。彼女がいうには、乗客の一人が、しきりに、この飛行機は、予定通りに、福岡へ着くのか、遅れていないかと、きいたそうです。三回もきかれたので、よく覚えているといいました」

「それが、山崎ですか？」
「スチュアーデスが、写真で、確認しました。この人だったと」
「そりゃあ、いい」
「その乗客は、福岡に着くと、他の乗客を押しのけるようにして、降りて行ったといいます」
「当然です」
と、十津川は、いった。
山崎は、五分後に出発する宮崎行に、乗らなければならないからだ。
出雲―福岡は、福岡―宮崎とも、同じＴＤＡだから、こんな軽業的な乗りかたも、出来るのだろう。
山崎は、前もって、出雲―福岡―宮崎の切符を買っておいたに違いない。だから、同じ偽名で、通さざるを得なかったのだ。
「これで、山崎を、かなり、追い詰めましたね」
三浦警部が、満足そうに、いった。
「しかし、肝心の箇所が、解明できません」
と、十津川は、慎重ないい方をした。
「しかし、山崎は、五月二十一日に、出雲市駅から、出雲空港まで、タクシーに乗ったことが、確認されましたし、出雲空港から、ＴＤＡのＹＳ11で、福岡へ飛んだことも、間違いありませんよ」
「それは、確かに、収穫です。しかし、山崎が、五月二十一日に、特急『おき3号』の車内で、石田友二を殺すことが可能だったことが、証明できないんです。山崎は、ブルートレインの『富士』に、乗っていた。名古屋で降りたのなら、簡単なんですが、降りていません。京都、大阪でも、証明は、簡単ですが、『富士』は、停車しません。山崎が降りたと思われるのは、福山か、広島ですが、今のところ、そのどちらからも、うまく、『おき3号』に、乗れないんですよ。乗れることが証明できないと、彼の犯行は、不可能ということになって、タクシーの運転手と、ＹＳ11のスチュアーデスの証言も、単に、よく似た男を見たことになってしまいます」
「そうかも知れませんが、私は、山崎徹の逮捕状を貰っ

て、東京へ行きますよ」
「しかし――」
と、十津川が、いいかけた時、本多捜査一課長からの呼び出しが、かかった。
十津川は、三浦との話を打ち切って、課長室に行った。
課長室には、三上刑事部長と、もう一人、男がいた。
胸のバッジを見なくても、誰なのか、すぐわかった。
山崎徹の父親で、政務次官の山崎晋太郎だった。いや、ここでは、警察OBの方が、威力を発揮するだろう。
「君は、前に、山崎さんの息子さんを、調べていたね？」
と、三上部長が、十津川に、いった。
「その通りです」
「しかし、アリバイが成立して、捜査を、やめたと、いっていたんじゃないのかね？」
「はい。その通りです」
「しかし、ひそかに、続けているじゃないか。刑事が二人で、息子さんの周辺を嗅ぎ廻っていて、大変に迷惑をしていると、今、山崎さんが、いって来られたんだ。なぜ、勝手に、そんなことをするんだ？」
十津川が、黙っていると、
「十津川君」
と、山崎晋太郎は、物静かに、声をかけてきた。
「君が、優秀な刑事であることは、聞いているし、事件の捜査に、熱心なことは、立派なことだ。私の息子だからといって、遠慮することはない。どんどん、やってくれ。だが、理由なしに、捜査されるのは困る。私の息子は、近く、政界入りするので、何よりも、名誉が大事だからね。君は、何か、根拠があって、息子を、調べているのかね？」
「息子さんには、動機があります」
「しかし、一つの殺人事件が起きると、動機のある人間なんか、いくらでも、見つかるものだよ。それに、一度は、アリバイが成立したとして、取り止めたと、今、三

上部長が、いったじゃないか」
「その通りです」
「すると、君がまた、息子のことを調べだしたのは、息子のアリバイが崩れたからなのかね？」
「五月二十一日、事件のあった日ですが、現場近くの出雲市内と、出雲から福岡へ飛ぶ飛行機の中で、タクシーの運転手と、スチュアーデスが、息子さんを、目撃しています」
「それは、息子によく似た男だよ。第一、息子は、その時、ハネムーンで、『富士』に、乗っていたんだ。それとも、『富士』に乗っていた息子が、遠く離れたところを走る『おき3号』の車内で、人を殺せるのかね？」
「今のところ、わかりません」
「わからん。そんなあいまいなことで、息子の身辺を、嗅ぎ廻るのかね？」
「ちょっと待って下さい」
今まで黙っていた本多課長が、口を挟んだ。
「何だね？」
と、山崎が、本多を睨んだ。
「今度の事件は、あくまでも、島根県警が、担当です。われわれは、向うの協力要請で、動いているだけです。十津川君も、それで、動いているのです」
本多は、そういってくれた。
「それでは、協力要請があれば、どんなところにも、首を突っ込むのかね？　それでは、全く、自主性がないじゃないか」
山崎が、いう。
十津川は、その山崎晋太郎に向って、
「私は、あなたの息子さんに対して、何の偏見も、持っていません。冷静に見ているつもりです。ですから、アリバイが成立したと思ったとたんに、息子さんを調べることを、止めました。しかし、息子さんの不可解な行動が、私を、疑わせたのです。九州へのハネムーンは、突然、行われたことが、わかりました。被害者石田友二の山陰行に、合せて考えられたように、思えるのです。それに、息子さんは、結婚式も、ハネムーンも、簡素にし

たかったと、いわれました。ところが、もう一度、盛大な披露宴をやるということですし、改めて、世界一周のハネムーンに、おいでになるという。すると、あの九州へのハネムーンは、いったい、何だったのかと、疑問を、持ったのです。私は、刑事として――」

「待ちたまえ！」

と、山崎は、大声で、十津川の言葉をさえぎった。

「ハネムーンを何度やろうと、そんなことは、個人の勝手じゃないかね。二度、ハネムーンに行くと、警察に、疑われるのかね？」

「そうじゃありません」

「十津川君」

三上部長が、当惑した顔で、十津川を見た。

「それだけ、山崎さんの息子さんに拘わるからには、何か、証拠をつかんでいるんだろうね？　アリバイが無いとか、現場に、指紋があったとかいう――」

「指紋はありませんし、今のところ、アリバイは、あります」

「それなら、君。即刻、中止したまえ」

と、三上が、いった。

15

十津川は、部屋に戻ると、亀井に、

「山崎徹に対する捜査は、中止だ」

と、いった。

「ここまで、追い詰めたのにですか？」

亀井が、きく。その顔には、ありありと、不満の色があった。

「追い詰めたのは、頭の中でだけだからね。それに、アリバイが、崩れていないんだ」

「崩れれば、いいわけでしょう？」

「そうだ。しかし、それまでは、もう、山崎の身辺を、調べ廻ったりは、出来ないぞ」

と、十津川は、いった。

翌日、島根県警の三浦警部が、飛行機で、やって来

た。
午後一時半頃に着くと、三浦は、勢い込んで、
「逮捕状は、とれそうです。出たらすぐ、うちの刑事が、それを持って、飛んで来ることになっていますよ」
と、十津川に、いった。
「こちらは、ちょっと、困ったことになっています。上から、待ったが、かかりました」
十津川は、正直に、いった。
「そういえば、亀井刑事の姿が見えませんね」
「カメさんと、西本刑事が、山崎のことを調べていたんですが、別の事件に、かり出されて行って、残っているのは、私一人ですよ」
と、十津川は、苦笑した。
「じゃあ、二人で、やりますか？」
三浦は、元気に、いった。
「とにかく、お茶でも、飲みに行きませんか」
と、十津川は、三浦を、誘った。
警視庁内の喫茶室に行き、コーヒーを、二人で、飲んだ。
「こちらに来る飛行機の中で、新聞を読んだんですが」
と、三浦が、いった。
「何か出ていましたか？」
「六月一日に、山崎徹が、ホテルで、盛大な披露宴を開くことが、出ていましたよ。これで、いよいよ政界入りかと」
「それが、近いので、父親が、強硬に、いって来たんでしょう」
「その野心の邪魔になりそうなので、石田友二を殺したということですかね」
「かも知れません」
「彼のアリバイは、どうしても、崩れませんか？」
と、三浦が、きいた。
「いろいろと、考えているんですがね。いや、山崎が、犯人だという確信は、崩れませんよ。だから、アリバイは、必ず、崩れる筈です。そう思っています」
「ブルートレインの『富士』ですか」

と、三浦は、呟やいた。
「ちょっと、ここで待っていてくれませんか」
急に、十津川が、いった。
「どうしたんですか？」
「時刻表を持って来ます」
十津川は、立ち上ると、あっけにとられている三浦を残して部屋に戻り、自分の机の引出しから、時刻表を持ち出した。
喫茶室に帰ると、十津川は、その時刻表をテーブルの上に置いた。
「やはり、あの時間が、キーだと思いますね」
と、十津川は、三浦に、いった。
三浦は、時刻表のページを繰っていく十津川の手元を、のぞき込みながら、
「あの時間というのは、何のことですか？」
「山崎の乗っていた『富士』は、午前四時一四分、五時四三分という早朝に、それぞれ、福山、広島に着くんです。特に、福山には、四時一四分という早さです。そのあと、他の鉄道を利用して、山陰に行くとしても、一番早い鉄道も、六時過ぎにしか出ませんから、その間、二時間近くが、無駄な時間になってしまうということなんです。福山から、山陰へ行くとすると、この地図にあるように、福塩線―芸備線―木次線を使って、北上するわけですが、今いったように、二時間が、無駄になってしまうんです。それを上手く使えれば、山崎は、『おき3号』に、乗れたと、思うんですよ」
「なるほど」
と、三浦は、肯いた。
「その二時間の間に、タクシーで、走っておくというのは、どうですか？」
三浦が、きいた。
十津川は、笑って、
「それは、うちの刑事とも考えましたが、空港と駅との間の二、三十分の距離なら、渋滞があっても、あらかじめ、計画の中に、組み込めますが、二時間も、車で走るとなると、そうは、いきません。殺人計画に、二時間も

の車の利用を組み込むのは、危険ですよ」
「そういえば、そうですね」
「だから、山崎が利用したのは、あくまでも、鉄道です」



「しかし、福塩線は、六時過ぎしか、適当な、列車がないんでしょう？」
「六時〇二分福山発の列車ですが、これを使ったのでは、間に合いません」
と、十津川は、いってから、
「山崎は、その二時間を利用して、戻ったんじゃないかと、考えたんですよ」
「戻ったというと？」
「福山から、大阪方面にですよ」
と、十津川は、いった。
三浦も、膝を乗り出してきた。
「福山には、新幹線が走っていますね」
「そうですが、新幹線は、六時台にならなければ、福山を通りません」
「すると、新幹線は、駄目ですか」
「ですから、利用したとすれば、山陽本線の方だと思いますね」

十津川は、山陽本線のページを開いてみた。
もし、そこに、午前四時台に、福山を出る列車があれば、何とかなるだろう。
「ありますよ！」
と、十津川は、眼を輝やかせた。
「寝台特急『あかつき2号』が、午前四時二二分に、福山着で、同じ、四時二二分に発車します。新大阪行です。これに、乗れます」
「しかし、それで、どこまで行ったんでしょうか？」
「倉敷、姫路、大阪と、いろいろ考えられます。それぞれ、山陰本線と結ぶルートがあるからです。この中の倉敷じゃないかと思います。倉敷着は、四時五七分です」
「福山に、一番近いからですか？」
「それもありますが、倉敷から山陰へ行く伯備線が、この地図では、黒になっているでしょう。これは、国鉄の幹線を意味しています。他の、例えば、姫路から山陰へのルートになっている姫新線などは、青で、これは地方線です。幹線の方が、当然、列車の本数も多いですからね」
と、十津川は、いった。
十津川は、伯備線のページを開いた。
L特急「やくも」が、一時間おきぐらいに、米子、出雲市に向って出ている。が、一番早い「やくも」は、八時二五分倉敷発の「やくも1号」で、これに乗ったのでは、米子着一〇時四〇分で、九時二八分発の「おき3号」には、間に合わない。
だが、倉敷発五時五八分という普通列車が、あった。各駅停車だが、これに乗れば、九時〇六分に、米子に着けるのだ。
米子発九時二八分の「おき3号」に、ゆっくり乗れるのだ。
「間に合いますよ」
と、十津川が、いった。
「間に合いましたね」
三浦も、ニッコリした。
これで、完全に、山崎徹のアリバイは、崩れたことに

なる。
「もう一杯、コーヒーをどうですか？」
と、十津川が、いった。

●初出誌

関門三六〇〇メートル　小説現代　一九八六年二月号
裏切りの中央本線　小説現代　一九八六年四月号
臨時特急を追え　小説現代　一九八六年六月号
最北端の犯罪　小説現代　一九八六年一月号
特急「おき3号」殺人事件　小説現代　一九八六年八月号

特急「おき3号」殺人事件

昭和六一年十月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六八〇円

著者―西村京太郎
©1986 KYOTARO NISHIMURA Printed in Japan
発行者―野間惟道



発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京(〇三)―九四五―一一一一(大代表)

印刷所―凸版印刷株式会社　製本所―株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

ISBN4-06-181270-X (0) (文二)

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

ユーモアミステリー
東西南北殺人事件 赤川次郎 580円

ユーモアミステリー
起承転結殺人事件 赤川次郎 640円

長編青春怪奇ミステリー
沈める鐘の殺人 赤川次郎 640円

ユーモアミステリー
冠婚葬祭殺人事件 赤川次郎 600円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団 赤川次郎 640円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団2 キャンパス篇 赤川次郎 640円

長編ユーモアミステリー
三姉妹探偵団3 珠美・初恋篇 赤川次郎 640円

ユーモアミステリー
人畜無害殺人事件 赤川次郎 640円

長編青春ミステリー
棚から落ちて来た天使 赤川次郎 680円

長編勝負師ロマン
ばいにんぶるーす 阿佐田哲也 640円

痛快ユーモアピカレスク長編
先天性極楽伝 阿佐田哲也 660円

新麻雀小説
ヤバ市ヤバ町雀鬼伝 阿佐田哲也 640円

書下ろし本格長編推理
卑弥呼殺人事件 阿井渉介 640円

書下ろし本格派情ミステリー
能登・泣き砂の殺意 阿井渉介 640円

サラリーマン官能小説
オフィスガールの更衣室 阿部牧郎 680円

サラリーマン官能サスペンス
誘惑調査室 阿部牧郎 660円

長編学園官能小説
誘惑教室 阿部牧郎 680円

長編官能ピカレスク小説
誘惑魔 阿部牧郎 680円

長編サラリーマン官能小説
誘惑夫人 阿部牧郎 680円

傑作官能ロマン
誘惑街の女たち 阿部牧郎 680円

青春佳城の名推理
天井のとらんぷ 泡坂妻夫 640円

書下ろし黄金の驚の秘密
義経埋宝伝説殺人事件 荒巻義雄 660円

書下ろし家康埋宝伝説の謎
日光霊ライン殺人事件 荒巻義雄 680円

新たな旅立ちを描く長編
鳥の歌[上][下] 五木寛之 各660円

歴史ミステリー織田信長推理帳
修道士の首 井沢元彦 620円

長編サスペンス推理
六歌仙暗殺考 井沢元彦 580円

●乱歩賞SPECIAL 探偵は芥川龍之介
ダビデの星の暗号 井沢元彦 680円

長編歴史ミステリー 織田信長推理帳
五つの首 井沢元彦 640円

ハードボイルド・ロマン
透明な牙 生島治郎 680円

非情のハードボイルド
兇悪の拳銃 生島治郎 640円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

長編 勝負師ロマン
ぎゃんぶるハンター
生島治郎 680円

書下ろし探険隊の黒い野望
シーラカンス殺人事件
内田康夫 640円

名機「セニガタ」の脳細胞
パソコン探偵の名推理
内田康夫 640円

書下ろし連続殺人事件
赤い雪崩
太田蘭三 620円

書下ろし長編異色推理
破牢の人
太田蘭三 620円

書下ろし山岳渓流推理
餓鬼岳の殺意
太田蘭三 640円

書下ろし山岳渓流推理
南アルプス殺人峡谷
太田蘭三 680円

書下ろし乱歩賞受賞第一作
七年目の脅迫状
岡嶋二人 640円

書下ろし競馬ミステリー
あした天気にしておくれ
岡嶋二人 660円

事件だ出番だ山本山コンビ
三度目ならばABC
岡嶋二人 640円

●乱歩賞SPECIAL 心理サスペンス
チョコレートゲーム
岡嶋二人 680円

書下ろし青春ユーモア推理
とってもカルディア
岡嶋二人 640円

プロ野球情報戦ミステリー
ビッグゲーム
岡嶋二人 680円

書下ろし都会派ハードボイルド
野獣駆けろ
大沢在昌 620円

書下ろし国際冒険小説
スペイン灼熱の午後
逢坂剛 680円

愛のミステリー長編
逆光のなかの女
落合恵子 640円

●乱歩賞SPECIAL カラオケパーティ殺人事件
偽装スキャンダル
大谷羊太郎 680円

書下ろし海洋パニック小説
炎のタンカー
岡本好古 660円

バイオレンス・ロマン
私設断頭台
勝目梓 620円

欲望の長編ロマン
絢爛たる檻
勝目梓 640円

ハード・バイオレンス
女教師に捧げる鉄拳
勝目梓 600円

長編凄絶バイオレンス
柩の十字架
勝目梓 640円

書下ろしミステリー・ロマン
仮面の火祭り
勝目梓 660円

復讐ハードミステリー
闇が裂ける
勝目梓 680円

長編ハードバイオレンス
殺し屋
勝目梓 640円

精選・情事の現場12
肉狩り
勝目梓 640円

長編エロティシズム&バイオレンス
不倫の報酬
勝目梓 640円

書下ろし旧制三高殺人事件
リア王 密室に死す
梶龍雄 640円

書下ろし旧制三高殺人事件
若きウェルテルの怪死
梶龍雄 660円

書下ろし旧制四高殺人事件
金沢蓬魔殺人事件
梶龍雄 620円

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

全額はすべて定価です

●乱歩賞SPECIAL 美女伝説殺人事件
奥鬼怒密室村の惨劇 梶龍雄 680円

書下ろし伝奇本格推理
奥秩父狐火殺人事件 梶龍雄 680円

書下ろし旧制一高・三高殺人野球戦
青春迷路殺人事件 梶龍雄 680円

書下ろし医学ロマン
美貌のメス 門田泰明 640円

書下ろし医学ロマン
愛憎のメス 門田泰明 640円

書下ろし医学ロマン
狂きょうらん瀾のメス 門田泰明 660円

書下ろし銀座ママは名探偵
知りすぎた女 川上宗薫 620円

長編官能サスペンス
復讐する女 川上宗薫 640円

長編官能サスペンス
撮された女 川上宗薫 660円

書下ろし推理 悪女の挑戦状
水晶占い殺人事件 風見玲子 640円

書下ろしSFサスペンス
星狩人 川又千秋 640円

書下ろしSFサスペンス〈星狩人〉PART2
人間牧場 川又千秋 640円

書下ろしSFサスペンス〈星狩人〉PART3
寄生同盟 川又千秋 640円

書下ろし超能力アクション
サイキック戦争 笠井潔 640円

書下ろし海賊放送局ハワイ99
殺しのヒットパレード 喜多嶋隆 660円

書下ろし青春推理
ビキニ探偵危機一髪 喜多嶋隆 660円

書下ろしスーパー伝奇バイオレンス
妖戦地帯 菊地秀行 640円

長編ハードボイルド
鎖 北方謙三 640円

書下ろし伝奇ロマン
鬼神かみがみ伝説 紀和鏡 680円

熱血！極道ロマン
パパは唐獅子牡丹 菊地昭典 640円

長編スーパー伝奇
神州日月変[上][下] 栗本薫 各660円

●乱歩賞SPECIAL 伊集院大介VS栗本薫
猫目石[上][下] 栗本薫 各680円

傑作ミステリー
伊集院大介の冒険 栗本薫 660円

傑作ミステリー
伊集院大介の私生活 栗本薫 660円

長編サラリーマン・サスペンス
明日なき巡礼たち 黒岩重吾 680円

●乱歩賞SPECIAL 奥飛騨山荘の怪火
罪の女の涙は青 日下圭介 680円

書下ろし歴史サスペンス
チャップリンを撃て 日下圭介 680円

長編歴史ロマン
旅券のない旅 胡桃沢耕史 660円

書下ろしクラッシュ・ノベル
新宿純愛物語 桑原譲太郎 660円

長編カー・ミステリー
2月30日の恋人たち 小林久三 580円

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

教師殺人ミステリー
蝶たちの殺意 小林久三 680円

●乱歩賞SPECIAL 70兆円はここにある！
秀吉埋蔵金殺人事件 小林久三 680円

●乱歩賞SPECIAL 名門高推理研の探偵たち
ユークリッドの殺人学原論基礎篇 小峰元 680円

●乱歩賞SPECIAL 女子高名探偵の大活躍
ユークリッドの殺人学原論応用篇 小峰元 680円

長編ミステリー
青春抒情死抄 小峰元 580円

書下ろしハードアクション
超能力者狩り 今野敏 660円

書下ろし〈超能力者〉シリーズ
妖獣のレクイエム 今野敏 680円

書下ろし一獲千金ピカレスク・ロマン
兜ヶ町の悪ワル党 小堺昭三 660円

長編異色ミステリー
檻の中の被害者 佐野洋 680円

推理＝単身赴任の男
D支局長の事件簿 佐野洋 660円

書下ろし企業小説
社業に死す 咲村観 600円

長編本格推理
日本国憲法殺人事件 斎藤栄 640円

長編本格推理
黒白の奇蹟 斎藤栄 680円

●乱歩賞SPECIAL 悪夢の将棋〈最高位戦〉
新・殺人の棋譜 斎藤栄 680円

異色ミステリー
殺人スクランブル 笹沢左保 620円

本格推理＝鮮やかなドンデン返し
もしもお前が振り向いたら 笹沢左保 640円

書下ろし経済小説
同族追放 斎藤吉見 640円

書下ろし経済小説
粉飾決算二十五年 斎藤吉見 660円

書下ろし経済小説
乱脈銀行 斎藤吉見 660円

書下ろし禅僧法元の名推理
信濃古寺殺人事件 佐橋法龍 640円

書下ろし長編ロマン
天空の爪 志茂田景樹 580円

長編 復讐のバイオレンス
逃亡の報酬 志茂田景樹 680円

プロ野球ミステリー
後楽園球場殺人事件 新宮正春 600円

長編サスペンス・アクション
殺しのマウンド 新宮正春 640円

巨人・阪神戦で人が死ぬ
甲子園球場殺人事件 新宮正春 680円

書下ろし怪奇ミステリー
斜め屋敷の犯罪 島田荘司 640円

書下ろし時刻表ミステリー
死体が飲んだ水 島田荘司 680円

長編本格推理
占星術殺人事件 島田荘司 680円

都会派スリラー
殺人ダイヤルを捜せ 島田荘司 660円

書下ろし海洋冒険ロマン
裂けて海峡 志水辰夫 660円

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

金額はすべて定価です

書下ろし冒険ロマン
散る花もあり
志津三郎 620円

書下ろしテレビ警察西北署
刑事たちの伝説
志津三郎 620円

書下ろし詐欺師ロマン
ペテン師ファミリー
宗田 理 680円

書下ろし海洋冒険小説
戦時標準船荒丸
谷 恒生 620円

書下ろし戦時標準船荒丸II
無法還流
谷 恒生 680円

長編伝奇オカルトバイオレンス
超人類生誕秘録①紅乳奮の巻
谷 恒生 660円

●乱歩賞SPECIAL ベルリンの壁殺人事件
悪夢の書簡
高柳芳夫 680円

書下ろし怪奇ミステリー
狂い壁 狂い窓
竹本健治 640円

書下ろしファントム・シリーズ1
ファントム強奪
竹島 将 640円

書下ろしファントム・シリーズ2
人質空中奪還
竹島 将 660円

書下ろしファントム・シリーズ3
鮮血の貴婦人
竹島 将 660円

書下ろしファントム・シリーズ4
灼熱の女獣
竹島 将 660円

書下ろしファントム・シリーズ5
空獣狂熱祭カーニバル
竹島 将 640円

書下ろしファントム・シリーズ6
戦慄の女神
竹島 将 640円

書下ろしファントム・シリーズ7
ファントム蒼空戦線
竹島 将 680円

長編ミステリー・ロマン
京都で消えた女
多岐川 恭 680円

●乱歩賞SPECIAL 億万長者殺人事件
おやじに捧げる葬送曲
多岐川 恭 680円

●乱歩賞SPECIAL 明治新政府の大トリック
倫敦暗殺塔
高橋克彦 680円

怪奇ミステリー館
悪魔のトリル
高橋克彦 640円

書下ろしキャンペーンに仕組まれた大謀略
〈移情閣〉ゲーム
多島斗志之 680円

書下ろしSF鉄道推理
急行エトロフ殺人事件
辻 真先 620円

書下ろし新幹線トラベル推理
寝台超特急ひかり殺人事件
辻 真先 660円

書下ろし北海道旅情ミステリー
幻の流氷特急殺人事件
辻 真先 640円

甦ったスーパースター
新顎十郎捕物帳
都筑道夫 640円

大江戸時代ミステリー
新顎十郎捕物帳2
都筑道夫 640円

書下ろし鉄壁のアリバイ崩し
瀬戸内を渡る死者
津村秀介 640円

書下ろし連続殺人のアリバイ崩し
京都着19時12分の死者
津村秀介 680円

長編官能ミステリー
幻影家族
戸川昌子 680円

●乱歩賞SPECIAL 26年目の不信の再会
火の接吻
戸川昌子 680円

書下ろし名探偵「陳展望」の推理
香港から来た男　伴野　朗　620円

●乱歩賞SPECIAL　日本と中国を結ぶ連続殺人
さらば、黄河　伴野　朗　680円

●乱歩賞SPECIAL　満月が招く殺人の誘惑
月霊の囁き　鳥井加南子　680円

書下ろし新社会派推理
殺人オンライン　長井　彬　620円

●乱歩賞SPECIAL　瀬戸の陶芸殺人事件
死の轆轤　長井　彬　680円

書下ろし歴史旅情ミステリー
函館五稜郭の闇　長井　彬　640円

書下ろし伝奇ロマン
天草は血染めの刃　南里征典　680円

書下ろしヴィーナスの熱い罠
鍾乳洞美女殺人事件　南里征典　680円

リーダーの条件を描く歴史長編
秀吉覇権への道　南條範夫　640円

書下ろし乱歩賞受賞第一作
喪失荒野　中津文彦　620円

書下ろし三四郎記者事件帖
特ダネ記者殺人事件　中津文彦　640円

●乱歩賞SPECIAL　奥羽八百年黄金伝説
伊達騒動殺人事件　中津文彦　680円

長編青春サスペンス・ロマン
国境の女　夏樹静子　580円

推理傑作集
女の銃　夏樹静子　640円

長編国際情報小説
チェンマイの首　中村敦夫　660円

書下ろし冒険幻代史
ハルマゲドン黒書　中島　渉　640円

書下ろし冒険幻代史　2夜の果ての闇
ハルマゲドン黒書　中島　渉　640円

書下ろし長編推理
陽の翳る街　仁木悦子　620円

長編鉄道推理
特急さくら殺人事件　西村京太郎　580円

長編鉄道推理
四国連絡特急殺人事件　西村京太郎　680円

長編鉄道推理
寝台特急あかつき殺人事件　西村京太郎　600円

長編野球ミステリー
日本シリーズ殺人事件　西村京太郎　680円

鉄道推理
L特急踊り子号殺人事件　西村京太郎　620円

長編鉄道推理
寝台特急「北陸」殺人事件　西村京太郎　640円

●乱歩賞SPECIAL　新トラベルミステリー
オホーツク殺人ルート　西村京太郎　680円

鉄道推理
行楽特急ロマンスカー殺人事件　西村京太郎　640円

長編　新トラベルミステリー
南紀殺人ルート　西村京太郎　680円

鉄道推理
特急「おき3号」殺人事件　西村京太郎　680円

長編医学ハードロマン
癌病船　西村寿行　580円

動物小説代表作
捜神鬼　西村寿行　600円

講談社ノベルス　KODANSHA NOVELS

KODANSHA 講談社ノベルス NOVELS

金額はすべて定価です

長編国際冒険ロマン
碧い鯱
西村寿行 680円

生命賛歌ハードロマン長編
鬼狂い（ものぐるい）
西村寿行 640円

長編国際冒険ロマン
緋の鯱
西村寿行 680円

長編クライム・ロマン
地鳴りの家
西村　望 600円

性の遍歴を描く長編
背徳ごっこ
野坂昭如 680円

お多加師匠推理帖
三味線殺人事件
野坂昭如 640円

書下ろし経済小説
偽装取引
広瀬仁紀 620円

書下ろし企業情報小説
議決・社長解任
広瀬仁紀 660円

書下ろし経済小説
銀行疑獄
広瀬仁紀 620円

書下ろし経済小説
社長追放
広瀬仁紀 640円

●乱歩賞SPECIAL　革命の父のミイラの秘密
暗号のレーニン
藤本　泉 680円

書下ろし歴史海洋冒険小説
大海盗
藤岡　諭 660円

長編本格推理
殺人行おくのほそ道［上］［下］
松本清張 各580円

長編サスペンス
湖底の光芒
松本清張 660円

長編サスペンス
塗られた本
松本清張 660円

長編時代推理
異変街道［上］［下］
松本清張 各680円

書下ろし浮世絵は殺しの暗号
歌麿殺人事件
水野泰治 640円

書下ろし本格推理　暗号と「私の正体」
暗殺幻葬曲
水野泰治 640円

書下ろし　流氷ロケ殺人行
知床岬殺人事件
皆川博子 620円

書下ろし古典に隠された暗号文
光源氏殺人事件
皆川博子 660円

書下ろし時代劇バイオレンス
復讐鬼
峰隆一郎 680円

書下ろし歴史バイオレンス
讐鬼の剣
峰隆一郎 680円

長編本格推理
神より借りた砂漠
森村誠一 620円

長編本格推理
垂直の死海
森村誠一 640円

長編本格推理
捜査線上のアリア
森村誠一 640円

●乱歩賞SPECIAL　前代未聞の殺人プロジェクト
螺旋状の垂訓
森村誠一 680円

長編サラリーマン推理
社つと奴
森村誠一 660円

大手企業務追殺人事件
社賊
森村誠一 640円

長編本格推理　「行先不明列車」
銀河鉄道殺人事件
森村誠一 640円

傑作ミステリー
暗渠の牧場
森村誠一 680円

書下ろし将棋ミステリー
女流棋士殺人事件　本岡　類　640円

書下ろし　タイトル戦で人が死ぬ
飛車角歩殺人事件　本岡　類　620円

書下ろし本格推理
南海航路さんぷらわあ殺人事件　本岡　類　660円

書下ろし怪奇ミステリー
闇のなかの巡礼　森　真沙子　660円

書下ろし五月香ロケーションPART①　センチメンタル　エニユオ
慼傷戦士　森　雅裕　640円

書下ろし本格トリック推理
陸奥こけし殺人事件　山村正夫　680円

異色推理　疑惑の遺体メモ
死体化粧人　山村正夫　660円

長編本格推理
ガラスの棺　山村美紗　660円

傑作ミステリー
三十三間堂の矢殺人事件　山村美紗　640円

名探偵・令嬢キャサリンの推理
ヘアデザイナー殺人事件　山村美紗　640円

長編本格推理　白猫怪死の謎
京都紫野殺人事件　山村美紗　660円

長編本格推理　墜死した花嫁
京都新婚旅行殺人事件　山村美紗　640円

ミステリー傑作集
愛人旅行殺人事件　山村美紗　640円

国際経済情報小説
マネー危機　安田二郎　640円

金融情報小説
兜町最前線　安田二郎　660円

長編時代伝奇ロマン
闇の太守　山田正紀　640円

実録マージャン小説
伝説の雀鬼　柳史一郎　680円

伝奇スーパーアクション
黄金宮　夢枕獏　640円

ユーモアミステリー
奇想天外殺人事件　横田順彌　680円

長編新探偵小説
敗北への凱旋　連城三紀彦　620円

長編ベスト菌大量殺人事件
逆転法廷　和久峻三　680円

弟殺し法廷推理
断罪　和久峻三　660円

●乱歩賞SPECIAL　赤かぶ検事奮戦記
午前三時の訪問者　和久峻三　680円

赤かぶ検事奮戦記
アリバイは両刃の剣　和久峻三　660円

長編法廷推理
悪の扉［上］［下］　和久峻三　各660円

現代悪女ミステリー
死刑台の女　和久峻三　640円

長編推理　銀行オンラインジャック
一億分の一秒の侵入者　和久峻三　680円

長編法廷推理
失踪宣告　和久峻三　680円

講談社ノベルス　KODANSHA NOVELS